

何府 縣知事 姓名印

支何月

第七百九十九 八月二十四日 (兵部省)

是迄御扶持賄等被下置候處今般給祿御改正被 仰出候ニ付任職等内ノ面々ニハ來ル九月ヨリ不被下候事

第八百 八月二十四日 (集議院巡達)

待詔院當院へ御合併ニ相成候ニ付已來當院之印章ヲ以テ諸建白差廻候間爲心得印章相添此段申入候也

第八百一 八月二十五日(布)(太政官)

詔書

朕登祚以降海内多難億兆未タ綏寧セス加之今歲淫雨農ヲ害シ民將ニ生ヲ遂ル所ナカラントス朕深ク怵惕ス依而躬カラ節儉スル所有テ以テ救恤ニ充ントス主者施行セヨ

明治二年己巳八月二十五日

詔書被 仰出候通兵馬之後庶民未タ安堵ニ至ラサル折柄當年諸道不作物價日増ニ騰貴無告之窮民ハ勿論一同之難澁差迫リ殊更東京ハ近來衰微之砌人口ハ從前之通莫大ニテ遊民最多ク漸次產業ニ基クヘキ御施法モ未タ行届カセラレサル中今日ノ姿ニ相成且又京都ニ於テハ即今御留守ト相成自然職業ヲ失ヒ困窮ニ立至リ候者モ不少全ク時勢之變遷無據次第トハ申ナカラ必至難澁彼是以テ深被爲惱 宸襟格別之御節儉被 遊既ニ舖饌供給ヲモ御減少被爲 在窮民御扶助被 遊候就而ハ於諸官モ官祿ノ内ヲ以テ救恤ニ被充候様願出候段神妙ノ儀ニ被 聞食候右ハ 御不本意ニ被爲 在

三年第四十二ヲ以テ官祿納ヲ停ム

四年太政官第二百八十六ヲ以テ改ム

四年太政官第二百八十五同一年四月二日同一年四月五日同一年四月十五日同一年四月二十日同一年四月二十五日同一年五月一日同一年五月五日同一年五月十日同一年五月十五日同一年五月二十日同一年五月二十五日同一年六月一日同一年六月五日同一年六月十日同一年六月十五日同一年六月二十日同一年六月二十五日同一年七月一日同一年七月五日同一年七月十日同一年七月十五日同一年七月二十日同一年七月二十五日同一年八月一日同一年八月五日同一年八月十日同一年八月十五日同一年八月二十日同一年八月二十五日同一年九月一日同一年九月五日同一年九月十日同一年九月十五日同一年九月二十日同一年九月二十五日同一年十月一日同一年十月五日同一年十月十日同一年十月十五日同一年十月二十日同一年十月二十五日同一年十一月一日同一年十一月五日同一年十一月十日同一年十一月十五日同一年十一月二十日同一年十一月二十五日同一年十二月一日同一年十二月五日同一年十二月十日同一年十二月十五日同一年十二月二十日同一年十二月二十五日

四年太政官第二百九十九參看

四年太政官第二百二十一ニ依リ但津消波

四年太政官第六百八ヲ以テ柏崎縣改

候へ共願ノ趣至誠貫通セサルモ 御殘念ニ被 思食當年之處夫々減少返上之儀御許容相成兩京救荒ニ可宛行旨 御沙汰候事

但救荒ハ一時之變ニ處スル事ニテ總而遊手徒食之者無之様仕法立最可爲急務事

第八百二 八月二十五日(布)(太政官)

親王家ニテ菊御紋用來候處向後十葉之分ハ不相成十四五以下或ハ裏菊等品ヲ替へ御紋ニ不紛様可致旨被 仰出候事

第八百三 八月二十五日(布)(太政官)

社寺ニテ是迄菊御紋用ヒ來ル者不少候處今般御改正相成社ハ伊勢八幡上下賀茂等寺ハ泉涌寺般舟院等之外ハ一切被差止候旨被 仰出候事

但格別由緒有之社寺ハ由緒書ヲ以テ可伺出候事

第八百四 八月二十五日(布)(太政官)

從前諸寺院ニ掲來有之候下馬下乘等之札向後取拂候様被 仰出候事

但格別由緒有之寺院ハ其所之都府藩縣ニテ取調可伺出候事

第八百五 八月二十五日(布)(太政官)

非役華族并諸官人口向取次以下總テ東京へ家族引寄セ候儀可爲勝手事

但相當之御手當被下候事

第八百六 八月二十五日(布)(太政官)

越後國柏崎縣被取建候事

第八百七 八月二十五日(布)

來月四日戌刻 内宮正遷宮同七日同刻 外宮正遷宮

明治二己巳年八月 第八百二 第八百三 第八百四 第八百五 第八百六 第八百七

右兩夜東庭代 下御被爲遊 御拜候事

第八百八 八月二十五日(布)

就伊勢例幣從來八月廿九日晚到來月十二日朝 御神事從九日晚 御潔齋被爲遊候重輕服者僧尼參朝可憚事

但 御潔齋迄ハ政府出仕之輩服者不憚候事

第八百九 八月二十五日(沙)(太政官)

岩代國

巡察使

右被廢候事

第八百十 八月二十五日(沙)

其縣被取建支配地之儀ハ水原縣之内半方割渡候様被 仰付候間同縣ヨリ受取可申事

第八百十一 八月二十五日(沙)

今般柏崎縣被取建其縣支配地之内半方引渡候様被 仰付候事

第八百十二 八月二十五日(沙)

膽振國之内 有珠郡

右一郡共方支配ニ被 仰付候事

第八百十三 八月二十五日(沙)

膽振國之内 有珠郡

右一郡伊達藤五郎へ支配被 仰付候間引渡可申事

第八百十四 八月二十七日(兵部省)

柏崎縣

水原縣

伊達藤五郎

開拓使

山口藩 久留米藩 廣島藩

佐賀藩 津藩 德島藩
岡山藩 柳川藩

昨年來戰死之輩年號月日死傷并名乘年齡等相認可差出段申達置候處未タ無其儀向モ有之候右ハ今般御造立ニ相成候招魂社ニ相納メ永世御祭祀有之儀ニ付脫漏無之様イタシ度再應相達申候尤九月廿二日右大祭日ニ付前以取調其御宮中へ相納申候間同月十日迄ニ取調差出候様更ニ相達候事

第八百十五 八月二十八日(沙)

米三千石

米七百石

右窮民救助トシテ月々大藏省ヨリ相渡候條施行可致事

第八百十六 八月二十八日(沙)

今般本願寺東門主ヨリ北海道新道切立之儀且有志之僧徒新開村落へ移住人民教諭爲致度段願之通被差許萬事其府へ可伺出旨申渡候間此段相達候事

但北海道土地支配被 仰付候藩々へ爲心得其府ヨリ可相達事

第八百十七 八月二十八日(沙)

各通 金澤藩 鹿兒島藩 靜岡藩
名古屋藩 和歌山藩 熊本藩
廣島藩 福岡藩 山口藩

北海道開拓之儀ハ兼而被 仰出候通り即今之急務ニ而追々御手ヲ被爲著候處何分全國之カヲ用ヒスンハ成功無覺束依之今般別紙地所其藩へ支配開拓被 仰付候間拮据經營實効相立候様可致事(別紙ハ第八百十八ヨリ第八百二十六ニ至ルヲ謂フ)

十二箇月ニシテ止

四年太政官第六百八ヲ以テ柏崎縣改置

四年八月支配ヲ免ス

三年第四百十三ヲ以テ支配ヲ免ス

第八百十八 八月二十八日(沙)

金澤藩

三年十月支配ヲ免ス

北見國之内 宗谷郡 禮文郡 枝幸郡
右三郡其藩支配ニ被 仰付候事

鹿兒島藩

第八百十九 八月二十八日(沙)

四年八月支配ヲ免ス

十勝國之内 當縁郡 廣尾郡 河西郡
日高國之内 様似郡 浦河郡
右五郡其藩支配ニ被 仰付候事

静岡藩

第八百二十 八月二十八日(沙)

三年第四百十四ヲ以テ支配ヲ免ス

十勝國之内 十勝郡 中川郡 大津 河東郡 上川郡
右四郡其藩支配ニ被 仰付候事

名古屋藩

第八百二十一 八月二十八日(沙)

三年第五百四十八ヲ以テ支配ヲ免ス

北見國之内 斜里郡 網走郡
右二郡其藩支配ニ被 仰付候事

和歌山藩

第八百二十二 八月二十八日(沙)

四年太政官第四百二十六ヲ以テ支配ヲ免ス

北見國之内 紋別郡
右一郡其藩支配ニ被 仰付候事

熊本藩

第八百二十三 八月二十八日(沙)

三年十月依願支配ヲ免ス

根室國之内 目梨郡 標津郡
右二郡其藩支配ニ被 仰付候事

廣島藩

第八百二十四 八月二十八日(沙)

北見國之内 常呂郡 釧路國之内 網尻郡
右二郡其藩支配ニ被 仰付候事

第八百二十五 八月二十八日(沙)

後志國之内 久遠郡 奥尻郡
右二郡其藩支配ニ被 仰付候事

福岡藩

第八百二十六 八月二十八日(沙)

石狩國之内 樺戸郡 雨龍郡
天鹽國之内 増毛郡 留萌郡
右四郡其藩支配ニ被 仰付候事

山口藩

第八百二十七 八月二十八日(沙)

今般支配被 仰付候三郡之内宗谷郡之儀ハ御用之地所モ有之候ニ付開拓使へ可伺出事

金澤藩

第八百二十八 八月二十八日(大藏省)

此程租稅大積明細帳維形相達候内本米三斗五升ニ延米二升宛ト認メ有之候ハ全ク是迄取立來候關東國々ニ限リ候儀ニテ是迄取立來國々ハ別ニ取立候儀ニ無之其餘總テ舊慣ニ仍リ候儀ト可相心得爲念尙ホ相達候事

府 縣

第八百二十九 八月二十八日(兵部省)

今般副長ノ名號廢止相成以後一等二等士官ヲ以テ申付候此段相達候事

富士艦 船 將 中

第八百三十 八月二十九日(沙)

咸臨丸昇平丸自今共使所管ニ被 仰付候間大藏省ヨリ請取可申候事

開拓使

第八百三十一 八月二十九日(達)(太政官)

二十四藩觸頭

三年第五百七十九參照

三年二月昇平丸渡島國江差沖ニ沈没

三年第千三十二參照

五年四月大藏省達ニ依リ消滅

四年八月支配ヲ免ス

四年八月支配ヲ免ス

公議人ハ執參中ヨリ可相勸旨從前之御規則ニ有之今般御改正正權大參事即チ執參ニ相當候間此段
爲心得相達候事

久保田藩

四年八月支配ヲ免
ス

〔第八百三十二〕 八月二十九日（太政官）
千島國ノ内

國後郡

右一郡其藩支配被 仰付候事

〔第八百三十三〕 八月（民部省）

縣規則ノ内官名御變成ニ付大屬以下左ノ通可改事

十三等

大屬

四人

十四等

權大屬

四人

十五等

少屬

三人

十六等ノ一等

權少屬

五人

史生

但大屬以下職務ノ分課ハ知事ノ見込ニ任ス

總計十八人

右十方石高目安

十六等ノ二等

使部

二人

同

仕丁

二人

但縣掌ノ官名無之ニ付仕丁ニ改ムヘシ
右ノ外規則ノ儀ハ過日相達候通有之候也

〔第八百三十四〕 八月（大藏省）

府藩縣

舊旗下上知村々ノ儀租稅取立方區々ニ有之一定不致候ニ付當巳年ハ總體ニ檢見入申付巡村互細見
分ノ上土地ノ厚薄村柄ノ善惡等熟考ノ上至當ノ取調イタシ可被相伺候事

〔第八百三十五〕 八月（大藏省）

錢拂底衆民難澁ノ趣ニ付爲融通通商司爲替會社ニ於テ錢券製造近々ヨリ發行候間無疑念可令通用
候尤金札入用ノ者爲替會社ニテ引替遣シ候事

〔參照〕○六月二十八日（東京府）

先般金札御施行相成候處未々迄モ普ク流通致候ニ隨ヒ自然小札之分拂底ニ相成小商ヒノモノ共等ハ日用ノ取引殊更差
支難澁及候由相間且一般融通之任法商社共ヨリ申立之趣モ有之候ニ付同所ニテ銀三匁七分五釐宛之引替切手差出候儀
差許候間商業ニテ差支候者共ハ同所へ金札差出候ハ、預リ引替切手相渡可申猶金札入用ノ者ハ切手ト引替相渡候旨
ニ付右切手之儀小札同様向々差支ナク取引可致候右ハ近々商社ニ於テ引替日相立候間望之者ハ同所へ罷出可申立候事
右之振町中不涉様可相觸セノ也

〔第八百三十六〕 八月（土木司）

川々堤防橋梁道路等修繕ノ儀可否詮議ノ上府藩縣へ委任可施行旨此度御布告ノ趣ニ隨ヒ水配水防
トシテ場所場所へ出張罷在候附屬ノ者爲引拂候尤見込有之候場所ハ差出置候様可致候此段爲御心

三年第三百五十四
ニ依リ消滅

四年太政官第六百
二十三ニ依リ消滅

得及御達候也

五年太政官第六十二號ヲ以テ兵部省廢止

第八百三十七 八月 (兵部省)

兵學寮 武庫司 會計司 糺問司

兵部省中寮司右之通相立候條爲御心得申達候事

第八百三十八 九月二日(沙)

留守長官

一京師大學校御建替ニ付皇學所漢學所當分御廢之事

一是迄之御用掛リ不殘被免候事

一是迄皇學所祭典執行之學神一ト先神祇官へ返坐之事

一學神追テ神祇官ヨリ可被渡候事

一學政向小事ハ長官專決可致重事ハ伺之上可取行事

第八百三十九 九月二日 (右大臣)

按察使

民政ハ治國ノ大木至重之事トス 御一新以來專ラ億兆其所ヲ得テ生業勉勵候様トノ 御趣意之處

三陸磐城兩羽等之地ニ至テハ去年兵革打續平定ノ今日ニ當リ萬民猶未タ安堵セス 御仁恤ノ 御

趣意貫徹ニ至ラス實ニ大政之隆替ニ關係候間今般按察使トシテ被遣候付而ハ藩縣ノ政績ヲ熟察シ

地方官ト戮力協心專ラ 御趣意ヲ奉體シ政教治化其道ヲ盡シ上下之情ヲ貫通セシム可ク候事

兵部省

第八百四十 九月二日(沙)

元會津降伏人格別之寬典ヲ以テ北海道へ移住被 仰付候事

第八百四十一 九月二日 (民部省)

京都府 大阪府 堺 縣

其^{支配}地^所村々ノ内從前仕來ヲ以畑方木綿作檢見イタシ來候分御廢止相成候條當巳年以前十ヶ年

第八百九十參廿三
年第八ヲ以テ移住
八ヲ松平三郎ニ
交割ス

四年太政官第三百
九十九及九年第三
十八號布告參看

十五年第八號布告
ヲ以テ開拓使廢止

八年第六百六十四號
布告ヲ以テ樺太交
換ニ依リ消滅

又ハ十五ヶ年畑方正租平均ヲ以相當ノ定免取ニ可被取調事

第八百四十二 九月二日 (太政官)

諸省始府藩縣官員參 朝ノ節奏任以上ノ輩刀持上リ被差許候尤他省へ參仕ノ節準之候事

但官内ノ役員ハ判任ト雖モ是迄ノ通刀持參不苦候事

第八百四十三 九月三日(達)(右大臣)

開拓使へ

一北海道ハ 皇國之北門最要衝之地ナリ今般開拓被 仰付候ニ付テハ深ク 聖旨ヲ奉體シ撫育之

道ヲ盡シ教化ヲ廣メ風俗ヲ敦スヘキ事

一内地人民漸次移住ニ付土人ト協和生業蕃殖候様開化心ヲ盡スヘキ事

一樺太ハ魯人雜居之地ニ付專ラ禮節ヲ主トシ條理ヲ盡シ輕卒ノ振舞曲ヲ我ニ取ルノ事アル可ラス

自然渠ヨリ暴謾非義ヲ加ル事アルトモ一人一己ノ舉動アル可ラス必全府決議之上是非曲直ヲ正

シ渠ノ領事官ト談判可致其上猶忍フ可カラサル儀ハ 廷議ヲ經全國之力ヲ以相應スヘキ事ニ付

平居小事ヲ忍テ大謀ヲ誤マラサル様心ヲ盡スヘキ事

一殊方新造之國官員協和戮力ニ非サレハ遠大之業決シテ成功スヘカラサル事ニ付上下高卑ヲ論セ

ス每事巳ヲ推シ誠ヲ披キ以テ從事シ決シテ面從腹非之儀アル可カラサル事

第八百四十四 九月三日(沙)

開拓使北海道

今般北海道出張不容易艱難太儀之事ニ候其成否 皇威之汚隆ニ關係候間各同心戮力シテ勉勵從事

可參其功旨 御沙汰候事

増上寺

第八百四十五 九月三日(沙)

日高國之内 靜内郡

三年第六百六十四
ヲ以テ支配地ヲ改
メ四年八月支配ヲ
免ス

五年太政官第三百五十七號參看

六年太政官第七十七號ヲ以テ改ム

五年太政官第六十三號ニ依リ但書消滅
四年十二月十日東京ニ移ル

四年八月支配ヲ免ス

右其寺支配被 仰付候事

第八百四十六 九月四日 (太政官)

是迄節朔參賀之節御祝酒被下候處今般窮民御救恤之爲メ供御ヲモ被爲減候儀ニ付向後 聖誕日歳日年末之外ハ不被下候間此旨爲心得相達候事

第八百四十七 九月四日 (太政官)

參議下乘下馬中仕切御門外之事

第八百四十八 九月四日 (沙)

各通 仁和寺門跡 大覺寺門跡 勸修寺門跡

從來其寺ニ於テ永 宣旨ヲ以テ僧官差免來候得共今般御一新ニ付向後被廢止候間此旨相達候事
但是迄許置候向ハ一代切可爲其儘事

第八百四十九 九月四日 (京都兵部省)

當省兵學校大坂へ被移候條至急用意可致候事

第八百五十 九月五日 (布) (太政官)

來十二日澳太利亞國公使參 朝候間此旨相達候事

第八百五十一 九月五日 (達)

兵部省

石狩國之内

濱益郡 厚田郡ノ内 忍路コツ

札幌郡ノ内 ツイシカリ 札幌郡

後志國之内

忍路郡 余市郡

美國郡 古平郡

右其省支配被 仰付候事

第八百五十二 九月六日 (民部省)

職員出處何藩何府何縣或ハ官人或ハ辨官支配同附又ハ某家來草莽ハ其國所委細取調肩書ニ致シ職員錄早々可被差出候事

第八百五十三 九月七日 (太政官)

今般澳太利國ト條約御取結相成候ニ付此旨相達候事

(參照) ○日本國澳地利洪噶利國修好通商航海條約

明治二年己巳九月十四日(西曆千八百六十九年第十月十八日)於東京朝印

日本 天皇陛下ニ澳地利 皇帝陛下密等のキング兼洪噶利アポストリック、キング陛下兩國の交際と永久親睦にし且兩國臣民の貿易と容易ならしめん事と欲し其か爲め和親貿易航海の條約と結はん事と決し日本 天皇陛下は澤外務卿守從三位清原朝臣官嘉、寺島外務大輔守從四位藤原朝臣宗則と其全權に命し澳地利 皇帝兼洪噶利アポストリック、キング陛下は第三等水師提督特派全權公使ナイト、フ、ズイ、ミリタリ、フォルドル、ラフ、マリヤ、テレサ貴族アング、ニーデ、ベツツと其全權に命し雙方互に其委任狀を示し其狀實良好にして適當たるを察し以て左の條々を協議決定せり

第一條 我に條約と結へる兩國並其人民の間に永世の平穩無窮の和親あるへし

第二條 日本 天皇陛下はウカエンナの朝廷にデプロマチック、エゼントを置事を得又他國のコンシユラル官吏在留する事と許せる澳地利及洪噶利の港及市中に日本コンシユラル官吏とも命し得へし日本のデプロマチック、エゼント及ヒコンシユラル官吏は互の約束にて澳地利及洪噶利に於て他國のデプロマチック、エゼント並コンシユラル官吏と同様今或は此後受くヘキ別段の免許並に權受ヘキなり澳地利 皇帝兼洪噶利アポストリック、キング陛下は日本に其デプロマチック、エゼント、コンシユル、ゼチラールを命し又日本何れの開港場何れの開市場にもコンシユル或は副コシユル或はコンシユラル、エゼントを命し得へし此官吏等は日本政府と最も親なる國のコンシユラル官吏と同様

別段の免許及び権を受け得し澳地利 皇帝兼澳地利アポストリック、キング、陛下より命するデプロマチック、エゼント並コンシユル、ゼテラールは日本の諸部と故陸なく旅行し得し且裁判すへき権ある澳地利兼澳地利のコンシユラル官吏は若し其裁判すへき境界中にて澳地利及澳地利船の破船するか或は人命及貨物に危害等の事ある時は其事實を監察する為め其場所を去り得し然りと雖も澳地利兼澳地利コンシユラル官吏其時に當て先其土地の日本官府へ其趣意並其赴く所の場所を書翰にて告知すへし其節は日本官府より重立たる官吏として必ず之を同道せしむべき也

第三條 横濱(神奈川県の内)兵庫大阪長崎新潟(並に佐州奥港)箱館の市街及び港並に東京の市街に此條約施行の日より澳地利及澳地利の人民及び其交易の爲めに開くへし前條の市街及び港に於て澳地利及澳地利の人民永久居住する事を得し故に地所を借り家屋を賃ひ住宅倉庫を建てる車勝手たるへし○澳地利及澳地利の人民の住すへき場所並に其家屋を建へき場所は澳地利兼澳地利コンシユラル官吏其地に在る相當の日本官吏と相談の上之を定むへし又港則も右同様たるへし若し澳地利兼澳地利コンシユラル官吏及び日本官吏此事に付議定し得ざる事あらば之を澳地利兼澳地利のデプロマチック、エゼント及び日本政府へ申立へし○日本人は澳地利及澳地利人民住すへき場所の周圍に牆壁或は柵門を設けず其他自由の出入を妨ぐへき圍ひを築まざるへし○澳地利及澳地利の臣民無故陸歩行すへき境界は左の如し

横濱(神奈川県の内)にては六郷川を限とし其外は諸方十里とす○兵庫にては京師の方は京と距る事十里の地に限り他の諸方は皆十里とす○大阪にては南は大和川口より舟橋村迄夫より教興寺村を通し佐太沓線を引き之を限りとす堺の市中は右線の外なれ共澳地利及澳地利人に歩行を免すへし○長崎にては其周圍に在る長崎縣の支配地と限とす○新潟箱館に於ては諸方へ十里とす奥港にては佐州全島とす○東京に於ては新利根川口より金町迄夫より水戸街道に沿ひ千住宿迄夫より隅田川の川上へ登り古谷上郷迄夫より小室村高倉村小矢田村荻原村宮寺村三木村田中村の諸村落より六郷川に於て日野の渡場迄と限とす○右十里の距離は前條各所の裁判所より陸上を算すへし其十里は澳地利の一萬二千三百六十七フット英吉利四千二百七十五ヤード佛蘭西三千九百十メートルに宛る○若し澳地利及澳地利の人民前條の規則を犯し境界に出る事あらば是是罰銀百枚の罰金と拂ふへし若し再び犯す時は二百五十枚の罰金と拂ふへし

*長崎遊歩規程ノ圖
明治三十二年十二月
二十五日各公使へ
達ス

第四條 日本に在留する澳地利及澳地利人民は其自國の宗教を自由に行ひ得へし故に其居留地に其宗教を奉ずる爲め
宣社を營む車勝手たるへし

第五條 日本に在留する澳地利及澳地利人の間に身上或は其所持の品物に付て争論起る事あらば澳地利兼澳地利官吏
の裁斷に任すへし

日本長官は澳地利及澳地利の人民と他の條約外國人との間に起る争論にも亦關係する事なかるへし
若し澳地利及澳地利の人民より日本の人民に對し訴訟する事あらば日本長官此事件を裁斷すへし
若し日本人より澳地利及澳地利人に對し訴訟する事あらば澳地利兼澳地利長官之を裁斷すへし

若し日本人澳地利及澳地利人に遺債ありて之を償ふ事と認り或は欺偽を以て逃走せんとする時は相當の日本長官是
を裁斷して其債主より遺債を償はしむる爲め諸事に力を盡すへし又澳地利及澳地利人欺偽を以て逃走せんとし或は
日本人に遺債を償ふ事と認る時は澳地利兼澳地利長官正しく裁斷し遺債を償はしむる爲め諸事に力を盡すへし

第六條 日本人民或は他國の人民に對し惡事をなせる澳地利及澳地利人民は澳地利兼澳地利コンシユラル官吏に認へ
澳地利及澳地利の法度を以て罰すへし

第七條 此條約或は之に附屬する貿易の規律又は税則を犯せるに付取立へき罰金或は其物を取揚る事は澳地利兼澳地利
利コンシユラル官吏の裁斷に因るへし其取立たる罰金或は取揚品は都て日本政府に屬すへし

取押へたる荷物は日本長官並に澳地利兼澳地利コンシユラル長官にて其荷物に封印をなし澳地利兼澳地利コンシユ
ルにて裁斷する迄は運上所の倉庫に取押へ置へし

若し澳地利兼澳地利コンシユル其荷主又は引請人正理なりと裁斷する時は其物品を遂にコンシユルへ引渡すへし然
りし雖も日本政府若し右コンシユルの裁斷に同意せず尙高官の裁判によらん事と欲せば右荷主又は引請人其品物の
代料を其裁斷済迄澳地利兼澳地利コンシユルへ預くへし取押へたる荷物容易に腐敗損傷すへき質の物なれば其裁判
済ざる共其代價を澳地利兼澳地利コンシユル所預り荷物は荷主或は其引受人に渡すへし

第八條 貿易の爲め開き又は開くへき日本の諸港に於て澳地利及澳地利人民は澳地利及澳地利領或は他邦の港より禁
制に非ざる諸種の貿易品を輸入し是を販賣し又は是を買入れ澳地利及澳地利或は他邦の港に輸出する車勝手たるへ

し此條約に附屬する税目に準たる租税而己を相納め他の諸税は總て拂ふに及ばず
若し日本運上所の官吏商人より申立し價に付て異存ある時は其商物に價を極め其極めたる價にて買入る事を許し得
へし

若し荷主此價附にて承諾せざる時は日本運上所官吏の極めたる價に従て其税銀を收むへし若し其價附にて承諾する
時は其談せし價を少しも減する事なく直ちに荷主に拂ふへし

第九條 澳地利及洪噶利の商人は日本の開港場へ商物を輸入し其租税を納めし上は日本運上所長官より其商稅收め濟
の證書を請ひ得へし且此證書あらば右商物と再び日本の他の開港場に入出する其又商稅を納むるに及ばざるへし

第十條 日本政府諸開港場に於て倉庫を取建る事と務むへし且其倉庫は輸入する人或は荷主の願に任せ其品物の運上
を納る事なく其品を藏め置き得へし

日本政府にて其品物を預り置問は損害なき様に引受くへし尤外國商人等の入置ける品物の爲火難の受合とたて得る
様政府に於て總て肝要なる設けとなすへし又其商物を輸入する人或は荷主是を倉庫より引取らんとする時は運上目
錢通りの運上を拂ふへし其品物を再び輸出せんを欲する時は運上を納るに及ばず

品物と引取る箇は孰れにも藏敷と拂ふへし右藏敷高並に貨棧取扱向の規則は雙方相談の上之を定むへし

第十一條 澳地利及洪噶利人民日本國の開港場に於て買入たる日本産物と日本他の開港場に諸稅を拂ふ事なく輸送す
る事勝手たるへし

若し澳地利及洪噶利商人日本の産物と日本の開港場より他の開港場へ輸送せんを欲する時は其品物を輸出する時拂
ふべき運上と運上所へ預け置へし六箇月の内に他の開港場へ右荷物を陸揚せし趣と示せる證書を其地の運上所より
持參せば右預り置たる運上は無異論速に返却すへし

他邦の港へ輸出すると禁する品物は前條に定めたる期限内に前條の證書を差出さざる時は荷積せし者右品物の代價
を償らす日本官吏へ拂ふべき趣を配めたる證書を差出すへし

然りと雖も其船若し開港場より他の開港場へ運送する航海中破船する事あらば右運送先の運上所證據の代りに破船
せしむる證據を別に持來るへし尤澳地利及洪噶利人は右證據を一個年の内に差出すへし

第十二條 澳地利及洪噶利の人民日本開港場内に輸入し此條約に定たる商稅納濟の諸貨物は日本人又は澳地利及洪噶
利人に拘はらず其荷主より日本國の諸部に輸送せしめ得へし勿論之に租稅或は運送の運上等何等の稅とも拂ふ事な
かるへし

日本の産物は陸路水路修復の爲め諸商賣に付て取立る通例の運上の外別に運送の運上を收る事なく日本人は日本の
内何れの地より諸開港場へ運送する事勝手たるへし

第十三條 澳地利及洪噶利の人民は諸種の商物と日本人より買入れ又は日本人に賣渡す事を得へし其賣買或は代價受
取り拂ひの時に當て日本官吏之に關係する事なかるへし

日本人は澳地利及洪噶利或は日本の開港場に於て澳地利及洪噶利人民より諸種の商物と日本官吏の立合なく買入れ
又之を貯藏し及び之を其用に供し或は再び販賣する事勝手たるへし尤日本人は澳地利及洪噶利の人民と貿易するに
付ては日本人相共に商賣するに付取立る運上の外は日本政府にて取立ざるへし

總て日本人民は現在取締の規則を守り定例の運上を納る時は一般の通則に従て澳地利及洪噶利又日本諸開港場に赴
き其場所にて日本官吏の立合なく澳地利及洪噶利人民と交易する事勝手たるへし

總て日本人は日本産物又は他國の産物を日本開港場へ或は日本の開港場より或は日本開港場の間に或は他國の港よ
り或は他國の港へ日本人民或は澳地利及洪噶利人民所持の船に積入輸送する事勝手たるへし

第十四條 此條約に添ふる交易の規律並に運上目録は此條約と一體となせる者にして雙方共堅く之を守るへし
日本に於て澳地利兼洪噶利がプロマチック、エゼント日本政府より任する官吏と協議して此條約に添ふる交易規律の
趣意と施行する爲交易の爲開きたる諸港に於て緊要至當の規律を立るの權あるへし日本官吏各港に於て奸曲並に密
商を防ぐため至當の規律を設くへし

第十五條 日本政府は日本に在留する澳地利及洪噶利の人民日本人と通譯或は帥表名使等の諸役に使用し是と法度に
違背せざる諸用に給する事を妨げざるへし然りと雖も若し此日本人非科を犯す時は日本の法度を以て罰すへし○日
本人は澳地利及洪噶利の船中に於て諸般の職事に雇はる事勝手たるへし○澳地利及洪噶利人の雇置ける日本人若し其
雇主に同道し海外に出る事と其地の官府に願出する時は政府の免許を得へし

既に日本慶應二年丙寅四月九日西洋千八百六十六年五月二十三日日本政府より觸書を以て布告せし如く日本人は
其筋より政府の印章を得れば修業或は商賣の爲澳地利及洪噶利に赴く事妨げなかるへし

第十六條 日本政府は速に日本貨幣製造法に緊要の改正を爲すを務むへし且日本重立たる貨幣製造局並に諸開港場に
於て取建つべき貨幣局にて外國人及び日本人は其身分に拘はらず諸種の外國貨幣及び種金銀を其吹換人用と差引き

日本貨幣と同一真價の割合を以て引換ゆへし此吹換人用は雙方協議の上定むへし
 澳地利及洪噶利人日本人民互に拂方を爲すに外國或は日本の貨幣を用ふる事勝手たるへし
 日本銅錢を除き諸種の貨幣並に貨幣に造らざる外國の金銀は日本國より輸出する事を得へし
 第十七條 日本政府は澳地利及洪噶利人貿易の爲め開きたる各港の最寄に船々の出入安全の爲燈明燈塔浮木並に
 圖標を備ふへし
 第十八條 澳地利及洪噶利の船日本の海岸にて或は破船し或は漂着し或ハ已むを得ず日本の港内に避け来る事あらば
 相當の日本長官を通知するや否速に其船に可成文け扶助を加へ其船中の人々を懇に取扱ひ費用なる時は其人々に最寄
 の澳地利兼洪噶利コンシユル館に赴くべき方便を與ふへし
 第十九條 澳地利及洪噶利海軍備用の諸品は日本國の諸開港場に陸揚し澳地利及洪噶利官吏の保護する倉庫に藏め置
 へし尤夫が爲め租税を納むる事なしと雖も若し此備用品を日本人或は外國人に賣る事あらば其買主より相當の租税
 を日本長官に納むへし
 第二十條 日本 天皇陛下他國の政府及び其人民に與へ或は尙後與へんことを總て別段の免許及び便宜は澳地利及洪
 噶利政府並に其人民にも此條約施行の日より免許あるべきを今爰に確定せり
 第二十一條 來る壬申年即千八百七十二年七月一日或は其後に至り此條約貿易定期並輸入輸出の商税を實験し緊要
 なる變革或は改正を加ふる爲め是を再議し得へし然りと雖も此再議の趣は一箇年前に告知すへし若し日本 天皇陛
 下此期限前に各國の條約を改議せん事を欲し其事に付て他の條約濟の各國にて同意せば澳地利及洪噶利政府も亦日
 本政府の望みに従ひ此會議に加るへし
 第二十二條 澳地利兼洪噶利のデプロマチック、エゼント或はコンシユラル官吏より日本長官に贈る總て公の書翰は獨
 逸語を以て記すへし然りと雖も便利の爲め此條約施行の日より三箇年の間は英語或は日本語の譯文を添ふへし
 第二十三條 此條約は獨逸文二通英文三通日本文二通各七通に認め其文意は各同義なりと雖も文意相違する事あらば
 英文を原と見るへし
 第二十四條 此條約は日本 天皇陛下及び澳地利 皇帝兼洪噶利アポストリック、キング陛下互に名を記し印を調して
 確定し本書は十二箇月の内或は可成は其以前に取替すへし此條約は今日より施行すへし
 右證據として雙方の全權此條約に名を記し印を調するものなり

日本明治二己巳年九月十四日
 西洋千八百六十九年十月十八日
 於東京

澤 外務 卿 從三位 清原 宣嘉 花押
 寺島 外務 大輔 從四位 藤原 宗則 花押
 フライヘル、フォン、ベッツ 印

* 二十四時期限内外
 ニ心付キ書改メ書
 入スル條中ニアル
 ニケ處ノ罰金ハ手
 數科ヲ云フナリ

* 英獨文ニ據ルニ日
 本運上所へ次ニ定
 ルタメ通り相當ノ

○日本に於て澳地利及洪噶利人交易を爲す定期
 第一則 澳地利及洪噶利日本の港に着して後西洋四十八時中日曜日を除く甲比丹或は船司より日本運上所の官吏
 預けたる旨を示せる者なり其上右甲比丹或は船司より書付と差出し其船の入港手數を爲すへし右書付は船號並に其
 船の出帆し來りし港の名噸數甲比丹或は船司の名又船中に旅客あらば其旅客の名並に其船の乗組人數と認めたる者
 にして右甲比丹或は船司其書付の無相違と證し其名を自記する者なり右書付と共に右甲比丹或は船司其積荷の告
 書とも預くへし是は包貨の記號及び番號並に其品物の種類斤數と其送狀に認めある通りに記號し荷物受人の名と
 記したる者なり且船中用意品の目録も右書付へ加ふへし但し甲比丹或は船司右書付は其船の積荷及船中用意品
 の無相違書付なる事と證し是に其名を自記すへし
 若し右書付中相當の帳と心付きたる時西洋二十四時(日曜日を除く)中は之を書き改むる共罰金と拂ふに及ばず然り
 雖も此期限後に之を書改むるか或は之に書入するに於ては墨斯哥銀十五枚の罰金と拂ふへし
 告書中に漏れたる諸品物の爲運上の外別に罰金を拂ふへし其罰金の高は其品物の爲に拂ふ運上と同じ
 甲比丹若しくは船司此定期に示したる期限内に日本運上所へ其船の入港手數を爲すと忘らば右入港手數を忘る日毎
 に墨斯哥銀六十枚の罰金と拂ふへし
 第二則 日本政府は其港内へ入津なせし各船(軍艦を除く)に運上所官吏と差置き得へし○船中にて右運上所官吏を
 丁罪に取扱ひ且可成文け相當の用便をなすへし○日没より日出迄の間は運上所官吏より別段の免許なければ船より
 品物と卸すへからず且船口外總て船中荷物の納れある場所の入口には日没より日出迄の間は日本官吏に封印を
 なし或は錠を鎖し或は堅く固封し置くへし若し免許なくして日本運上所官吏の固封し置たる入口の封印等を破り又
 は取除く事あらば其犯したる人々犯せし毎に墨斯哥銀六十枚の罰金と拂ふへし○日本運上所へ相當の差出書と出さ
 ずして荷物を船中より卸し或は卸さんと謀れる時は其品は次に定めたる通り捕押へ且取り上へし○包貨の中目録中

差出書ヲ出サスシテ荷物ヲ船中ヨリ卸シ或ハ卸サント課レル時ハ其品ヲ捕押ヘ且取上ヘシトノ意ナリ

運上所官吏云々英文獨文共ニ運上所ノ官吏ニテ取扱フ事故障アル可ラストノ意ナリ

に載せざる價ある品々を載し以て日本の收納を減せん意にて仕組たる者は取り上へし○若し澳地利及洪嚙利船日本の開かざる港に於て諸品を密商し或は密商せんと謀る時は其諸品を日本政府に取り上げ犯せし毎に其船より墨斯哥銀一千枚の罰金を拂ふへし○修復を要する船は運上と拂はすして其積荷を陸揚し得へし右陸揚したる諸品は日本官吏にて預りあるへし且該船人足貫並に守護の爲め都て相當の入費は拂ふへし然りも若し其積荷の内を毀損し事あらば其費たる分は定例の運上と拂ふへし○積荷と同港内の他船へ移すには別ニ運上を拂ふに及ばずも日本官吏見分して事實無相違を知り然る後船移の爲日本官吏より渡す免狀を以て移すへきなり若し右免狀を受ずして船移せし者は其犯せる毎に墨斯哥銀六十枚の罰金を日本政府に納むへし○阿片を輸入するは禁制なれば交易の爲日本に渡來する澳地利及洪嚙利の各船其船中に三斤以上の阿片を所持する時は其船は日本政府へ取押へ減却すへし且阿片を密商し又は密商せんを謀りし者は右密商し或は密商せんと謀りし阿片の高一斤毎に墨斯哥銀十五枚の罰金を拂ふへし

第三則 荷主或は荷物の引受人荷物を陸揚する事と願ふ時は其荷物の差出書と日本運上所へ出すへし此差出書は差出を爲す人の名又其荷物を輸入せし船の名其記號番號積荷の種類斤數並に各種の價と認たる者にして此差出書中に載たる諸物價の總計と其書面の末に記すへし荷主又は荷物引請人其差出書は諸品の眞價と載する趣と差出書に記して之を證し又日本運上の書なるへき物は隠し置かざる旨を證すへし且荷主或は荷物引請人此差出書に其名を自記すへし○差出したる荷物目録の本書は運上所の官吏へ差出し官吏其差出書中に記したる品々を開へ終る迄其本書は官吏の手に留め置へし○日本官吏ハ右差出したる荷物の一部或は總體をも改め得へし又改むる爲其荷物を運上所へ持來り得へし然りも雖も之を改むるに付ては輸入人は其失費を拂ふ事なく又品物の損せざるやう取扱ひ改済の上は日本人再び其荷物を可成丈其元形に包装すへし且之を改むるには不用の時日を費さるへし○荷主又は輸入人其荷物を請取らざる前輸入の途中にて損傷あるを見出す時は運上所の官吏へ其損傷の趣を知らせ其輸にして廉潔なる人二人或は二人以上にて其價を極めしむへし但し其人々篇と檢査の後各包の損し高と歩割に記し其記號番號を認めし證書を出すへし尤其證書には運上所官吏の立會にて右價附となしたる人々其名を自記すへし且輸入人は其證書を差出書へ添へ相當の高を引落すへし○然りも雖も此定則に添ふたる條約第八箇條に載する通り荷物に價付する事に付運上所の官吏之を妨ぐへからず○運上拂濟の後には荷物を渡すへき免狀を荷主へ渡すへし荷物は運上所にても船中にても渡すへし輸出せんとする諸品は船中へ輸送する前日本運上所に差出を爲すへし其差出は書面にして其荷物を輸出すへき船名並に包貨の記號番號其荷物の斤數及ひ代價と記載すへし輸出入右差出書中に載たる諸品の無相違と認め以て之を證し之に其名を自記すへし○運上所に差出を爲さるる以前輸出の爲船中に送りたる品々並

爲シ得ヘシハ爲ス可シトノ意義ナリ

諸外國船云々英文

に禁制の品々を包入せし荷物は總て日本政府へ取上へし○船々其乗組又は旅客の用物或は旅客の衣服等に運上所へ差出を爲すに及ばず○日本官吏疑敷思ふ品物は右官吏是を取押置へし然りも雖も日本官吏直に其事を澳地利兼洪嚙利コンシユラル官吏に告知すへし○澳地利兼洪嚙利コンシユラル官吏取上る事に裁判せし品物は直に日本長官へ渡すへし且澳地利兼洪嚙利コンシユラル官吏より言付し罰金の拂方は其官吏速に催促し日本長官に收むへし

第四則 出港と願ふ船々は西洋二十四時前に運上所に告知すへし此期限後には其船出港すへき理ありも雖も其出港と否む時は運上所の官吏等速に甲比丹又は其船の引請人に右出港と否むと告げ又其趣を澳地利兼洪嚙利コンシユラルに知らすへし船司運上所より與ふる諸運上拂濟の證書と持參せされは澳地利兼洪嚙利コンシユラル類と船司へ渡すへからず○澳地利及洪嚙利の軍艦は運上所へ入港又は出港手数を爲すと要せず又其軍艦には日本運上所官吏或は取締の官吏來る事なし○澳地利及洪嚙利の蒸氣飛脚船は同日に入港と出港と爲し得へし且日本に上陸する旅客並に陸揚する品々の外は告書を差出す事と要せざるへし然りも雖も右蒸氣船は何れの時に在ても運上所へ入港並に出港手数を爲し得へし

第五則 日本に收納と害せん爲に爲の告書或は證書へ名を自記したる者は其犯す毎に墨斯哥銀百二十五枚の罰金を拂ふへし

第六則 噸税は日本の港に於て澳地利及洪嚙利船より取立る事なし但し次に定めたる噸税は運上所官吏に差出すへし一船の入港手數に付墨斯哥銀十五元一船の出港手數に付墨斯哥銀七元總て此規則に載する荷物船積陸揚の免許に付ては謝銀と出す事なかるへし

第七則 總て日本に陸揚したる品々並に輸出せんと欲する品々は此書に載ふる運上目録に従ひ日本政府へ運上と拂ふ(し) 陸揚状等の如き他の證書に付て墨斯哥銀一元半

第八則 何れの日本人も日本開港場又は海外に於て旅客又は荷物を運送すへき各種の帆船船蒸氣船とも買入る事勝手たるへし尤軍艦は日本政府の免許なければ買入る事を得ず

日本人買入たる諸外國船蒸氣船は一噸に付一分銀三箇帆船船は一噸に付一分銀一箇の運上と定め通り相納る時は日

獨文ニハ澳地利及
ヒ洪嘴利船トアリ
船目錄トハ船籍ヲ
云フナリ

本の船として船目錄に書載すへし尤其船の噸數を定むる爲日本長官の需に應し其筋のコンシユルより本國の船目錄の寫を相示し其眞と證すへし○軍用諸品は日本政府及外國人にのみ賣渡すへし

第九則 日本に在留する澳地利及洪嘴利人及び澳地利及洪嘴利船の乗組人又は旅客自己の入用に滿つる丈は輸出目錄に載たる輸出禁制品の穀物並に粉を賣入るゝ事と許すへし尤右穀物並に粉を澳地利及洪嘴利船に積入るゝする前必ず通例の通り運上所より船積の免許狀を得べきなり

禁制品物及び諸粉類を諸開港場の間に輸送する事に付日本政府はに故障をなさざるへし

然りと雖も若し日本人並に外國人右品物を開港場より運送する事に付格別の事故ありて當分の内是を禁せん欲せば日本政府右の趣意を二箇月前に外國の長官に告知すへし且此禁制品は事實不得止の時而已にして速に此禁を解く事に日本政府は注意すへし

第十則 此稅則に載する日本一斤(即百六十目)は佛蘭西の六百零四グラム五十三センチグラム又は英吉利一ポンド三分の一澳地利の一ポンド零八厘に當る○一ヤードは英吉利尺度三フットに當り佛蘭西の九百十四ミリメートルに當る英吉利の一フットは佛蘭西の三百四十二ミリメートルに當り日本曲尺の一尺より一寸の八分一丈は長し○材木の一コクは英吉利十立方フット又は米利堅厚サ一インチの木尺百二十フットに當る○一分(目方二文目三分)は銀貨にして其重サ佛蘭西の八グラム六十七センチグラム(英トロイ重百三十四グレイン)より下らす其質は純銀九分以下らす其交せ物は一分より多からざるへし○一セントは一分と百分せし一と云ふ

第十一則 運上所積取扱荷物の陸揚船積及び船入足小遊等雇方に付開港場に於て是迄訴訟の起りし不都合を除かんか爲に各開港場の長官外國のコンシユルと談判し雙方協議の上右不都合決して生ぜざる様規則を立て日本人と外國人の交易並に其用向と可成丈け都合能相使し且安全ならしむる様雙方共に議定せり諸開港場に於て荷物陸揚船積の爲に用ふる波戸場の内にて品物を船積する前又陸揚する後暫時假に納るため小屋掛けと日本政府にて作るへし

明治二己巳年九月十四日
千八百六十九年第十月十八日

於東京

澤外務卿從三位清原宣嘉 花押
寺島外務大輔從四位藤原宗則 花押
フライヘル、フォン、ベツツ 印

輸入品運上目錄
第一種

號	品名	毎	一分銀	一分銀
一	明礬	百斤	〇一五	二二五
二	檳榔	同	〇四五	六七五
三	銅ボタン	同	〇二二	三三
四	蠟燭	百斤	二二五	三七五
五	帆木綿類	百斤	〇二五	三七五
六	卷刈草	一斤	〇二五	三七五
七	丁子並母丁子	百斤	一	三七五
八	コシニール	同	二二	三七五
九	繩(船用)	百斤	一二五	三七五
一〇	練綿	同	一二五	三七五
一一	木綿織物類	同	一二五	三七五
	生金巾			
	白綾金巾			
	染無紋金巾			
	寒冷紗			
	コイルチング			
	晒金巾			
	白紋金巾			
	雲霧木綿			
	更紗形寒冷紗			
	コットネット			
	小巾金巾			
	染紋金巾			
	カムブリックス			
	柳條布			
	更紗類			
	右品々染色			
	甲) 巾 三十四インチ		〇〇七五	一一二五
	乙) 巾 四十二インチ		〇〇八七五	一一三二五
	丙) 巾 四十六インチ		〇一	一一五
	丁) 巾 四十八インチ		〇一二五	一六八七五
	唐摺類又布			
	巾 三十二インチ		〇一七五	二六二五
	巾 三十四インチ		〇二五	三七五
	巾 三十八インチ			
	巾 四十二インチ			
	巾 四十六インチ			
	巾 四十八インチ			
	巾 五十二インチ			
	巾 五十六インチ			
	巾 六十インチ			
	巾 六十四インチ			
	巾 六十八インチ			
	巾 七十二インチ			
	巾 七十六インチ			
	巾 八十インチ			
	巾 八十四インチ			
	巾 八十八インチ			
	巾 九十二インチ			
	巾 九十六インチ			
	巾 一百英寸			
	巾 一百零四英寸			
	巾 一百零八英寸			
	巾 一百一十二英寸			
	巾 一百一十六英寸			
	巾 一百二十英寸			
	巾 一百二十四英寸			
	巾 一百二十八英寸			
	巾 一百三十二英寸			
	巾 一百三十六英寸			
	巾 一百四十英寸			
	巾 一百四十四英寸			
	巾 一百四十八英寸			
	巾 一百五十二英寸			
	巾 一百五十六英寸			
	巾 一百六十英寸			
	巾 一百六十四英寸			
	巾 一百六十八英寸			
	巾 一百七十二英寸			
	巾 一百七十六英寸			
	巾 一百八十英寸			
	巾 一百八十四英寸			
	巾 一百八十八英寸			
	巾 一百九十二英寸			
	巾 一百九十六英寸			
	巾 二百英寸			

熱鐵ノ儀ニ付明治
七年(千八百七十
四年)五月十日約
定アリ

號	品名	毎	一分銀	一分銀	分數	分數
一四	稿布	同	〇〇六	九	二八	二二
一五	巾(三ツイン)	同	〇〇九	一三五	二九	一一
一六	巾(四ツイン)	同	〇〇五	七五	三〇	〇八
一七	手拭	同	〇〇五	三五	三一	〇五
一八	木綿織紵	同	〇二五	三五	三二	〇五
一九	飯糰掛	同	〇〇六	三五	三三	〇五
二〇	木綿ヨリ糸	同	七五	三五	三四	〇五
二一	同片ヨリ糸	同	七五	三五	三五	〇五
二二	白并染色	同	七五	三五	三六	〇五
二三	但春真ノ有無	同	七五	三五	三七	〇五
二四	ニ物ワラス	同	七五	三五	三八	〇五
二五	木綿糸	同	七五	三五	三九	〇五
二六	白并染色	同	七五	三五	四〇	〇五
二七	阿仙藥	同	七五	三五	四一	〇五
二八	翡翠孔雀毛類	同	七五	三五	四二	〇五
二九	磁石	同	七五	三五	四三	〇五
三〇	檳榔膏	同	七五	三五	四四	〇五
三一	雌黃	同	七五	三五	四五	〇五
三二	硝子板	同	七五	三五	四六	〇五
三三	安息香并安息油	同	七五	三五	四七	〇五
三四	同	同	七五	三五	四八	〇五
三五	同	同	七五	三五	四九	〇五
三六	同	同	七五	三五	五〇	〇五
三七	同	同	七五	三五	五一	〇五
三八	同	同	七五	三五	五二	〇五
三九	同	同	七五	三五	五三	〇五
四〇	同	同	七五	三五	五四	〇五
四一	同	同	七五	三五	五五	〇五
四二	同	同	七五	三五	五六	〇五
四三	同	同	七五	三五	五七	〇五
四四	同	同	七五	三五	五八	〇五
四五	同	同	七五	三五	五九	〇五
四六	同	同	七五	三五	六〇	〇五
四七	同	同	七五	三五	六一	〇五
四八	同	同	七五	三五	六二	〇五
四九	同	同	七五	三五	六三	〇五
五〇	同	同	七五	三五	六四	〇五
五一	同	同	七五	三五	六五	〇五
五二	同	同	七五	三五	六六	〇五
五三	同	同	七五	三五	六七	〇五
五四	同	同	七五	三五	六八	〇五
五五	同	同	七五	三五	六九	〇五
五六	同	同	七五	三五	七〇	〇五
五七	同	同	七五	三五	七一	〇五
五八	同	同	七五	三五	七二	〇五
五九	同	同	七五	三五	七三	〇五
六〇	同	同	七五	三五	七四	〇五
六一	同	同	七五	三五	七五	〇五
六二	同	同	七五	三五	七六	〇五
六三	同	同	七五	三五	七七	〇五
六四	同	同	七五	三五	七八	〇五
六五	同	同	七五	三五	七九	〇五

號	品名	毎	一分銀	一分銀	分數	分數
四六	鐵塊	同	〇一五	二二五	六六	一
四七	船脚ニ用ユル鐵	同	〇〇八	二二	六七	七五
四八	鐵銼金	同	〇〇八	二二	六八	七五
四九	鉛塊	同	〇〇八	二二	六九	七五
五〇	鉛板	同	〇〇八	二二	七〇	七五
五一	亞鉛	同	〇〇六	九九	七一	七五
五二	鋼	同	〇〇六	九九	七二	七五
五三	錫	同	〇〇三	一〇七	七三	七五
五四	鐵葉	同	〇〇七	一〇七	七四	七五
五五	蠟引形付敷物	同	〇〇三	四五	七五	七五
五五	(地ニ敷モノ)	同	〇〇三	四五	七六	七五
五五	同似葦敷物	同	〇〇三	四五	七六	七五
五五	(家具ニ用ユルモノ)	同	〇〇三	四五	七六	七五
五六	黒白胡椒	同	〇一五	二二五	七六	七五
五七	水香	同	二二五	三七五	七六	七五
五八	水銀	同	六	三五	七六	七五
五九	幾那鹽	同	一五	七五	七六	七五
六〇	藤	同	〇四五	六七五	七六	七五
六一	大黃	同	一	六七五	七六	七五
六二	鹹魚	同	〇七五	一一二五	七六	七五
六三	白檀	同	一二五	三七五	七六	七五
六四	蘇木	同	〇四	三七五	七六	七五
六五	海馬牙	同	七五	三五	七六	七五
六六	一角牙	同	六六	三五	七六	七五
六七	鮫皮	同	六七	三五	七六	七五
六八	喫煙草	同	六八	三五	七六	七五
六九	石鹼	同	六九	三五	七六	七五
七〇	紫粒	同	七〇	三五	七六	七五
七一	(器具ノ一種)	同	七一	三五	七六	七五
七二	赤糖	同	七二	三五	七六	七五
七三	白砂糖	同	七三	三五	七六	七五
七四	冰糖并格砂糖	同	七四	三五	七六	七五
七五	烟草類	同	七五	三五	七六	七五
七六	朱	同	七六	三五	七六	七五
七六	毛織物類	同	七六	三五	七六	七五
七六	大羅紗	同	七六	三五	七六	七五
七六	小巾羅紗	同	七六	三五	七六	七五
七六	ハビット、コロン	同	七六	三五	七六	七五
七六	中等羅紗	同	七六	三五	七六	七五
七六	巾(三ツイン)	同	七六	三五	七六	七五
七六	巾(五ツイン)	同	七六	三五	七六	七五
七六	巾(五ツイン)	同	七六	三五	七六	七五
七六	巾(五ツイン)	同	七六	三五	七六	七五
七六	毛織子	同	七六	三五	七六	七五
七六	是班牙製編耳羅紗	同	七六	三五	七六	七五
七六	フランネル	同	七六	三五	七六	七五
七六	羅春板	同	七六	三五	七六	七五
七六	セルヂス	同	七六	三五	七六	七五

號	品名	毎	一分銀	一步銀
七九	旗布	十	〇一五	三三五
八〇	關口吳呂服	同	〇七五	一二二五
八一	英口吳呂服	同	〇四	六
八二	ラスチイングクレ ー ラスチイン グ			
	ウワルステット クレプメリノス 其外部テ七十六 ノ處ニ載セサル			
	毛織物類			
	右			
	甲) 巾 三十四イン	同	〇三	四五
	乙) 巾 三十四イン	同	〇四五	六七五
八三	毛木綿交織物			
	イミテーション カムレット、イ ミテーション、 ラスティング ブレインワ、ル レンス ファイギュールド、 ワルレンス、ブ レン、ハ、ストル			
	ファイギュールド、 ルストルアルバ カ パラシース、ダ マックス、イタ リヤン、コロ ン タフハセラスロ スセルコルツ、 カスサンドラ、 ウーレンフハン シース、カムレ ット、コルツ 北外毛ト木綿ト 交タル織物			
	右			
	甲) 巾 三十四イン	同	〇三	四五
	乙) 巾 三十四イン	同	〇四五	六七五
八四	ブランケット	十斤	〇五	七五
	並馬靴			
八五	モ(ール敷物) 一枚		〇五	七五
	イツ並シヨウル ス			
八六	形付毛織飯糰掛	同	〇七五	一一二五
八七	毛織絨絨同股引	一二	〇八	一二

號	品名	毎	一分銀	一步銀
八八	毛木綿交織絨絨同		〇五	七五
八九	毛糸白並染色	百斤	一〇	
	引			
第二種 無稅品	食料又ハ荷物運送ニ用ユル諸品類			
	碇前鎖ノ碇繩			
	石炭			
	外國ノ衣裳			
	但此運上目録中ニ載セサル品ニ限ルヘシ			
	金銀貨幣ニ作りタルモノ又ハ作ラサルモノ			
	勞類			
	米 初 小麥 大麥 燕麥 裸麥			
	豆類 玉黍 粟			
	右粉類			
	油槽			
	荷造ニ用ユル莖			
	板木			
	鹽			
	鹽漬ノ食料(樽ニ入レタルモノ)			
	硝石			
	ソルドル			
	タール并チヤン			
	茶ヲ製スル鍋并箱			
	茶鉛			
第三種 禁制品	旅中用荷物			
	阿片			
第四種	元代ニ隨ヒ五分ノ稅ヲ收ムヘキ品			
	兵器并軍用諸品類			
	巴里斯品			
	長袴并袴			
	時計類并オールゴール			
	珊瑚			
	刃物類			
	藥種水藥類(即人參等ノ如キ類)			
	染具			
	西洋陶器磁器			
	諸般家具(新舊ヲ論セス)			
	硝子器			
	金銀ノ糸并紐			
	ゴム類并香椒類			
	硝子燭類			
	鐵類			
	珠玉類			
	機械類并鐵及ヒ鋼器			
	絹糸或ハ絹木綿雜織物絹毛雜織物類(即天鵝絨ダマスタブ ロカデーノ類)			
	油燭并銅版燭類			
	香具石炭			

金銀キセ并減金器類
鍍皮類
遠目鏡并學藝ニ用ユル器具
材木
酒類酒精食料諸類
其他石ニ捌ケサル諸物品

輸出品運上目録
第一種

號	品名	毎	一分銀	一分銀
一	乾飽	百斤	〇〇八	一二
二	鮑貝	同	一〇八	一二
三	標膠	同	〇七八	一二
四	茯苓	同	〇三五	一二
五	桂皮	同	〇三五	一二
六	桂子	同	〇三五	一二
七	石炭	同	〇〇四	一二
八	綿綿	同	〇二五	一二
九	棕樹皮	同	〇四五	一二
十	乾魚	同	〇七五	一二
十一	(即鮮鱈鹽漬)	同	一〇五	七五
一二	五倍子	同	〇〇九	一三五
一三	銀杏	同	〇四五	六七五
一四	麻	同	二〇五	七五
一五	鹿角	同	〇〇九	一三五
一六	鹿角	同	〇〇九	一三五
一七	煎海鼠	同	〇〇六	九
一八	鐵	同	〇〇三	九
一九	寒天	同	〇二五	三七五
二〇	鉛	同	〇〇九	一三五
二一	甘	同	〇〇五	三七五
二二	魚油	同	〇〇三	四七五
二三	菜種油	同	一〇五	七五
二四	書物用紙類	同	一〇五	七五
二五	下品ノ紙	同	一〇五	七五
二六	豆類	同	〇〇三	四七五
二七	牡丹皮	同	〇三五	一二五
二八	五升半	同	〇一五	二二五
二九	唇布	同	〇〇二	一八
三〇	酒并燒酎類	同	〇〇九	一三五
三一	板昆布	同	〇〇三	四七五
三二	刻昆布	同	〇〇六	九

石炭ハ汽船用ノ分
無稅輸出並詳明治
二年十月二十七日
(千八百六十九年
十一月三十日)付
書翰ヲ各公使ヘ送
ス

(米及分粉)輸出
差許ハ明治六年七
月十八日及同年十
一月廿四日付書翰
ヲ以テ兩度各公使
ヘ送ス
(硝石)從價五分稅
ヲ以テ輸出並詳明
治六年一月廿九日
付書翰ヲ以テ各公使
ヘ送ス

三三	藥種	同	〇四五	六七五
三四	胡麻	同	〇〇九	一三五
三五	酸酐	同	一八八	二二
三六	乾海老	同	一八八	二二
三七	紺糸類	同	七五	七五
三八	牛糸并ヨリ糸	同	七五	七五
三九	與斗糸	同	七五	七五
四〇	眞綿	同	二〇	七五
四一	殼蠶	同	七	七五
四二	蠶	同	二二	七五
四三	屏糸并屏蠶	同	二二	七五
四四	蠶耶紙	一枚	〇〇七五	一三五
四五	醬油	百斤	〇四五	一三五
四六	硫黃	同	〇〇三	六七五
四七	茶	同	三三五	四七五
四八	番茶	同	〇七五	七五
四九	材木	同	〇七五	一二二五
五〇	儘ニテモ檜松 ト、杉ノ如キ柔 木ハ部テ 榊タモ、榊ノ、 イタヤ、栗、ハ、 樺、桂、ホウ、ス、 ロ、ヤセ、樺、樺、 檜、楠、ク、ロ、ガ、キ ノ如キ堅木ハ部 テ	百斤	六	一三五
五一	華烟草	同	七六	一二二五
五二	製シタル烟草	同	〇七五	一二二五
五三	素麵	同	一五	七五
五四	木蠟	同	〇四五	六七五
五五	蜜蠟	同	二五	七五

第二種 無稅品
金銀 日本産ニシテ貨幣ニ造リタルモノ
金銀 日本産ニシテ貨幣ニ造ラサルモノ
但シ公ノ入札ニテ唯政府ヨリ資渡スヘシ
第三種 禁制品
米 粉 小麥 大麥并其粉
硝石
第四種 元代ニ隨ヒ五分ノ稅ヲ收ムヘキ品
竹器諸類

銅及ヒ銅器諸類
木炭
人參并是ニ掲ケサル藥品
塵芥
座席類
絹衣服并織物又ハ縫沼シタル衣服其他掲ケサル物品
材木箱館ヨリ輸出スルモノヲ除ク

澤外務卿從三位清原宣嘉 花押
寺島外務大輔從四位藤原宗則 花押
アンゾニ、デ、ベツツ 印

庄内藩

三年九月支配ヲ免

第八百五十四 九月七日(沙)

膽振國之内 蛇田郡

右其藩支配被 仰付候事

第八百五十五 九月七日(留守官)

今般留守彈正臺菊亭家ニ被設候間此段爲心得相達候事

第八百五十六 九月八日(太政官)

彈例

一親王及諸司ノ奏任非職ノ五位以上ノ犯解官親王ハ以上及判任以下庶人ノ父母ヲ毆テ叛逆ニ連累スルモノハ奏彈ス自餘ハ直ニ刑部省ニ糺移ス
 一判任以下ノ解官以上ハ臺ニ於テ糺彈シ自餘ノ犯ハ本司及府藩縣ノ司ヲ召シテ糺彈ス又市井庶人ノ非違ハ巡察視ル所ヲ審ニシ是ヲ府官ニ移シテ糺サシム藩縣同之
 但本司及ヒ府藩縣ノ司ハ判官以上ヲ召ス可シ
 一應須糺劾シテ犯罪未タ其實ヲ審ニセス據狀勘問スヘキハ刑部省ニ移シテ推考セシメ委ニ事由ヲ知テ事大解官ナラハ奏彈ス又罪條既ニ明著ニシテ勘問ニ及ハス或ハ告密ニ涉リ事急卒ニ出

三年第五百六十六ヲ以テ彈正臺京都出所廢止
三年第四百十三ヲ以テ停止

ルモノ等ハ直ニ刑部省ニ告テ捕縛セシメ其推考スル所ヲ得テ事大ナラハ奏彈ス其直ニ省ニ告テ捕縛セシメ推考セシムルノ時解官以上ノ罪ハ大忠以下一人省ニ臨テ是ヲ聽ク又臺ヨリ發スルノ罪ニアラスト云ヘ臣大獄ニハ大忠以下監臨スルコト既ニ布令アルカ如シ
 一刑部省死囚ヲ決セハ斷案ヲ臺ニ移ス可シ若冤枉灼然タルアラハ決ヲ停メテ奏聞ス又死罪既ニ奏報ストイヘ臣猶冤枉ヲ訴シテ事可疑アラハ推覆シテ以狀奏聞スヘシ
 一犯罪發覺スル所ヲ論セス杖罪以下トイヘ臣科斷ハ一々刑部省ヘ附スヘシ
 一親王大臣以上官人及ヒ華族ヨリ庶人ニ至ル迄車馬兵仗衣服從者ノ數法則ニ違ヒ華麗僭奢ニ過ルモノハ糺彈ス吉凶ノ禮法ヲ超ルモノモ又同
 一官司判判アレハ所由ヲ追テ糺正ス又官人本司ニ於テ政ヲ行フニ怠慢シテ欠有ラハ是ヲ糺劾ス
 一納表匿官人ノ害政及ヒ抑屈ヲ告ルノ書ハ辨官右大臣ニ上リ不可後臺ニ受テ其所訴ヲ按察シ理當ハ奏聞シ事大小ヲ論セス不當理ハ之ヲ彈シテ刑部ニ移ス
 一京中ノ巡察ハ每町坊令一人ヲ從ヘテ巡視ス若急卒捕縛スヘキモノアラハ巡邏ノ兵ヲシテ縛セシメ先勘問シテ所司ニ移ス
 一巡察彈正時々京中便地ヲ點シ坊令ヲ從ヘ臣主ヲ會集セシメ巡察是ニ臨テ京府官人及坊令等百姓ヲ枉害セル歟時政其宜ヲ得サルカ孝順義節ノ顯ハレサルモノ有歟如何ヲ尋ヌ可シ藩縣同之
 一巡察時々囚獄ヲ檢校シ獄司ノ非違ヲ糺彈ス
 一人罪ヲ告ルモノアラハ宜ク三審ノ法ヲ用ニ可シ告密モ又令文ニ據ル
 一奏彈ハ太政官ヲ歷スシテ直ニ奏聞ストイヘ臣時宜ヲ計リ尹若クハ弼右大臣ト共ニ奏ス可シ尹弼アラサレハ大忠右大臣ニ就テ奏ス但右大臣ノ外職事預聞ク事ヲ得ス
 一親王及ヒ參議以上ノ罪ヲ糺劾ス可シ臣時宜ニ從テ制ヲ立ツ可シ其朝堂ノ非違ハ式ノ例ニ準ス但

參議以上ハ尹弼在ルニアラサレハ彈スルヲ得ス

- 一四位以下ノ糺彈ハ悉ク臺ニ召ス
- 一參議以上身病アレハ家令ヲ召シテ勘問ス家令本主ニ告テ猶不肯答ハ忠以下其家ニ向テ對彈ス四位以下病アレハ其愈ルヲ俟テ臺ニ召ス

但急卒ノコアレハ此例ヲ用ヒス

- 一臺喚二度ニシテ參セス并ニ勘事ヲ辨申セサルモノハ罪ニ處ス可シ
- 一非常巡察ヲ藩縣ニ發シ政事ヲ覆問シ非違ヲ糺彈ス可シハ 詔使ノ例ニ準ス可シ
- 一叛逆告密アルニアラサル以外ハ内奏スルコト有ヘカラス但勅問ニ出ルモノハ此限ニアラス
- 一彈正私ヲ狹テ事實ナラサルモノヲ彈セハ反坐ノ法ニ準ス可シ
- 一尹若シ犯スコアラハ弼以下忠以上共ニ議判シテ奏彈ス其臺中ノ官人非違アラハ各相彈ス
- 一朝議法律ニ關ルモノハ彈正悉ク預知ル可シ儀式衣冠等ノ制度モ又同

右依 天裁決定如件

彈正臺

明治二年八月

右之通ニ付此旨相達候事

第八百五十七 九月十日(沙)(太政官)

留守長官

今般御改正ニ付テハ留守官中ニ被差置候辨官史官御廢止ニ相成候得共其官之儀ハ格別御委任之廉モ有之候ニ付判官ハ辨官大主典ハ史官之心得ニテ庶務取扱可致旨 御沙汰候事

第八百五十八 九月十日(大藏省)

勅任官ニテ官祿第七八等中ニ有之向遠國旅費ハ第六等ヲ以下賜候事

右遠國旅費定期ノ内ニ相洩候間此段相達候也

三年第四百八十八ニ依リ消滅

第八百五十九 九月十日(留守官)

官省

一制度布告賞罰等之類自東京通達之節々爲心得彈正臺へ申達候事

一勅授官以上並華族之面々錢符黜陟之節彈正臺立會可致候事

一彈正臺大少忠日々太政官ニ出仕可致候事

附御玄關御中之口其外中外巡察見廻可致事

一請省皇漢兩學所京都府等時々大少忠大少巡察等巡察可致事

一刑法大獄有之節彈正臺立會可致事

右之通相達候事

第八百六十 九月十日(留守官)

官省

彈正臺近日ヨリ諸官省等ニ巡察可致候間此段爲心得相達候事

第八百六十一 九月十日(留守官)

京師大學校御建替ニ付皇學所漢學所當分御廢止ノ事

右ノ通東京ヨリ 御沙汰ニ付此段相達候事

第八百六十二 九月十二日(沙)

各通 片倉小十郎 石川源太

北海道開拓之儀ハ方今之急務ニ付追々御處分モ有之候エ共重大之事柄全地一時ニ御手ヲ可被爲着目的モ難相立折柄其方儀不憚艱難自ラ彼地ヲ跋涉シ開拓致度志願之趣神妙之至ニ被 思食北海道開拓御用被 仰付候條家來其外有志之徒相募リ自費ヲ以漸次移住屹度實功相立候様盡力可致旨 御沙汰候事

第八百六十三 九月十二日(沙)

石川源太

三年五月支配ヲ免ス

膽振國之内 室蘭郡

右一郡其方支配ニ被 仰付候事

第八百六十四 九月十二日(沙)

片倉小十郎

膽振國之内 幌別郡

右一郡其方支配ニ被 仰付候事

第八百六十五 九月十二日(民部省)

支配所村々名主組頭定使給米等御料ノ分ハ先ツ舊慣ニ仍リ上知村々ハ都テ御料並ノ通可取計候

第八百六十六 九月十二日(大藏省)

官祿渡方九十兩月分ヲ十月ニ可渡旨相達置候處九月ニ引上ケ相渡其後ハ御規則ノ通隔月ニ相渡可

申事

右之通改テ相達候事

第八百六十七 九月十三日(太政官)

九戸縣自今八戸縣ト稱候様被 仰出候間此旨相達候事

第八百六十八 九月十三日(太政官)

來十九日寅半刻横須賀製鐵所 行幸被 仰出候事

但雨天順延ノ事

第八百六十九 九月十四日

詔書

方流賊鳴張汝有衆建節宣威艱苦盡瘁克靖北疆朕嘉獎之乃頒賜以酬有功汝有衆懋哉(是日濟水谷公考以下賞賜有差)

明治二年己巳九月

第八百九十二ヲ以テ

テ御延引

三年第九百四十四

奏旨

三年第十七ヲ以テ

松平慶三郎ニ交割

セシム

三年第十一ヲ以テ

支配ヲ免ス

四年太政官第五百

十九ヲ以テ支配ヲ

免ス

四年八月支配ヲ免

ス

第八百七十 九月十四日(太政官)

來ル十九日横須賀製鐵所ノ 行幸御延引廿一日濱殿へ 行幸被 仰出候事

第八百七十一 九月十四日(太政官)

近來御用召之輩遅刻或ハ不參無届打過候者往々有之如何之事ニ候向後右様之者於有之ハ屹度可被

及 御沙汰間此旨爲心得相達候事

第八百七十二 九月十四日(沙)

兵部省

後志國ノ内 太樞郡 瀬棚郡

膽振國ノ内 山越郡

釧路國ノ内 白糠郡 足寄郡 阿寒郡

右六郡共省支配ニ被 仰付候事

第八百七十三 九月十四日(沙)

五島銃之丞

後志國磯屋郡ノ内 後別川東但川屬之

右其方支配ニ被 仰付候事

第八百七十四 九月十四日(沙)

米澤藩

後志國磯屋郡ノ内 後別川西但川西ノソトラ以テ

右其藩支配ニ被 仰付候事

第八百七十五 九月十四日(民部省)

東海道筋 府藩縣

去辰五月以來諸街道驛々へ附屬申付候村々ノ内脇往還自村繼場並去辰年水旱損亡高五分以上ハ皆

高除五分以下三分以上ハ半高除其餘高除可相成課役等相糺支配驛々附屬村正高取調至急可差出事

第八百七十六 九月十四日(京都兵部省)

明治二己巳年九月

第八百七十 第八百七十一 第八百七十二 第八百七十三 第八百七十四

三六一

京地七口諸藩警備之儀非常之節出兵之心得可致置旨兼而其省ヨリ達置候處御留守中御大切之儀ニ付右藩々何レモ出兵同所警備致シ候様更ニ可申達候事

九月

留守官

右之通被 仰出候間相達候事

〔第八百七十七〕 九月十四日(留守官)

去ル四日夕大村兵部大輔旅宿へ何者之所爲哉及亂暴候段達 天聽深ク 御宸怒被爲在候右ハ全ク

朝憲ヲ不奉憚不届之至ニ付京地ハ勿論近傍府藩縣共嚴密探索候様被 仰出候間管轄中至急取

糺シ當官へ可届出候事

〔第八百七十八〕 九月十五日(太政官)

來ル二十二日 御誕辰祥臣ニ酬宴ヲ賜候儀當年秋實不熟 供御ヲモ被爲減御救恤之折柄ニ付御禮

式而已被爲取行候間左之通可相心得事

一 冷酒紙敷着之事

一 諸官省其外トモ勅任官ハ參 朝拜賀御祝酒ヲ賜候事

一 奏任以下ハ其官省ニテ拜賀申上名刺取集メ其長ヨリ言上可致尤御祝酒モ共官省ニテ賜候事

〔第八百七十九〕 九月十五日(沙)

開拓使

膽振國虻田郡有珠郡日高國浦河郡夫々支配ニ被 仰付置候得共各地所有之牧場之儀ハ當分之内其

使府ニテ管轄可致事

〔第八百八十〕 九月十五日(兵部省)

來ル二十二日 主上御誕生日ニ付例之通御祝發申上候様夫々用意可有之候尤外國船モ碇泊中ニ付

第九百十九ヲ以テ祝禮ヲ止ム

甲 鍊艦 富士艦
千代田艦 長鯨丸

應放等之儀ハ外務省へ引合之上又々可相達事

〔第八百八十一〕 九月十五日(留守官)

京都辨官傳達所向後留守官傳達所ト可稱候事

右ノ通相達候事

〔第八百八十二〕 九月十七日(布)(太政官)

今般神祇官中ニ諸陵寮被爲置候事

〔第八百八十三〕 九月十七日(布)(太政官)

東京中非人乞食共此度於本府夫々取調癘疾老幼ノ外壯健ノ者ハ舊里へ引渡候ニ付藩縣ニテ受取候

上ハ以後再度管轄外へ不立出様屹度處置可致事

〔第八百八十四〕 九月十七日(布)(太政官)

金札之儀大札之分僻遠之地ニテハ融通ニ差支下民難澁之趣モ相聞候間今般民部省通商司ニ於テ貳步壹步貳朱壹朱等小札至急ニ製造追々引替ニ相成候尤引替候大札之分ハ斷截候條兼而爲心得相達候事

但引替之期限ハ追而從民部省可相達事

〔第八百八十五〕 九月十七日(布)(太政官)

松前港ニ於テ是迄西蝦夷地船運上取立候處被廢自今箱館繩島壽都手宮之四箇所ニ於テ軍艦ヲ除之外運上御取建相成候ニ付此旨相達候事

〔第八百八十六〕 九月十七日(太政官)

今般大臣納言公務人ヲ被置候御用之節ハ辨官廳へ出頭可致事

但大臣公務人ハ相當正六位納言公務人ハ相當從六位ノ事

五年太政官第百九十號及八年第十四號布告ヲ以テ改ム
制度變革ニ依リ消滅

四年太政官第百三十九號依リ消滅
四年太政官第百三十一參旨
四年太政官第百三十八ニ依リ消滅
四年太政官第百四十八ヲ以テ續多非人ノ稱ヲ廢ス
八年第三號布告參看

第九百八十七 九月十七日

今般東本願寺北海道新道切開キ且門徒教諭願之通被 仰付候ニ付テハ東海東山北陸三道之門徒移住等願出候ハ、府藩縣ニ於テ差支無之者ハ可差許候事

第九百八十八 九月十七日(沙)

彦根藩

千島國擇捉島ノ内 擇捉郡

右其藩支配被 仰付候事

第九百八十九 九月十七日(民部省)

結城藩 下館藩

四年太政官第三百五十三ヲ以テ廢藩置縣

下妻藩 關宿藩

日光縣ヨリ鬼怒川通り笹川下之儀差許候尤普請場并通船差障不相成様取締可致旨同縣ヨリ申渡候間此段相達候事

第九百九十 九月十七日(兵部省)

元會津 降伏人

今般北海道江移住被 仰付候付而者士分以上之者苗字御免許相成候條此旨相達候事

第九百九十一 九月十八日(太政官)

浦高札

定

一御用船ハ申ニ及ハス諸廻船トモニ遭難風時ハ見付次第速ニ助船ヲ出シ破損セサル様精々力ヲ盡スヘキ事

一船破損ノ節其所近キ浦方ノ者手傳イタシ可成丈荷物船具等取揚ヘシ其海上ヨリ取揚ル所ノ荷物ノ内浮荷物ハ二十歩一沈荷物ハ拾歩一取揚候者ヘ可遣之事

但川船ハ浮荷物ハ二十歩一沈荷物ハ二十歩一可遣之總テ歩一ハ其品相當ノ代金ヲ以テ可相渡

八年第六十六號布告ヲ以テ廢止

事

一同斷ノ節深海ノ沈船又ハ沈船ニモ至ルヘキ程ノ水船或ハ淺キ場所ノ沈船ヨリ荷物陸揚イタシ候モノ共ヘ前々ヨリ歩一渡來候處自今相當ノ賃錢可遣之其餘諸働人足并諸入費等所役々仕來候分是又相當ノ賃錢入費共可渡遣事

附所役人取締イタシ無益ノ人足差出候儀ハ勿論可成丈入費カ、ラサル様可心附總テ過當ノ賃錢等貪取アルヒハ子ダリケ間敷儀有之ニオ非テハ可爲出事

一難風ニ逢沖ニテ荷物ハ子ステ候時ハ着船ノ湊ニオ非テ其所ノ府藩縣役人庄屋等出會逐穿鑿船中残りノ荷物船具等取調證文可差出事

附船頭浦々ノモノト申合荷物ヲ盜ミ取ハ子タリト偽リ後日ニ顯ハル、ニ於テハ船頭ハイフニ及ハス申合セシ輩ニ至ルマテ嚴重答可申付事

一流寄ノ船并荷物等ハ浦方ノモノ見付次第可揚置六ヶ月ヲ過持主不相知時ハ揚置モノ可取之タトヒ持主相知ル、トイフトモ六ヶ月ヲ過ル後ハ差返スニ及ハス

但其所府藩縣役所ノ可請差圖事

一湊ニ長ク船ヲ懸ケ置モノアラハ其子細且何方ノ船ト相尋日和次第早々出船イタサスヘシ若出船イタシカタキ次第有之ニオ非テハ其趣篤ト聞亂シ其所府藩縣役所ヘ可申出事

一貢米ハ船具水主不足ノ惡船ニ積ヘカラス且日和能キ節破船セシムル時ハ船主船頭可爲出事總テ船中ニ於テ理不盡成儀申募リ又ハ私曲ヲ工ムモノ有之ニ於テハ申出ヘシ同類タリトモ其科ヲユルシ寢美可遣事

一貢米積船ハ船足定ノ所ニ極印ヲ打船頭水主ノ人數ヲ減少セサル様申付運送セシムル筈ニ候間湊ヘ懸リ候ハ、船足ハ極印ノ通ニテ船頭水主人數モ送狀ノ通無相違哉所役人ニテ相改若極印ヨリ船足深入ノ船ハ積入ノ俵數取調送狀ニ無之荷物積入候カ又ハ水主人數令減少候ハ、私ニ積入候

七年第九十七號布告ヲ以テ改正

荷物ハ取揚置水主人數不足ノ分ハ其所ニテ儘成水主ヲ雇ハセ出船致サスヘシ其上ニテ右ノ趣其所ノ府藩縣役所へ可申出事

第八百九十二 九月十八日 (太政官)

來ル廿一日濱殿 行幸御延引被 仰出候事

第八百九十三 九月十八日 (太政官)

東京中諸屋敷并親王華族ヲ始諸官員拜借之邸宅内外草蔓リ塵芥拾置候向モ有之見苦敷事ニ付以來平常掃除行届候様可致此旨相達候事

但時々爲見廻土木司罷越候條不都合無之様可致事

第八百九十四 九月十八日

西國筋藩縣へ

去ル四日夕大村兵部大輔旅宿へ及亂暴候者有之趣達 天聽深ク 御宸怒被爲在候右等之所爲全ク

朝憲ヲ不奉憚不届ノ至ニ付京地ハ勿論近傍府藩縣共嚴密探索候様被 仰出候處右黨類ノ内西

國筋へ逃去候哉ニ相聞へ候ニ付其地方管轄中別テ至急取札シ當官へ可届出候事

第八百九十五 九月十八日 (達) (辨官)

諸官省

一官祿受取證書ニ等級相認候様過日相達置候處以來左之通

第九百九十六ヲ以テ様式改定

證

當已九月十月分官祿

請取申處如件

月日 氏官印

美濃紙堅紙

一例月廿二日廿三日官祿御渡シ定日ニ有之處 天長節ニ付當月ハ廿三日廿四日ニ御渡シ相成候間此旨相達候事

第八百九十六 九月十八日 (辨官)

證

一當已ノ九月十月分官祿

右ノ通受取申處如件

月日 氏官印

美濃紙堅紙

過刻相達候官祿受取證書ノ通相改候間此段更ニ相達候事

第八百九十七 九月十八日 (民部省)

去辰四月中於西京御達有之同十二月中東京會計官ニ於テモ諸帳而類取調御差出有之候様御達申置候内御取箇郷帳ノ儀ハ取調候儀モ有之候間美濃紙ニ御認メ去辰年分ヨリ早々御差出可有之尤匣差引ニハ不及候事

第八百九十八 九月十八日 (兵部省)

- | | | |
|------|-----|------|
| 鹿兒島藩 | 廣島藩 | 福岡藩 |
| 和歌山藩 | 金澤藩 | 熊本藩 |
| 山口藩 | 高知藩 | 久留米藩 |
| 佐賀藩 | 德島藩 | 水戸藩 |
| 福井藩 | 柳川藩 | 鳥取藩 |
| 大村藩 | | |

第九百九十五ヲ以テ様式改定

第九百九十八參行

今般海軍操練所御取建ニ而十八歳ヨリ二十歳迄大藩ハ五人中藩ハ四人小藩ハ三人ツ、譬古爲修行可差出候事

但食事ハ自分ヨリ持出可申事尤出精上達之上ハ等級ニ應シ食用且月給等可被差出候事

〔第八百九十九〕 九月十九日(布)(太政官)

八戸縣自今三戸縣ト被改候事

〔第九百〕 九月十九日(布)(太政官)

諸藩ニ於テ米穀勝手ニ津留致シ候テハ三都ヲ始メ庶民難澁不少候處近頃猥ニ輸出ヲ禁候向モ有之哉ニ相聞以之外之事ニ候以來海内一家遠邇同視之 御趣意ヲ奉體速ニ津留ヲ廢シ米穀不融通無之様可致旨被 仰出候事

〔第九百一〕 九月十九日(太政官)

來ル廿二日 天長節ニ付休暇ノ事

〔第九百二〕 九月十九日(沙)

弘前藩

後志國島牧郡之内 須築

右其藩支配被 仰付候事

〔第九百三〕 九月十九日(雜官)

諸官省

御誕辰ニ付御祝酒被下候間其官省ニテ奏任以下末々迄ノ人員取調當日用度司へ請取ノ者可差出候此段爲御心得申入候也

〔第九百四〕 九月十九日(雜官)

諸官省

御誕辰ニ付御祝酒被下候間用度司ヨリ受取可申旨達置候處御都合モ有之候ニ付代料ニテ御渡シ相成候間人員取調明日ヨリ明後朝迄ノ内大藏省ヨリ受取可申一人ニ付賜一枚切昆布一枚冷酒貳合ツ

ツ被下候儀ニ付其官省ニテ取計可申事

〔第九百五〕 九月十九日(雜官)

美濃紙壁紙

證

當巳ノ九月十月分官

祿受取申處如件

月日 氏官印

昨日相達候官祿請取證右之通相改候間此段更ニ相達候事

〔第九百六〕 九月十九日(民部省)

府 縣 預所アル

諸國貢米ノ儀自今可成丈ケ地船ヲ以積廻候様相心得精々手配イタシ若差支筋有之候ハ、空船廻シ方ノ儀當省へ可申立候尤是迄ハ空船積湊へ相廻リ候テモ御米渡方手間取候儀等有之候故無據船頭永逗留イタシ其内ニハ出帆ノ日和ヲ失ヒ海上惡敷時節ニ乘出シ候様ニモ相成候間着船遅ク相成候ハ勿論自然難船トモ多キ趣ニ相聞候御米延着相成候得ハ減米相立差米多相成村方難儀イタシ北國筋欠請負ノ分ハ船頭辨米多相成候故御米積請候ヲ不相好雇附差支候ヨリ空船差向方及遅々候様ニモ相成候趣ニ付府藩縣ニ於テ兼テ手練イタシ村々貢米積湊へ爲附出置空船入津次第早速爲積請船足定ノ所ニ其府藩縣ノ極印ヲ打船頭水主ノ人員相改送狀ニ書載右人員出船後不減少様急度申渡出帆可申付候

第九百三十三ニ依リ消滅

三年第五百二十五
四年大藏省第四百
十八參看

一欠請負國々ノ外ハ於積湊御米船頭へ相渡候節同俵入ノ御米貳俵宛布袋又ハ箱入ニイタシ府藩縣役人並船頭村役人封印イタシ爲積受着船ノ節納所出張ノ役人右封印相改斗立爲致右封印ノ米ヨリ外積請ノ米減石多候得ハ辨米申付候間共段村々へモ得ト申論積所並納所着船ノ上俵廻シイタシ候節トモ其支配役人出張イタシ船頭村役人立會嚴密ニ相改候様可致且納名主並上乘百姓ノ儀ハ船中取締ノ爲メ罷越候儀ニ付人物相撰差出若子細有之納所永逗留イタシ候儀モ有之候ハ、其譯書付ヲ以當省へ可申立候

一貢米積船諸國浦々へ船掛リノ節所役人改方其外心得方ノ儀別紙ノ通浦々へ相觸候間其段心得若船頭水主等不埒ノ儀有之歟又ハ怪敷風聞等有之所役人ヨリ注進イタシ候ハ、右注進狀封印ノ上早便ヲ以當省へ可差出候(別紙ハ第九百八ニ同シ)

第九百七 九月十九日(民部省)

藩

諸國貢米積船ノ儀貢米積入船足定ノ所ニ其府藩縣ノ極印ヲ打船頭水主ノ人數相改送狀ニ書載右人員出船後不減少様急度申渡出帆可申付候且貢米積船浦々へ船掛リノ節所役人改方其外心得方ノ儀別紙ノ通浦々へ相觸候間其段心得若船頭水主等不埒ノ儀有之歟又ハ怪敷風聞等有之所役人ヨリ注進イタシ候ハ、右注進狀封印ノ上早便ヲ以當省へ可差出候(別紙ハ第九百八ニ同シ)

第九百八 九月十九日(民部省)

浦 觸

諸國迴米積請候船津々浦々へ入候節於其所改方等ノ儀ニ付テハ前々申渡ノ趣モ有之候處兎角破船沈船等多ク其外海上風濤ノ沙汰モ無之ニ濡澤手等有之又ハ故ナク延着イタシ候儀モ有之候ハ全船頭水主共前々申渡ノ趣ヲ不守無謂永々船掛リイタシ遊興ケ間敷儀杯有之或ハ日和ヲモ不見定出

八年第六十六號布告ヨリテ浦高札廢止

帆イタシ候故ノ義ニ相聞候今般御一新ニ付テハ船中取締ノ儀迴船差配人並船頭水主共へモ改テ申渡候條浦役人並其所ノ者共浦高札ノ趣堅ク相守船頭水主共等無故上陸爲致間敷ハ勿論日和見合早出帆爲致入津ヨリ出帆迄ノ始末船方所持ノ日帳ニ記シ相渡若船頭水主等無故上陸イタシ不埒ノ儀有之候ハ、少モ不隱置委細有體ニ認其度々封印ニイタシ急飛脚ヲ以最寄府藩縣役所へ可差出候一迴米積船難風ニ逢ヒ濡澤手米等ニ成候分入津ノ砌相改浦手形差出候儀ハ從前ノ通取計可申候尤東京大阪御藏納ノ節多分減石相立候モ有之候得共濡澤手米ニ候逆格別ノ減米ハ有之間敷事ニ候畢竟船中不取締故ト相聞候間已來濡澤手改ノ義ハ勿論クツロキ俵ハ無之哉相札無謂クツロキ俵有之候歟又ハ難風ニ逢候由ノ申口而已ニテ怪敷風聞等モ有之候ハ、其段前書ノ書付へ委細認入可差出候

右之趣相心得其外ノ義ハ浦高札ノ通相守迴米船途難風候節ハ早速助船差出船破損セサル様出精イタシ可申候若船頭水主等不埒有之ヲ見進シ其分ニイタシ前書ノ書付モ不差出又ハ出帆ノ日和有之候テモ無謂差留置候様ノ儀外ヨリ相聞ニオイテハ吟味ノ上嚴科可申付者也

差上申御請證文之事

一今般御迴米積御雇船相成則空船御見分相濟御送狀其外諸御物並御運賃之内別紙受取書奉差上候通御渡方之上當所出帆被 仰付候付而ハ船中御條目之趣其外迴船御用達共ヨリ申渡之趣トモ堅相守御積所着御米奉受取候上ハ尙又船中申合無油斷乘廻リ早着專一ニ心掛可申候
一御積所其外何レ之所ニ而モ御送狀之外荷物一切積受申間敷候尤浦々入津之節所役人相改御送狀ニ無之荷物積入有之候ハ取揚置其筋へ御注進申上候筈浦々へ被 仰渡候間心得違無之様可致旨

被 仰渡候

右被 仰渡之趣承知奉畏候若相背候者御科可被 仰付候仍而御請印形仕候處如件

年号 月 日

船頭 連印
水主

右地履船頭水主へ申渡請證文案

第九百九 九月十九日 (兵部省)

甲鐵艦 富士艦
千代田形艦 延年艦

來ル廿一日ヨリ三日間招魂祭被行候條二十一日第十字於其艦々先例之通祭砲可相發此段申達候也

第九百十 九月十九日 (留守官)

來十月五日 皇后宮東京 行啓被 仰出候事

第九百十一 九月十九日 (留守官)

來ル廿一日 御誕辰ニ付當日已刻 禁中 大宮御所 中宮御所へ參賀可致候事 宮華族非藏人等へ

第九百十二 九月十九日 (留守官)

來ル廿二日 御誕辰ニ付當日已刻諸官奏任以上 禁中 大宮御所 中宮御所へ參賀可致候事

第九百十三 九月十九日 (留守官)

來ル廿二日 御誕辰ニ付酬宴ヲ可賜之處御東 幸中ニ付御祝儀ヲ賜リ候間在京官長之者壹人爲總代當日已刻參 朝可有之候事御祝儀ハ在官上 席ノ者ニ作ル

第九百十四 九月十九日 (留守官)

官省へ

諸官員官祿御渡ノ儀當月ハ休月ニ候へ共御模様モ有之候間來二十三日二十四日ノ内大藏省へ受取ニ罷出可申候事

第九百十五 九月二十日

來ル廿二日天長節參賀ノ面々第九時無遅々參 朝可致事

第九百十六 九月二十日

彈正臺巡察箇所

大宮御所

御客間ノ南二枚戸限車寄邊並北面詰所 口向 奏者所邊 祗候之間 大清間 御膳所 御錠口邊

執次詰所 用度司役所 御臺所邊

中宮御所

表方

飛香舎壹圓

但西廊下南二枚戸限

御客間以下車寄邊壹圓

但表ヨリ御内儀へ往返廊下中程仕切戸限

口向御臺所壹圓

但御内儀錠口限

右之通ニ候事

第九百十七 九月二十日

諸官省府藩縣判任假宣旨之書式

三年第五百六十六
ニ依リ消滅

第九百四十四ヲ以テ
改ム

大奉書前紙

何 某
在官ノ者ハ氏官
ヲ班ス

判任〇官名〇

月 日

何 官
諸官省府藩縣

右之通ニ候間爲心得相達候事

〔第九百十八〕 九月二十日 (兵部省)

第三大隊 第四大隊
遊軍隊

來ル廿一日ヨリ廿三日迄招魂社大祭ニ付廿一日於社前祭砲例之通可致執行候事
但十字出張發砲刻限者於同所可及差圖事

〔第九百十九〕 九月二十日 (兵部省)

甲鐵艦 富士艦
千代田艦 延年艦

來ル廿二日 聖上御誕辰ニ付昨年於兵庫表祝砲相發候例ヲ以過日相達候次第ハ有之候得共未々於
朝廷一般之 御式不被 仰出候ニ付祝砲相止可申此段申達候事

〔第九百二十〕 九月二十日 (兵部省)

金澤藩 長尾藩 唐津藩

四年九月十四日祝
砲式制定
四年十一月諸縣兵
ノ修訂ヲ止ム

- | | | |
|------|------|-------|
| 米澤藩 | 西條藩 | 明石藩 |
| 小田原藩 | 宇和島藩 | 前橋藩 |
| 鳥取藩 | 松代藩 | 芝山藩 |
| 彦根藩 | 岡崎藩 | 名古屋藩 |
| 德島藩 | 水戸藩 | 松平豊三郎 |
| 關宿藩 | 大垣藩 | 熊本藩 |
| 高知藩 | 和歌山藩 | 福岡藩 |
| 尼ヶ崎藩 | 下館藩 | 大田喜藩 |

別紙寫之通 御沙汰ニ相成候條夫々持場所ニ不洩様被相達候事

(別紙) 諸御門并諸見付御警衛嚴重取締之儀者勿論御門内外共平日掃除等急度行届候様共省ヨリ更ニ可相
達事

九月十九日

太政官

〔第九百二十一〕 九月二十日 (留守官)

官 省

勅授官以上九門内乘馬并御車寄昇降被差許候事
右之通相達候事

〔第九百二十二〕 九月二十一日 (太政官)

來ル廿二日 御誕辰ニ付太政官官員一同參 朝拜賀之事

但奏任ハ宮内省へ拜賀可申上判任官ハ一局ツ、名刺取集辨官へ差出可申事
右之通被 仰出候間此旨相達候事

六年太政官第七十
七號發給

第九百二十三 九月二十三日(布)(太政官)

來廿七日集議院 行幸被 仰出候事

第九百二十四 九月二十三日(民部省)

御取箇帳差出方ノ儀已來田方檢見濟歸縣ノ日ヨリ凡ソ四十日ヲ期限トイタシ差出可被申尤出立歸着共其度々可被相届候事

第九百二十五 九月二十三日(民部省)

宮華族中大夫以下知行社寺領等最寄府縣オイテ管轄イタシ支配地ニ準シ取扱候諸入費ノ儀ハ常備金ノ内別廉ノ分相除其餘ハ在來ノ支配地ト合高割合ヲ以御下ケ相成且堤防橋梁營繕等ノ入費老衰扶持ハ其地頭ヨリ可相渡儀ト心得右管轄高姓名社寺號等廉々巨細取調可申立尤場所場所ノ口米永ハ其年々取立別上納ノ積リ可取計事

第九百二十六 九月二十四日(太政官)

來廿七日集議院 行幸ニ付休暇ノ事

第九百二十七 九月二十四日(民部省)

- | | | |
|------|-------|------|
| 前橋藩 | 豐橋藩 | 西尾藩 |
| 鶴舞藩 | 芝山藩 | 菊間藩 |
| 長尾藩 | 花房藩 | 岩村藩 |
| 久留里藩 | 岩槻藩 | 飯野藩 |
| 笹山藩 | 長島藩 | 佐貫藩 |
| 鶴牧藩 | 荻野山中藩 | 加知山藩 |
| 櫻井藩 | 館山藩 | 高岡藩 |
| 敦賀藩 | 西大平藩 | 小久保藩 |

舉母藩 三上藩

四年太政官第三百五十三ニ依リ消滅

第九百二十八 九月二十四日(農務司)

昨辰年轉封村替等ニテ上地被 仰付爲代地引渡候村々收納五箇年平均別紙案文ノ振合ニ取調早々可差出尤爲見合村々割附皆濟目錄ノ類相添可差出候事(別紙伏ス)

第九百二十九 九月二十四日(留守官)

諸藩藏物之儀ハ以來相對雇賃錢ヲ以可爲繼立候事
宮華族家來京師其外所々へ在住之者姓名居所具ニ取調早々彈正臺へ可差出候事
右之通相達候事

第九百三十 九月二十四日(留守官)

門跡准門跡附屬院家並坊官以下士分之者等姓名居所取調早々彈正臺へ可差出候事
右之通相達候事

第九百三十一 九月二十五日(雜官)

是迄諸官省奏任以上ノ職員へ官祿御渡ノ儀ハ當官ニ於テ取調大藏省へ相廻シ來候處自今ハ其官其省ニ於テ取調官祿御渡シ月ノ十八日マテニ同省へ差出シ可申候事

但諸職員新ニ拜命スト雖出仕無之間ハ官祿不賜候間出勤當日ヨリ取調可申出候事
一歸省又ハ他行等願濟ノ上當地發足及ヒ歸着等ノ日取調可申出候事
右ノ通ニ候間此旨相達候事

第九百三十二 九月二十五日(民部省)

攝津播磨河内和泉四國
預所アル 府 縣 藩

五年太政官第六十六號ヲ以テ改定

五畿内筋

一攝津 播磨
 是ハ金方正月京都大阪省 皆濟ノ積
 一河内 和泉
 是ハ金方正月京都大阪省 皆濟ノ積
 是ハ米方三月大阪御藏 皆濟ノ積
 右ハ當六月申達候趣モ有之候處書面ノ通更ニ相達候間都テ最前申渡候趣ニ相心得無差支様可取計
 事

第九百三十三 九月二十五日 (大藏省)

今般官祿被下方御規則相立候ニ付テハ其後拜命相濟方今奉職罷在候官員名列書至急御廻シ有之候
 様致度候右ハ官祿渡方ノ節見合ニ相用候間尤向後黜陟等ノ節ハ無遺漏御達シ可被成候
 一官祿渡方其外規則別紙一册相廻候間以來右ノ振合ヲ以御取扱可被成候事

(別紙)

官祿渡方出納司規則

一現米月割ハ合止メニテ四拾五入ノ事
 一米相場平均直段ハ壹石當リニ引直シ永一文ニ止メ四拾五入ノ事
 一渡方金數一八別ニ取調金一米ニ止メ永三拾一文二分五厘以上ハ切上ケ右ニ不十分ハ切捨ノ事
 一相場平均ノ儀ハ御藏庭相場ノ内上下二等有之節ハ下ヲ用ヒ上中下三等有之節ハ中等ヲ用ヒ定日
 立相場無之節ハ前日又ハ前々日ノ相場ヲ用ヒ候事
 二年八月 東京 出納司

四年太政官第四百七十五ニ依リ消滅

當地ノ儀ハ御藏庭立相場無之候ニ付中國中米相場相用ヒ其餘同斷

在 阪

出納司

用紙美濃紙

證
 一何等官祿
 右何ノ何月分受取候處
 如件
 月日 苗字官名印

勅任以上華族ハ家來ノ名印ニテ宜シ

右銘々ヨリ差出候分共官省府縣寮司ニ於テ同等ノ分一綴ニ致シ口々取揃九十兩月分ハ九月二十日
 其後ハ御規則ノ通隔月同日限リ左ノ通目錄書相添可被差出候事

覺

一米何石宛 何等官 何人
 此代金何程 但相場一石ニ付金何程 何人
 一米何石宛 同 何人
 此代金何程 但同斷
 一米何石
 現米何石 內 金 何程

三年第五百七十六 卷首

此現米何程 但右同斷

但米願ノ儀ハ御規則ノ通第一等官ヨリ六等官迄ハ四分ノ一第七等官ヨリ十等官迄ハ三分ノ一
第十一等官ヨリ以下ハ半數ニ限リ候事

一米何石宛

等外十石ノ分
何人

此代金何程 但右同斷

一米何石宛

同七石ノ分
何人

此代金何程 但右同斷

合高米何十何石

内 現米何十何石
金 何 程

此現米何十何石

右ハ當官省府縣寮司役員何ノ何月分官祿書面ノ通ニ候以上
月日

官省府縣寮司印

出納司

第九百三十四 九月二十五日(留守官)

留守刑部省被廢候事

但以後刑法之儀ハ京都府へ被委任候事

右之通爲心得相達候事

第九百三十五 九月二十六日

詔書

五年十月七日太政
官ヨリ京都府へ達
ニ依リ但書消滅

朕惟皇道復古朝憲維新一資汝有衆之力朕切嘉獎之乃頒賜以酬有功汝有衆助哉(是日實賜有差)

明治二年己巳九月二十六日

第九百三十六 九月二十六日

詔書

汝實美皇道ノ衰運ニ際シ夙ニ恢復ノ業ヲ期ス竟ニ躬天下ノ重ヲ係ケ出テハ則鎮將入テハ則輔相能
中興ノ業ヲ成ス洵ニ國ノ柱石朕ノ股肱朕切ニ厥偉勳ヲ嘉ニス乃予賞賜シテ厥勞ニ酬ニ吁將來輔導
益望ムコアリ汝實美其懋哉

明治二年九月二十六日

第九百三十七 九月二十六日

詔書

汝具視皇道ノ衰ヲ憂ヒ大ニ恢復ノ志ヲ抱ク竟ニ大政復古ノ基業ヲ輔ケ躬ヲ以テ天下ノ重ニ任シ夙
夜勤精規畫圖治以テ中興ノ業ヲ成ス洵ニ國ノ柱石朕ノ股肱切ニ厥偉勳ヲ嘉ニス乃予賞賜シテ厥勞
ニ酬ニ吁將來輔導益望ムコアリ汝具視其懋哉

明治二年九月二十六日

第九百三十八 九月二十八日(沙)(太政官)

詔書

朕開明君德ヲ以テ下ヲ率ヒ庸主法ヲ以テ人ヲ待ツ顧フニ亂賊常ニ有ラス君德奈何ニアルノミ今ヤ
北疆始テ平キ天下粗定ル慶喜容保以下ノ如キ各宜シク寬宥スル所アツテ自新ニセシメ以テ天下ト
更張セン(是日德川慶喜以下
數名諱慎ヲ免ス)

明治二年己巳九月二十八日

法律ハ國家之重事ニ候處昨年犯逆之罪ニ於テハ名義紊亂ノ後ヲ承ケ政教未洽ノ際ニ付 聖上深ク御反躬被爲在專ラ非常寬典ニ被處候次第就テハ今度深キ 思食ヲ以テ 詔書之通更ニ被 仰出候間名義ヲ明ニシ順逆ヲ審ニシ反省自新盛意ニ對膺可致候事

三年第四百六十一
ニ依リ消滅

〔第九百三十九〕 九月二十八日(布)(太政官)

錢相場之儀金壹兩ニ付拾貫文通用可致旨先般御布令相成候就テハ兩替屋共ニ於テ心得違有之間敷管之處當節ニ至リ相場並諸錢之定位等區々ニ相成融通甚差支殊ニ眞鍮錢ハ直増可相成坏跡形モナキ虛說申觸シ私ノ相場相立密ニ賣買又ハ貯錢等致シ候者有之由以之外不埒之事ニ付既ニ此度右體之輩召捕吟味之上御處置之品モ有之候條向後錢融通方之儀兩替屋共ハ不及謂諸商人共一同御布令之旨相守銘々心得違無之様可致事

但地方官之見計ヲ以テ一時融通之タメ兩替屋渡世之者ニ無之共當分之内勝手ニ錢引替差許候儀ハ不苦候事

〔第九百四十〕 九月二十八日(太政官)

諸官省府藩縣判任官假 宣旨ノ書式過日相達候處寫誤有之ニ付改テ左ノ通

四年太政官第六百六十
十ヲ以テ改ム

大奉書前紙

何 某

在官ノ者ハ苗字
官名ヲ認ム

任神祇官權大史

他官準之

月 日

神 祇 官

諸官省府藩縣共同様

右之通ニ候間爲心得相達候事

〔第九百四十一〕 九月二十八日(太政官)

去ル四日京都ニ於テ大村兵部大輔旅宿へ別紙名前ノ者共及亂暴候段不憚 朝憲所業不屈至極ノ事ニ候賊黨追々御召捕相成候得共逃去候者共何レハ潛伏モ難計ニ付府藩縣ニ於テ管轄中嚴密探索ヲ遂ケ見當次第召捕可申出候事

三年十月十日兇徒
處刑

長州藩
見玉者執家來ニテ致候事

圓 伸二郎

同藩玉利筑前家來
太田豐原兄ニテ同斷光大郎名

大田 瑞穂

久保山藩
金島五郎事名

佐竹 竹次郎

越後國府兵居ノ殿中
五十嵐伊織事名

齋藤 習作

右四人召捕相成

三州藩

宮和田 進

死

召捕相成

軍曹

伊藤 源助

長州藩

神代 直人

信州伊奈郡ナムクマ村
郷土藤島金左衛門作

關島 金一郎

土州藩

岡崎 強助

河野 某

堀内 誠之進

堀内 了之輔

坂野 治郎

德川 慶喜

静岡藩知事德川家達

飯野藩知事保科正益

第九百四十二 九月二十八日(沙)
先般謹慎被 仰付置候處深キ 叙慮ヲ以テ被免候事

第九百四十三 九月二十八日(沙)
德川慶喜儀別紙之通被 仰付候條此段可相達事(別紙ハ第九百四十二ヲ謂フ)

第九百四十四 九月二十八日(沙)
松平容保儀先般城地被召上父子永預被 仰付置候處深キ 叙慮ヲ以テ今度家名被立下候間血脉之者相撰可願出事

十一月三日容保ノ
子容大ヲ以テ其先
祀ヲ嗣カシメ陸奥
國三万石ヲ下賜ス

第九百四十五 九月二十八日(留守官)

御東幸御留守中ニ付玄猪ノ御祝當年ハ不被下候事

第九百四十六 九月二十九日(布)(太政官)

大宮縣自今浦和縣ト被稱候事

第九百四十七 九月二十九日

宣教使官員

神祇官

長官 相當正三位

次官 相當從三位

判官 相當從四位

權判官 相當正五位

大宣教使 相當正五位

權大宣教使 相當從五位

中宣教使 相當正六位

權中宣教使 相當從六位

大主典 相當正七位

少宣教使 相當正七位

權大主典 相當從七位

權少宣教使 相當從七位

少主典 相當正八位

大講義生 相當正八位

三年第二百六十五
ヲ以テ正權大中少
宣教使改稱

四年太政官第五百
九十四ヲ以テ廢止

四年太政官第四百
ヲ以テ官等改正

權少主典 相當從八位
 中講義生 相當從八位
 史生 相當正九位
 少講義生 相當正九位

右之通御治定ニ相成候條長官次官判官ハ從本官兼任被 仰付權判官大宣教使以下權中宣教使迄ハ人撰可伺出大主典少宣教使以下者判任之上可申出事

第九百四十八

九月

今般 皇宮 行啓被 仰出候ニ付テハ第一民ノ疾苦ヲ被爲厭御輕辨ヲ專ニ被 遊候御趣意ニ候殊ニ近來海道筋非常之往來打續キ下々之難儀其上今歲雨天相續キ農民作ヲ失ヒ窮苦不成一方折柄先般厚被 仰出候御趣意モ有之旁以供奉之面々下々ニ至ル迄殊更深ク御段撫之御趣意ヲ奉戴シ沿道休泊入夫遣方等厚ク心ヲ用ヒ下方之難澁相救ヒ候様可取扱舊弊ニ習ヒ權威ケ間敷振舞決テ有之間敷事

一御當日御休泊多人數ニ付供奉之面々於驛々諸賄等不行届之儀モ可有之候條兼テ相心得居其場ニ至彼是申立候儀決テ致間敷事

一御定御休泊之外ニ於テ自分勝手ニ支度等決テ致間敷事

一御道中供奉下々ニ至ル迄男女之制法堅ク可相守事

一供奉之面々下々ニ至迄旅宿ニ於テ娼婦等呼寄セ酒宴ケ間敷儀決テ不相成候事

一供奉下々并又供之向下宿ニ於テ博奕諸勝負決テ致間敷事

一供奉之面々支度料大札小札割合ヲ以テ被渡下候間道中筋ニテ買物トイヘ其割合ヲ以テ正路ニ仕拂可致事

一御道中筋監察トシテ彈正臺供奉之面々旅宿へ臨時ニ巡察可致之間此段兼テ相心得居可申事

一宿驛ニ於テ不都合之次第有之候ハ、其趣供奉彈正巡察へ可訴出事

一御道中筋總テ御列奉行之指揮相請違背有之間敷事

一御輿脇猥リニ小者等徘徊停止タルヘク駢之者方一用向有之節ハ帶刀之者無禮無之様通行可致事

一供奉之面々所勞足痛之節御憐愍ヲ以宿駕被下候間精々勤辨ヲ致シ無餘儀分ハ其主人ヨリ印形ヲ以御泊彈正巡察へ可願出事

但重病ハ其驛ニ可留置事

右之通被 仰出候間家來末々ニ至迄不洩様可相達事

第九百四十九

九月

集議院規則 (規則中既ニ頒布ノ布告アリ然レモ一
 部ノ刊本ナルヲ以テ再行ラ避ケス)

詔書

朕將ニ東臨公卿群牧ヲ會合シ博ク衆議ヲ諮詢シ國家治安ノ大基ヲ建ントス抑制度律令ハ政治ノ本億兆ノ頼トコロ以テ輕シク定ム可ラス今ヤ公議所法則略既ニ定ルト奏ス宜シク速ニ開局シ局中禮法ヲ貴ヒ協和ヲ旨トシ心ヲ公平ニ存シ議ヲ精確ニ期シ專ラ 皇祖ノ遺典ニ基キ人情時勢ノ宜ニ適シ先後緩急ノ分ヲ審ニシ順次ニ細議シ以テ聞セヨ朕親シク之ヲ裁決セン

明治二年己巳三月

規則

一集議院ハ廣ク衆議ヲ諮詢シ國家治安ノ大基ヲ建タマフ御心ニ體シ奉リ億兆心力ヲ盡スノ場所ナリ故ニ議事ハ詔書ヲ遵奉シ太政官ト心志ヲ合シ專ラ政治ノ根本ヲ旨トシ普ク時務ニ涉リ 皇國內氣脈朕離セサルヲ要ス

六年太政官第二
 二十八號ニ依リ
 被

- 一 議案ハ太政官ヨリ下スヘシ當院ヨリ立ツル議案ハ太政官ニ白テ公議ニ付スヘシ
- 但未タ公議ヲ經サル議案ハ發行ヲ許サス
- 一 議院ニ關係ノ議事アル節ハ長官次官正權判官トモ太政官ニ參預可致事
- 一 議員中ヨリ幹事十二名ヲ公選シ正權判官ニ準シ可相勤事
- 但權判官ノ次席タルヘク候
- 一 會議ノ席ニ於テハ議員位次總テ同等タルヘキ事
- 一 府藩縣トモ議員ハ正權大參事中心ヨリ選出スヘキ事
- 一 議員ノ進退ハ官許ヲ乞フヘキ事
- 一 議員中ヨリ名指ノ選舉有之節ハ議院ニ於テ熟議ノ上可申出事
- 但シ任用ノ官等職務トモ前以テ內諭可有之事
- 一 議員中名指ナク舉任被 仰出候節ハ長官次官正權判官幹事等二名ヲ選定シテ可伺出事
- 一 議員中ヨリ選舉ノ節ハ奏任以上ニ可相任事
- 一 各員移任或ハ退職スル者ハ速ニ代員ヲ選フヘシ若シ病アツテ六十日ニ滿ル者之レニ準ス
- 一 議員ハ廿五歳以上タルヘシ在職ハ四年ヲ以テ限トシ二年毎ニ其半ヲ改選ス時宜ニ因リ直ニ其人ヲ再舉スルモ妨ケナシ
- 但操行ヲ按シ勤惰ヲ察シ臨時ニ淘汰スルハ此限ニアラス
- 一 毎月二七日ヲ以テ定日トシ辰ノ刻着到辰ノ半刻議事ヲ始ムヘシ
- 但議事終ラサレハ翌日再會ス若シ議事ナケレハ定日タリ而休ス
- 一 毎月閣ヲ探テ番號ヲ定メ席次評論等ノ順序トス
- 一 評論ノ體裁簡易明瞭ヲ主トシ忠厚ノ意ニ基クヲ要ス

- 但一篇ノ大意ヲ節略シ日誌編輯ニ便ス
- 一 鐘四聲ヲ以テ席ニ就キ磬二聲ヲ以テ議事ヲ始終シ磬一聲ヲ以テ討論ヲ止ム議事終ルト雖モ二聲鐘ヲ開カサレハ退院ヲ許サス
- 一 每會議案ヲ頒チ各員受テ歸リ評論ヲ加ヘ次會壇上ニテ之ヲ讀ミ異同ヲ討論シ第三會ニ至熟考可否ヲ決スヘシ
- 但討論ハ虚心易氣ヲ旨トシ務メテ條晰洞悉センヲ要ス尤評論ノ次第ニ由リ議案ヲ改正シ再三公議ニ付スヘシ
- 一 凡ソ可否ハ目今行フヘキト否トニ就テ之ヲ決スヘシ
- 一 議案ト全ク同意及ヒ異論コレナキ者ハ評論ノ節其由ヲ別記シ幹事ニ出スヘシ
- 一 長官議員ノ決答ヲ集テ之ヲ點檢シ可トスル者五分三以上ナレハ衆ニ告テ可ト決シ否トスル者五分三以上ナレハ衆ニ告テ否ト決シ並ニ天裁ヲ仰ク
- 但可トスル者ハ議案ノ右角ニ可字ヲ朱書シ否トスル者左角ニ否字ヲ朱書シ甲條ヲ可トシ乙條ヲ否トスル者各條上ニ可否ヲ朱書シ皆藩印ヲ押シ議案ノ前ニ姓名ヲ表ス
- 一 議員闕席ノ者ハ評論并可否他ノ一員ニ託スヘシ
- 但託ヲ受ケタル者議員ノ評論ヲ讀ムヘシ
- 一 一員ニテ二員ノ託ヲ受クルヲ禁ス
- 一 可否トモ五分ノ三ニ至ラサル時ハ他日ノ會議ニ付ス若シ即決セント欲スル者五分三ニ至ラハ直ニ再議スヘシ
- 一 議員五分ノ二闕席ノ日ハ評論ヲ休ムヘシ

一 議案并其評論可否ノ多少 勅許ノ有無總テ梓行世ニ公ニスヘシ
一 諸官ヨリ出席ノ人員議事ニ加ルモ妨ナシ

但可否ヲ決スルヲ許サス

一 議事參聽ヲ欲スル者ハ當院玄關ニ願ヒ出テ許可ヲ受クヘシ

但每會三十人ヲ許ス

一 集議院中別ニ一局ヲ設ケ天下之進言獻策有用ノ材ヲ總ヘ寄宿セシメ其德行才能ヲ考試スヘキ事

但右一局ハ集議院寄宿所ト名ツク寄宿スル者集議院寄宿生ト唱フ

一 諸藩士及農工商トモ待詔出仕可被 仰付者ハ一應議院ノ考試ヲ經テ任用スヘキ事

但人物ニヨリ特命ノ選舉ハ此限ニアラス

一 待詔出仕ニ命セラルヘキ者并進言獻策ニヨツテ寄宿セシムル者議事ニ加ラシメ其材能ヲ考試ス

ヘシ

但席次議員ニ準シ可否ヲ決スルノ權ナシ

第千二十二ヲ以テ
規則追加

一 臨時ノ規則ハ長官ノ酌定ニヨルヘシ

一 先般待詔局被爲開草莽卑賤之者ニ至迄御爲筋之儀獻言可致様御布令相成候ニ付追々存付申出候

就而ハ重大之事件ハ 上裁ヲ經夫々御取捨相成候得共各官府縣限リニ而可否決定可相成程之事

件申出候族ハ待詔局ニ於テ一應尋問之上爲證據局印ヲ押其官及府縣江向當人差越書面爲差出候

間其事之可否得失ニヨリ取捨可致ハ勿論假令即今採用難相成儀申出候トモ懇切ニ說諭ヲ加ヘ言

路洞開下情壅蔽無之様トノ御旨趣致貫徹候様可取計旨被 仰出候事

五月

局印ヲ受諸官及府縣江罷出候節萬一不都合之次第有之候ハ、不及爭論猶又當局江可伺出事

行政官

但建白書差出候向者大意並姓名月日共必表出シ差出ヘシ

七月

待詔局

待詔院下局之儀ハ天下之才能ヲ待セラル、所ニシテ言路洞開上下壅塞之弊ナク草莽卑賤ニ至ル

迄各抱負ヲ盡サセ其所長ヲ御採用可被爲在御趣意ヲ以被設置候處今度御詮議ニヨリ集議院中ニ

於テ是迄待詔院下局ニテ取扱候御用等裁判可致旨被 仰出候間其旨可相心得候事

八月

太政官

〔第九百五十一〕 九月(布)(民部省)

諸開港場へ輸出之蠶種紙並生絲之類假作偽製或ハ不正之仕立荷ヲ作リ貿易致ス者間々有之哉ニ相

聞御取締ハ勿論遂ニハ 皇國之名義ヲ汚シ隨テ貿易衰頹國民失利之基ニ付今般御取締之タメ東京

ハ從前之通其他大坂並諸開港場最寄へ改所被爲建候ニ付其旨相心得右改所之内便宜之方へ輸送改

ヲ受候上外國人ト取引可致萬一心得違之者有之無改之品取引致スニ於テハ其品取揚候而已ナラス

急度御沙汰之品モ可有之間心得違無之様可致事

但蠶卵紙之儀者其生産スル所之國所並製作人名前ヲ紙背ニ相記シ調印之上可差出事

右之通蠶絲渡世之者共へ無遺漏可觸達但委細之儀ハ租稅司へ打合セ可申事

稅則

一種紙本部壹枚

稅金永百文

一生絲

稅金四兩

一眞綿

稅金四兩

一眞綿

稅金四兩

一眞綿

稅金四兩

明治二己巳年九月 第九百五十一

五年太政官第三百
三十三號ヲ以テ生
絲稅廢止

三年第五百三十八
及六年太政官第三
十二號ニ依リ消滅

税金壹兩

一 熨斗絲

九貫目ニ付

税金三分

一 皮^{ムキ}生皮^キ

九貫目ニ付

税金壹分貳朱

一 屑絲

九貫目ニ付

税金貳朱

一 出壳蛹

九貫目ニ付

税金貳分

一 山繭種

壹斤ニ付

税金貳分

以上

第九百五十一 九月 (民部省)

此度諸府縣規則被爲立候上ハ昨年來諸上納諸拂向トモ當九月ヲ限明細勘定イ^マ仕上十二月月中旬迄ニ當省へ可差出候事

一來十月ヨリ諸帳面新規相仕立來午年九月ヲ限勘定仕上前同様可取計尤正租目錄ハ檢見濟三十日以後大積明細帳ハ其年十二月ヲ限リ可差出候事

右之通後年相心得可申事

第九百五十二 九月 (民部省)

樋橋類切組在々へ東京ヨリ相廻シ候分以來ハ都テ其所切組ニ申付候間掛替伏替等相願候ハ、材木

三年第百七十九四年大藏官第十七卷
翌五年四月大藏省
達リ以テ大積明細帳ヲ廢ス
五年大藏省第六十號發旨

代切組賃吟味ノ上目論見ヲ立テ可相回事

第九百五十三 九月 (民部省)

關東府縣

川々急水留ノ儀ハ是迄七步築ニテ皆入用下渡相成翌春殘三步ノ處ニ至リ百姓役相勤候仕來ノ處當秋急破普請ノ儀ハ來春普請仕越ニ相當候間定例ノ村役爲差出人足ノ儀ハ高役ノ外扶持米賃米ハ最寄市町下米相場ヲ以被下候事

第九百五十四 九月 (民部省)

今般諸府縣郡村御取調ニ付別紙雛形ノ通早々取調當省へ可差出候事

(別紙)

一 高何程

何國

反別何程

何國

高何程

何國

反別何程

何國

高何程

何郡

反別何程

何郡

高何程

何郡

反別何程

何郡

高何程

何郡

反別何程

何郡

右之通相違無御座候也

年號 月 民部省

第九百五十五 九月 (大藏省)

當秋御收納ヨリ請取方手續別紙ノ通取極候條爲御心得此段及御通知候也

四年大藏省第九十三ヲ以テ改ム

明治二己巳年九月 第九百五十三 第九百五十四 第九百五十五

(別紙)

納米定則

淺草 御藏方

一 御米水揚ノ節主役知縣事方出張納方名主船頭納方御用達立會少令史以下米差改役出張俵ノ輕重様廻シ及見且米証劣又ハ更痛濡澤手見分々拵分ケ御用達共改廻シノ節ニ至リ大令史ニモ出張見證據シ無子細候ハ、納ニ差出シ可申若廻シ切等有之分ハ内拵ノ上改テ見届可申事

但遠國米ハ水揚廻シノ節米差改役ノ者及見猶内拵ノ上大令史見改可申事

一 知縣事方ヨリ御藏納申出候得ハ大少佑ノ内一人大令史一人少令史一人出張知縣事方立會俵數相改建札ト引合ヒ可申事

一 俵每差米致シ手本米ト引合米証劣並更痛等ハ可相除候事

一 廻俵ノ儀ハ棹閣拵廻ヲ入當リ候一拵三十六俵貫目掛致シ尙又目差ヲ廻シ俵二俵取出シ計立可申事

但二俵共合米切ノ節ハ總俵拵直可申併切升不同五合迄ノ違ハ二俵ノ欠米總俵數ニ掛ケ納候共

知縣事方申立通可取計候且右二俵ノ内一俵合切ノ節ハ其山三十六俵ノ内輕俵ノ分差米申付其

場ニ於テ改テ外拵へ閣入直シ尙又如本文貫目掛拵廻シ立ノ上正俵ニ候ハ、相納若此拵ニモ輕

俵有之候ハ、總俵拵直シノ事

一 閣振貫目掛拵廻等ハ納方名主ニ爲取扱可申事

一 納米拵ノ内端拵ヲモ閣入口安ニ當リ候ハ、次ノ拵三十六俵ノ内ヨリ足俵イタシ貫目掛升廻シ致

候事

但納俵數三百俵迄ニテ端拵十俵以上ノ節ハ次拵ヨリ足俵ニ不及事

右ノ通確定ノ事

第九百五十六 九月 (兵部省)

兵隊月給並兵食規則

一金貳拾五兩

大隊司令壹人

一金拾五兩

中隊司令四人

一金拾兩

小隊司令四人

一金四兩

嚮導二十貳人

一金三兩

樂隊小頭壹人

一金貳兩貳分

樂隊二十四人

一金貳兩

兵士

一金五兩

勘定方貳人

一金貳兩

勘定方附屬貳人

一金五兩

醫師貳人

一金壹兩

小遣三十八人

一 兵食一日壹人ニ付白米六合

一 菜代一日壹人ニ付金壹朱

外ニ總人員之内病兵凡見込貳割トシ寄箇月壹人ニ付藥種代共外諸費等ニテ金壹兩

第九百五十七 九月 (兵部省定)

諸宮門等守衛規律之大概

一 切御門者別段違無之而者通行相禁置候事

一 外櫻田御門以下十門者夜中印鑑引合ヒ通行之事

所謂十門

- 外櫻田 馬場先 和田倉 一橋 神田橋 常盤橋 吳服橋 鍛冶橋 數寄屋橋 日比谷
- 一親王大臣者夜中片扉開門之事
- 一騎馬之向夜中通行者升形御門而已片扉開候事
- 一胡亂體之者通行之節者取札候事
- 一非常之節者別而嚴重警衛致候事
- 一御門警衛人員者別ニ夫々相記候事
- 一夜五ツ時ヨリ無提燈者通行不爲致候事
- 一御城内御門者城門通行印鑑ヲ以通行爲致候事
- 一親王大臣等通行ノ節者御門番士下坐等ノ儀未々御規則不相立候間夫々御格定相成度勘考ニ有之候事

右諸宮門等規律細々之儀者未々相定不申是迄之處右之通相定置候事

第九百五十八 十月二日 (留守官)

在職宮華族並委任官以上

來五日卯刻 中宮東京 行啓ニ付御發途後 禁中 大宮御所へ爲恐悅參上可致 中宮御所へ恐悅ノ儀ハ於 禁中可申上候事

右之通相達候事

第九百五十九 十月二日 (留守官)

宮 華 族

來五日卯刻 中宮東京 行啓ニ付御發途後 禁中 大宮御所へ恐悅可申上 中宮御所へ恐悅之儀ハ於 禁中可申上事 右之通相達候事

第九百六十 十月二日 (留守官)

諸 官 省

來五日卯刻 中宮東京 行啓ニ付爲御見立總代官長之内登人宜秋門外へ可罷出事 右之通相達候事

第九百六十一 十月二日 (留守官)

華 族

來五日卯刻 中宮東京 行啓ニ付爲御見立前番當番並御由緒有之輩宜秋門外へ可罷出候事 右之通相達候事

第九百六十二 十月二日 (留守官)

行啓御道筋

皇后御門前南へ南門前東へ後院前南へ堺町南へ三條通東へ蹴揚夫ヨリ東海道御順路 右ノ通爲心得相達候事

第九百六十三 十月四日

内外諸官省官員轉職ノ節出入昇降ヲ不論總テ前職 宣旨御印下へ年月日轉何官ト相認候事 但新ニ被下候 宣旨へハ總テ任何官トノミ相認候事 一免職ノ節ハ 宣旨御印下へ年月日免ト相認メ依願被免候向ハ年月日依願免ト相認メ有罪被免候者ハ 宣旨御取上ケノ事

年月日 轉何官

年月日 免

年月日 依願免

四年太政官第百六十ヲ以テ改ム

第九百六十四 十月四日(留守官)

明五日 皇后東京 行啓ニ付休暇之事

右之通相達候事

第九百六十五 十月五日(達)(太政官)

華族敘爵無之輩左ノ通

一天氣伺參 内ニ不及候事

一御用有之被召候節ハ御内玄關ヨリ參入拜敘相濟候上ハ御車寄ヨリ退出之事

右之通ニ付此旨相達候事

第九百六十六 十月五日(太政官)

來八日第一字亞米利加國公使參 朝候間此旨相達候事

第九百六十七 十月五日(辨官)

諸官省諸職員當官ヨリ御用召ノ節宿所相分リ兼御用支相成候間從七位相當以上ノ各員宿所至急御取調御差出可有之候且以後宿所相轉候ハ、其節々當官へ届出可有之候也

但美濃紙四ツ折帳ノ事

第九百六十八 十月七日(布)(太政官)

西洋形風帆船蒸氣船自今百姓町人ニ至ル迄所持被差許候間製造又ハ買入等致度者ハ管轄府藩縣添書ヲ以テ東京外務省へ可願出事

但身元不慥之者共外國人馴合御國人所持之名ヲ貸シ與へ候様ノ惡弊無之様府藩縣ニ於テ篤ト吟味之上添書可致候事

第九百六十九 十月七日(沙)

刑部省

三年第九百四十四
ヲ以テ新律頒布

今般新律取調被 仰付候ニ付テハ前日集議院へ御下問ニ相成候通專ヲ寬恕ノ御趣意ニ原キ凡叛逆人命強盜放火等ヲ除ノ外可成丈ケ流以下ニ處シ竟ニ刑無刑ニ期シ候様被遊度 聖旨ヲ奉體シ撰定可致旨 御沙汰候事

第九百七十 十月七日

宮内省

御廐自今其省管轄ニ被 仰付候事

第九百七十一 十月七日

御廐

自今宮内省管轄ニ被 仰付候事

第九百七十二 十月七日(布)

一本日ヨリ永久ノ燈明臺落成迄ノ間神兒元島ニ於テ假燈明臺ヲ設ケ日没ヨリ日昇迄コレヲ照スヘシ

一神兒元島ハ北緯三十四度三十四分二十秒、グリニツチ偏東百三十八度五十七分十秒ニ在リ

一下田港ハ夫ヨリ北ニ六度ヲ偏リテ六、マイル、我ニ里二十九丁ヲ隔ツ伊豆ノ岬ハ西ニ七十五度半ヲ偏リテ五、マイル、我ニ里十二丁ヲ距ル是實測ナリ

一燈籠ハ高サ海面ヨリ八十尺ヲ登ル燈光十五、マイル、我ニ里二丁ノ距ヲ視ルヘシ

一燈明ハ一所ニ固定シテ普ク水平面ニ輝クヘシ

一伊豆ノ岬ノ篝火ハ以來廢止之事

右日本政府ノ命ニ依リ航海者へ布告ニ及フ者ナリ

於横濱
建築方

三年第七百三十四
ヲ以テ改ム

三年第八百二ヲ以
テ御廐局ヲ置ク

四年太政官第三百
九十二發有

三年第五十七ヲ以
テ改ム

明治二己巳年十月 第九百七十三 第九百七十四 第九百七十五 第九百七十六 第九百七十七
第九百七十八

千八百六十九年十一月十日
アール、ヘンリー、ブランドン

四年太政官第四百
五十七ニ依リ消滅

第九百七十三 十月八日 (太政官)
官制御改正ニ付官祿規則被相定候處今般御詮議ノ趣有之從當十月官位相當表ノ通官祿被立下候間
此段相達候事

但十月分ハ追テ取足被 仰付候事

五年太政官第八十
二號ニ依リ消滅

第九百七十四 十月九日(布)(太政官)
宣敎使神祇官へ被接候事

第九百七十五 十月九日(沙)
千島國之内 紗那郡

右其藩支配ニ被 仰付候事

四年八月支配ヲ免
ス

第九百七十六 十月九日(沙)
石狩國札幌郡空知郡之内

各 通

伊達英橘
伊達勝三郎

但地所之儀ハ石狩府ニテ可及差圖事
右其方支配ニ被 仰付候事

第九百七十七 十月九日 (民部省)
關所物並過料捨物拂代等當已年以來捕亡牢内其他右類之入費ニ遣拂一ケ年限元拂決算イタシ翌年
正月中可申立候事

府 縣

第九百七十八 十月九日 (留守官)
先般大村兵部大輔旅宿へ及亂暴候賊黨追々御召捕ニ相成候得共別紙名前之者共逃去候ニ付嚴密逐

府 縣

三年第百八十九ヲ
以テ改ム

探索候様於東京被 仰出候間猶又相達候事(別紙名前ハ第九
第九百七十九 十月十日 (京都兵部省) 副官様込
明十一日於伏見練兵場招魂祭奠式被行候ニ付參拜被差許候尤行軍タルヘク此段相達候事
但第六字出門可致事
第九百八十 十月十日 (留守官)
明十一日京都府元守護職屋敷へ引移ニ相成候間此段爲心得相達候事
第九百八十一 十月十日 (留守官)
菊御紋之儀於親王家ハ十四五葉以下或ハ裏菊等品ヲ替相用可申旨兼テ被 仰出有之候處宮門跡黒
御所華族等ニ於テモ右ニ準シ候儀勿論ノ事ニ候是迄親王家始社寺之向へ寄附ニ相成來リ候分 朝
廷御寄附ニ紛敷甚不都合之次第ニ付早々相改候様從東京 御沙汰候間此段相達候事
第九百八十二 十月十二日
女官相當

四年二月二條城内
ニ移ル
四年太政官第二百
八十五第二百八十
六參拜
四年太政官第三百
七十ヲ以テ改定

正三位從三位 正四位從四位 正五位從五位 正六位從六位

尙侍 典侍 掌侍 命婦

尙侍 在其人任之

典侍 四人

掌侍 四人

命婦 四人 有權官 此内一人兼大乳人

稱呼ノ事
大典侍

明治二己巳年十月 第九百七十九 第九百八十 第九百八十一 第九百八十二

- 一 典侍
- 三 典侍
- 新 典侍
- 勾當掌侍
- 二 掌侍
- 三 掌侍
- 新 掌侍
- 一 命婦
- 二 命婦
- 三 命婦
- 新 命婦
- 權 命婦
- 新 權 命婦
- 御 差
- 大 宮
- 中 宮 女 房
- 上 臈
- 小 上 臈
- 中 臈
- 下 臈
- 御 乳 人

御年寄

各稱呼ハ地名

隱居女房各稱地名之事

右之通ニ付爲心得相達候事

〔第九百八十三〕 十月十二日 (留守官)

今般彈正臺京師ニ被設置候處御留守中ノ儀ハ別テ中外嚴肅可有之ニ付巡察糺正ノ件々左ノ通兼テ

相達候事

一 禁中諸局諸官人詰所等日々見廻可致ニ付非違ハ勿論自然猥雜不作法ノ儀等有之候者見懸次第糺

彈可致事

一 大宮御所 中宮御所右同斷

一 宮方華族諸官人等在職非職ニ不拘邸宅ニ於テ非違等有之候者見聞次第其場所ニ行向勘問ニ可及

候事

彈 正 臺

右ノ通彈正臺ヨリ申出候間諸藩邸其外中下大夫以下至ル迄同様可相心得此段申達候事

〔第九百八十四〕 十月十三日 (太政官)

遠國旅費規則中東京ヨリ京都迄人足壹人ニ付金三兩ト被定置候處自今三兩貳分ト更ニ被相定候條

爲心得此段相達候事

〔第九百八十五〕 十月十三日

柏崎縣 水原縣

其縣出張之兵隊爲管轄兵部省ヨリ軍監差向候條以來兵隊進退等之儀ハ申談取計可致事

〔第九百八十六〕 十月十三日

宗嚴原藩知事

三年第五百六十六
ヲ以テ彈正臺京都
出張所廢止

四年太政官第二百
二十一ヲ以テ改ム

第一千二百二十一參看

明治二己巳年十月

第九百八十七 第九百八十八 第九百八十九 第九百九十 第九百九十一
第九百九十二 第九百九十三

四〇四

安徳帝御陵之儀取調被 仰付候間右御陵ニ關係候事跡委詳取調可申出事

第九百八十七 十月十四日(沙)

今般三典醫ノ外御醫ノ輩三十歳以上ノ者醫員被 仰付三十歳以下ハ醫學修業被 仰付總テ大學校

附屬被 仰付候事

第九百八十八 十月十四日(太政官)

十一等以下諸官員其外非役ノ面々東京へ家族引移候輩ハ着早々大藏省へ可届出事

第九百八十九 十月十五日(太政官)

來ル廿四日 中宮着御ニ付勅任官ハ參 朝拜賀御祝酒ヲ賜候事奏任以下ハ其官省ニテ拜賀申上名

刺取集其長ヨリ言上可致尤御祝酒モ其官省ニテ賜候事

第九百九十一 十月十七日(沙)

兵部省 東京府

近來市中盜賊夜ニ乘シ兵器ヲ以テ劫掠殺奪等之所業有之趣殊ニ釐殺下ニ於テ右様之儀有之候ハ以

之外之事ニ候全府下取締不行届ヨリ差起リ候儀ニ有之候猶東京府申合セ取締方一際嚴重可致旨

御沙汰候事(東京府へハ兵部省申合ニ作ル)

第九百九十一 十月十八日(達)(太政官)

今般新銅錢御鑄造相成候得共差向キ北海道開拓爲融通在來ノ當百錢御鑄造増相成候條爲心得相達

候事

第九百九十二 十月十八日(太政官)

諸官員其他非役ノ面々拜借邸引渡ノ節疊建具等相改證書土木司へ差出返上ノ節ハ民部省へ前以引

合日限相届土木司相改ノ上立拂候様可致事

第九百九十三 十月十八日(民部省)

四年大藏省第二十
一ニ依リ消滅

四年太政官第二百
六十七參看

四年太政官第三百
五ヲ以テ邸字貸與
ヲ止ム

別紙之通定額被 仰出候間相達候也

但朱書ノ分諸品價付ニ付諸府縣ニ於テモ右ニ準シ取極可申事

(別紙)

民部省

別紙之通確定候間官省諸局ニ於テモ得其意可申事

別紙

於用度司渡物規則

(△印ハ朱書)

一 中文字筆

△代銀二匁五分

一 小水筆

△代銀八分

一 俗様狀書筆

△代銀七分

一 小眞書筆

△代銀五分

右是迄銘々好品々申立次第渡來候處向後前書四品ヲ以相渡候事

但 神祇官御神祭 御用ノ筆紙墨ハ此例ニ不在候事

一 墨上二品

△上代金二朱

右同斷二品ヲ以相渡事

△下代銀三匁

一 朱墨一品

△代銀八分一厘

右同斷一品ヲ以相渡事

一 大奉書

△一束代銀九百十匁六分

一 大廣奉書卷紙

△但二十四枚細
代銀二十五匁五分

右御沙汰書等ノ外用ヒ間敷事

一 美濃紙

△代銀三匁三分

明治二己巳年十月 第九百九十三

四〇五

右官省其他往復書類永代日記貫キ帳奉書文通上包繪圖等之外用ヒ申聞敷事
一半紙 代銀七分五厘

右當用書類封紙等是迄美濃紙相用ヒ候分封紙ハ並半紙其他堅橫貫キ帳等相用可申事

一日向半切 代銀二匁

一駿河半切 代銀六分五厘

一鼠半切 代銀五分

右是迄奉書卷紙相用候分端書短文等之節ハ向後前書三品ノ内ニテ相用可申事

一中奉書卷紙 代銀十五匁

一並奉書卷紙 代銀三匁五分

右兩品廢止シ尤無餘儀筋ニテ相用ヒ候節ハ大藏省聞届ノ上用度司ヨリ渡方ノ事

一程村紙 代銀十二匁五分

一西ノ内紙 代銀七匁五分

右兩品上並相渡來候處向後並一品ヲ以可相渡事

一厚板目紙表紙

美濃紙形 堅横 同斷

右是迄數品申立ニ任セ渡方ノ分以來前書兩品ニ相定候事

一系引紙 但程村紙

美濃判 九行 半紙判 七行

右同斷 三十目掛 正味二十二匁掛

一蠟燭

右宮中用

一蠟燭 二十目掛 同十五匁掛

右燭臺用

一蠟燭 十目掛 同七匁掛

右弓張提灯手丸用

一茶 何レモ一貫目ニ付 代銀百三十匁五分 代銀十二匁

右是迄數品渡方ノ處以來中茶一品ヲ以可相渡事

一机硯箱火鉢茶器御用狀箱文庫御用箱箆筒長持提灯其外諸器械是迄渡方ノ分本帳取調兼テ用度

司ニ相達置以後損ノ節ハ古規替渡可申尤新規品増等ノ儀ハ其廉大藏省へ申立證印廻シ之上用

度司ヨリ可相渡事

諸品渡方定日

每月 二日 十二日 廿二日 炭薪油之類

每月 三日 十三日 廿三日 筆墨紙蠟燭之類

但三月ハ四日

右者諸向入用之品々申立次第用度司ヨリ渡來候處今般窮民爲御救恤供奉ヲモ被爲減候段不容易儀
ニ候就テハ諸官省其他ニ於テモ諸品遣用都テ節儉ノ筋ヲ以テ取行有之度依之前條ノ通相定候此餘
可成丈其向々ニ於テ簡辦ノ上其職員ニ應シ全ク一ヶ月分入用高吟味致シ定額帳大藏省へ可差出
事

已十月

太政官
關東八州
府 縣

第九百九十四 十月十八日 (大藏省)

明治二己巳年十月 第九百九十四

關東六州 諸 藩

關八州ニテ生産ノ菜種東京佃島徒刑場オイテ時相場ヲ以買入相成候間在々ニテ紋リ候油種ノ斛數ヲ除キ其餘ハ可成丈東京へ相廻シ候様可致候
右之趣支配地村々へ不洩様可相達候事

〔第九百九十五〕 十月十九日 (辨官)

中宮着御御當日奏任官以下ハ其席長ヨリ名刺取集宮内省へ拜賀可申上候此段爲心得更ニ相達候事

〔第九百九十六〕 十月十九日 (辨官)

來ル廿四日 中宮着御ニ付御祝酒 天長節ノ通奏任官以下ハ其官省ニテ賜候間大藏省ヨリ代料受取ノ上相調取計可申候事

但廿二日三日兩日ノ内受取ノ者可差出候事

〔第九百九十七〕 十月 (辨官)

中宮着御御道筋從品川驛高輪芝通尾張町敷寄屋町敷寄屋橋御門大名小路因州邸脇通馬場先御門民部省前通左へ同脇通桔梗大手前坂下御門ヨリ 入御
右ノ通ニ候間爲心得相達候事

〔第九百九十八〕 十月十九日 (兵部省)

海軍操練所御取立相成候ニ付テハ稽古爲修行十八歳ヨリ廿歳迄大藩ハ五人中藩ハ四人小藩ハ三人可差出旨先般相達候得共來ル十一月廿五日ヲ限リ出頭候様更ニ相達候事

但出精上達之上ハ其等級ニ應シ月給等被下候事ニ候得共兼而相達置候各顯名ニ及候迄ハ自分ヨリ其食糧持參候様尤一人一日貳朱之見込ヲ以其藩公用人ヨリ掛役人迄一箇月之糧料金可納出候

三年第七百九十六
ヲ以テ海軍兵學寮
ト改稱

四年兵部省第七二
依リ但書消滅

事

〔第九百九十九〕 十月二十日 (太政官)

來ル廿四日參賀刻限第十二字ヨリ第三字迄ノ事

〔第一千〕 十月二十日 (沙)

越後國藩々

今般水原縣知事當分越後國按察使兼帶被 仰付候ニ付取締向等臨機之指圖モ可有之候條此段相達候事

〔第一千一〕 十月二十日 (兵部省)

今般於芝新錢坐陸軍操練所取設別紙日割之通り相定候間此旨相達候事
但別紙定日ハ當省ヨリ致出張候事
(別紙)

來ル廿七日ヨリ
演習日割

七ノ日

第三四隊
遊軍隊

九ノ日

山口藩 徵兵
高知藩 徵兵

二ノ日

鹿兒島藩 徵兵

四ノ日

諸藩兵

三年第四百十五ヲ
以テ廢止

第一千二十八參看廢
止年月不詳

一第八字揃之事

但出頭之節ハ出役所へ可届出事
一操練之順序ハ可爲到着順事
一定日之外操練致度分ハ可爲勝手事
但其時々當省へ可届出事

第千二 十月二十一日

諸官省卿長官
縣香間 詰

明廿二日於本丸跡練兵 天覽ニ付第七字無遅々參 朝可有之候事

但雨天ニ候ハ、廿三日ノ事

第千三 十月二十一日

諸官へ

明廿二日第八字ヨリ於本丸跡練兵 天覽ニ付勝手ニ拜見可罷出候事

但雨天ニ候ハ、廿三日ノ事

第千四 十月二十一日 (兵部省)

遊軍隊

明廿二日於本丸跡鹿兒島山口兩徴兵操練可被遊 天覽旨被 仰出候間本丸二ノ丸巡邏警備可致事

但朝第七字於御場所號砲ニ發直ニ兵隊練込可申且蓮池御門ヨリ本丸迄通御之節警備可致事

第千五 十月二十二日 (民部省)

各支配地當已年貢米廻漕運賃百石當リ別紙ノ通廻船御用達申立候ニ付爲心得相達候條兼テ御布令ノ通り可成丈地履船ヲ以右運賃金ニ見合精々吟味減ノ上致廻漕候積相心得運賃ノ五分通於積所支配地租税金ノ内ヲ以相渡納處着船ノ上殘五分通相渡可申且地船履附差支候向廻船御用達共ヨリ空

船差向ヶ候分ハ送狀ノ趣ヲ以中賃等ノ儀無差支様可取計候事

(別紙)

諸國貢米廻船運賃取調帳

廻漕方

瀬戸内運賃覺

- 米百石ニ付
- 一金七十九兩一分
- 一金八十六兩二分
- 一金七十七兩三分
- 一金八十一兩一分
- 一金八十一兩二分
- 一金八十兩
- 一金八十四兩二分
- 一金八十九兩一分
- 一金九十一兩一分
- 一金八十五兩三分
- 一金八十八兩二分
- 一金九十二兩
- 一金八十六兩
- 一金百兩

堺 川口 西宮 兵庫 播磨 美作 讃岐 備中 中津 中須賀 豊後 原浦 日向 筑前 筑後

一金八十七兩三分
一金九十二兩
一金百十八兩三分

肥前
石見
丹後

北國筋東京履

米百石二付

一金百四十六兩一分
一金百五十六兩二分
一金百六十二兩三分
一金百五十九兩二分
一金百七十四兩

出羽酒田
越後新瀉老江
同沼垂
同今町
同柏崎
越前

右同斷大阪履

米百石二付

一金百六十兩三分
一金百五十一兩
一金百四十六兩一分
一金百四十八兩
一金百三十二兩一分

出羽酒田
越後新瀉老江
同今町
同柏崎
越前

奥州筋

米百石二付
一金七十九兩一分

石寒ノ風卷澤

内金七十一兩一分
内金七十四兩二分
内金六十八兩

運無難御手當貨
小名濱
江ノ網
平

内金六十一兩永二百文
内金六十七兩永二百五十文
内金六十二兩永二百五十文
内金六十五兩二分
一金四兩
一金六兩一分

荒濱日里寒風澤迄
小廻船運貨
寒風澤御團入用
銚子入増運貨

大阪廻シ

米百石二付
一金二十七兩二分
一金二十九兩二分
一金三十兩二分
一金三十四兩一分
一金四十五兩二分
一金三十八兩二分
一金四十一兩一分

播磨
美作
讚岐
備中
中津
中須賀
豐後
原浦

一金四十六兩一分 日向
 一金四十三兩 筑前
 一金五十九兩二分 筑後
 一金四十四兩二分 肥前
 一金四十六兩 石見
 一金七十二兩一分 丹後
 一金八十四兩 越前
 一金百三兩三分 出羽 酒田
 一金九十七兩二分 越後 新潟海老江
 一金九十四兩二分 同 今町
 一金九十五兩二分 同 柏崎
 一金九十四兩一分 佐渡 出雲崎
 一金九十二兩三分 同 大石
 東海道筋
 米百石二付
 伊美濃 勢州桑名積
 三州御馬積
 遠州掛塚積
 新中柳津積
 駿州清水積

一金二十二兩 駿州堅浦積
 一金十七兩二分 伊豆 下田 積
 右ハ諸國廻船運賃ノ儀御趣意相辨見詰直段ノ内ニ割方相減取調申上候處猶一割御吟味下ケ被 仰
 付候ニ付書面ノ通取調申上候尤其國々割引仕候ニ付端永相添永百二十五文以上ハ一分ニ切上ケ以
 下ハ切捨ト申上候以上

廻船御用達兼
 廻漕會社頭取
 加納次郎作 印

四年太政官第四百
 五十七ニ依リ消滅

五年太政官第六十
 二號ヲ以テ兵部省
 廢止

第千六 十月二十二日 (留守官)
 八月已來官祿隔月御渡相成候様於東京被 仰出候處當地之儀ハ御都合モ有之ニ付當年中月々御渡
 明年ヨリ御規則之通隔月御渡ニ相成候旨大藏省ヨリ申出候間此段爲心得相達候事
 第千七 十月二十三日 (兵部役所)
 當省邸内ニ婦人立入候儀者不相成候段兼而相達置候處今般太政官ヨリ御布告モ有之自然家族呼寄
 候ハ、邸内ニ住居可爲勝手候此度邸内ヲ區別シ別紙朱引之内者官廳ニ付婦人立入候儀者嚴ニ相禁
 候此段相達候事(別紙略ス)
 第千八 十月二十三日 (兵部省)
 甲 鎮 艦
 富士 艦

明廿四日 中宮品川 御發遣之節於其艦々祝砲相成候様此段相達候事
 但砲數之儀ハ富士艦者三拾三發之事

京都住居大夫士ノ面々別紙離形之通現石高至急取調當官へ可届出候事

(別紙)

美濃紙

高何石

何 某

外込高何石

癸亥年ヨリ丁卯年迄五ケ年平均一ケ年收納高

右

玄米何石

但何俵何斗入

永何貫文

外

玄米何石

但何俵何斗入

永何百文

現米何石

但何俵

永何貫文

右之通相違無御坐候以上

明治何月

何 某 印

第十十九 十月二十九日 (民部省)

預所アル 府 縣 諸 藩

一 郷 帳

一 村 鑑 帳

一 御 林 帳

一 高 國 郡 村 名 帳 但假名附

是ハ郷帳其外トモ差出方兼テ相達置候處于今不差出向モ有之候ニ付早々差出候様可致事

一 高 反 別 取 米 永 一 村 限 帳

是ハ別紙案ノ通取調可成丈早々差出候様可致事

一 各 府 縣 内 去 辰 年 ヨリ 前 二 拾 ヶ 年 分 厘 附 帳 一 村 限 郡 譯 ニ イ タ シ 村 毎 餘 紙 二 枚 ツ 、 差 入 美 濃 紙 豎 帳

ニ 寫 取 國 限 ニ 取 調 何 レ モ 一 縣 一 冊 ニ 綴 上 郡 譯 國 限 ノ 處 青 紙 見 出 シ ヲ 付 取 調 出 來 次 第 早 々 差 出 候 様 可 致 事

(別紙)

高反別取米永一村限帳

村高何程

内高何程

此反別何程

此 譯

上田高何程

無地高
小物成高

何國何郡

何 村

石盛幾ッ
反米何程

此反別何程
 此取米何程
 荒地有之候ハ、内書ニ荒地高反別ヲ記シ殘高反別へ取米ヲ記シ可申候若段免等有之候得者
 殘高反別ノ内書ニ記シ分ケ可申餘準之
 幾ッ
 反米何程
 中田高何程
 此反別何程
 此取米何程
 幾ッ
 反米何程
 下田高何程
 此反別何程
 此取米何程
 此他幾廉有之候トモ石盛限書記シ可申候
 小以田高何程
 此反別何程
 此取米何程
 檢見村ノ分ハ此取米ノ下へ平均反米ヲ記シ位限ニハ不及候事
 幾ッ
 反永何程
 上畑高何程
 此反別何程
 此取永何程
 幾ッ
 反永何程
 中畑高何程
 此取永何程
 幾ッ
 反永何程
 此反別何程

此取永何程
 下畑高何程
 此反別何程
 此取永何程
 屋敷高何程
 此反別何程
 此取永何程
 小以畑高何程
 此反別何程
 此取永何程
 右ハ當^府管轄所高反別取米永一村限書面ノ通御座候以上
 年號 月
 民 部 省
 各 府 縣
 第千二十一 十月
 從嘗十月官位相當表ノ通り官祿被立下追テ取足シ可被 仰付候旨先般相達候通り就テハ其官共省
 及其他局ヨリ人名取調早々大藏省へ可申出候事
 但御渡シ日限ノ儀ハ追テ可相達候事
 第千二十一 十月 (本政官)
 職員録配達ノ儀以來諸官省諸府縣共壹冊宛ト相定候事
 第千二十二 十月
 明治三十二年十月 第千二十一 第千二十二

十年一月二十三日
 廢止
 五年七月二十五日
 樂院院達白書受付
 規則ニ依リ消滅

集議院規則追加

建白取扱規則

- 一 建言者參院スレハ院ノ使部ニ名刺ヲ出スヘキ事
- 一 使部建言者ノ名刺ヲ以テ院掌ニ出ス院掌參院ノ順序ヲ以テ應接所ニ呼出シ建白書一覽ノ上其主意ヲ表出シ姓名月日ヲ簿記スヘキ事
- 一 簿記シ了テ其書ヲ大主典ニ出ス大主典受テ同ク姓名月日ヲ簿記シ權判官ニ出ス權判官受テ之ヲ閱シ落手スヘキ事
- 一 右了テ院掌落手ノ旨ヲ建白者ニ達スヘキ事
- 一 毎日建白掛ノ幹事一名ツ、集議院へ相詰判官權判官ト同ク諸建白類取調可申事
- 一 諸部中ヨリ議員四名ヲ公選シ一人ツ、交番三八ノ日ニ幹事一同集會諸建白ヲ讀シ可否ヲ付可申事
- 但二七ノ日タリ外ニ議事無之節ハ同斷ノ事
- 一 前條會議ノ節建言者ヲシテ出席セシメ自ラ讀上ケ可爲致候事
- 但讀上迷惑ノ向ハ院中官員ニテ代讀致シ候事
- 一 前條讀上ノ上評論可有之事
- 右ノ節建白者自ラ辨解致度向ハ任其意又代辨ヲ乞者アラハ可爲勝手事
- 一 衆議ノ上可否ノ數ヲ問ヒ五分三ヲ以決着候事
- 但可ト決シ候ハ、長官ノ酌定ニテ官印ヲ押シ向々へ差遣可申否ト決シ候ハ、其旨當人へ諭シ建白書差戻シ候事
- 一 可ト決シ候上政府ノ參考ニ備ヘキ書ハ大意ヲ提ケ別記シ本書ト并テ長官次官參朝ノ時之ヲ呈ス

ヘキ事

一向々へ差遣候後時ヲ以掛合其成行ヲ承リ可申事

但向々ニテ取捨ノ次第當人伺出候ハ、爲申聞候事

第千二十三 十月 (民部省)

觸頭

中下大夫上士采地ノ内去長年中御用ニ付上地被 仰付候者元地ニテ收納不濟者ハ御藏米ニテ御渡可相成ニ付右様ノ向有之候ハ、早々取調可申出

第千二十四 十月 (民部省)

諸縣

其縣管轄所川々普請ノ儀從來官普請自普請等其外仕來有之候ニ付先以仍舊慣處置追々土木司ニ於テ檢査御規則相立候迄ハ村方ノ申立等ニ任セ自己ノ見込ヲ以取扱或ハ伺中仕越等取掛候儀致間敷事

第千二十五 十月 (民部省)

實目改所之レ諸縣

其縣管轄所何驛貫目改所ノ儀自今別紙ノ通可相心得事

(別紙)

一 貫目改所破損修覆入費ハ縣常費用ノ外ニ相立可申事

一 貫目改所出張權少屬一人縣官人員定則官祿ノ外ニ相立爲宿代一ヶ月分金五兩被下候事

第千二十六 十月 (民部省)

外最寄 館山藩

房州野島燈明臺御取建中ニ付横須賀製鐵所首長佛蘭西人同州館山邊へ時々罷越候ノ處渡船賃其外諸品特別高價ノ趣相聞以ノ外ニ付以後過當ノ儀無之様急度可相觸候事

三年第六十九卷行

四年太政官第二百十九卷行

五年太政官第二百四號ニ依リ消滅

四年太政官第九
十二依り消滅

第千三十三 十一月二日(沙)(太政官)
近來無刀ニテ乘馬ノ者有之右ハ素ヨリ士族ノ輩ニハ有之間敷候得共口附其他ノ者トモ兵隊ニ相紛
レ右體ノ所業致シ候者有之哉ニ相見ヘ如何ノ事ニ付向後不心得ノ輩無之様其主宰ヨリ屹度取
締可致事

兵部省

五年太政官第六十
二號ヲ以テ兵部省
ヲ廢シ陸海軍兩省
ヲ置ク

第千三十四 十一月二日(沙)
大阪城其省管轄被 仰付候事
但外國人士官之者城内拜見願出候節ハ大阪府申談可取計事

大阪府

四年太政官第六百
八十二ヲ以テ武家
地ノ稱廢止

第千三十五 十一月二日(沙)
別紙之通兵部省ヘ 御沙汰相成候ニ付此旨相達候事(別紙ハ第千三十三)

東京府

第千三十六 十一月二日(沙)
戶籍改正之儀ニ付テハ深キ 思食ヲ以先般其府ヘ御委任被 仰付追々市在戶籍取調之順序相立候
得共武家地之儀ハ從來ノ體裁ニ因襲シ其管轄スル處不分明隨テ取締等モ精密難行届ヨリ自然無頼
ノ徒潛伏往々押込強盜等之所業ヲ恣ニシ下民之困厄不一方候ニ付其府申立之通自今府下市在ハ勿
論武家地トモ一切其府管轄ニ被 仰付候間戶籍一般之仕法取調府治之體裁相立候様可取計旨 御
沙汰候事

府藩縣

三年第六百二十九
參看

第千三十七 十一月二日(民部省)
酒造ノ儀ニ付テハ前々モ相觸候趣モ有之候處當年ノ儀ハ諸國一般不作米價追々沸騰及ヒ下民難澁
タルヘク候間向後及沙汰候迄ハ免許高ノ三分一造ト相心得可申萬一心得違ノ者有之過造密造等ノ
所業致候者有之ニ於テハ遂吟味釀酒並造道具等取揚當人ハ勿論所役人迄屹度嚴重之咎ノ可申付候
間其旨相心得堅ク可相守者也

三年第六百三ヲ以テ
京都出張大藏省廢
止

右之趣於府藩縣無洩觸示取締行届候様可致候事
第千三十八 十一月四日(留守官)
明五日大藏省京都府中ヘ引移ニ相成候間此旨爲心得相達候事

刑部省

四年太政官第三百
三十六ニ依り消滅

第千三十九 十一月五日(沙)
今般選部司被置候事
第千四十 十一月五日(沙)
今般刑部省中選部司ヲ被置職員如左

正 壹員 大佑 二員
少佑 二員 正九位相當 伍長 二十員
從九位相當 選部 八十員

右ノ通被 仰出候間此旨相達候事

大學校

第千六百六十二ヲ以
テ大學ト改稱
四年太政官第三百
六十一ニ依り消滅

第千四十一 十一月五日(沙)
其校主簿官位相當之儀更ニ御詮議之筋有之左之通被 仰出候間此旨相達候事
大主簿 是迄之通 權大主簿 新置從七位官
少主簿 改正八位官 權少主簿 新置從八位官
第千四十二 十一月五日(民部省)

府 縣
預所アル 諸 藩

去辰五月以來諸街道驛々附屬助郷申付候村々ハ右勤高ヘ掛リ候六尺給藏前入用免除ノ積相心得高
何程何街道何宿ヘ助郷相勤候ニ付免除ト申儀一村限美濃紙懸帳ニ取調早々可差出候事

五年太政官第三百七十四號ヲ以テ會計年度ヲ改ム

四年大藏省第五十四卷

第千四十三 十一月七日 (大藏省)

官省院臺校

今般出納總計取調候ニ付於諸官省昨辰年建官以來諸用途諸拂向共當九月ヲ限勘定仕上ケ致シ十二月中旬迄ニ當省へ御差出可有之事
一當十月ヨリ諸帳面新規相仕立來ル午年九月ヲ限リ勘定仕上前同様御取計ノ事
右之通後年御心得可有之事
用紙美濃紙堅帳表紙附袋綴

何月建官ヨリ當已九月晦日迄
御入用總計仕上帳

何
司官

入高

- 辰何月幾日 會計官ヨリ受取
- 一金何程 同何月幾日 何々ニ付何方ヨリ受取
- 一金何程 已何月幾日 大藏省ヨリ受取
- 同何月幾日 何々ニ付何方ヨリ受取
- 一金何程

合金何程

此拂

- 何月中定式御入用 金 何程
- 同月中臨時御入用 金 何程
- 右之通月々差出有之候清算帳帳尻ヲ以認入可申事
- 拂合金何程
- 入方ト差引
- 金 何程

已十月日

越 金

第千四十四 十一月七日 (留守官)

宮華族大夫士へ

大阪府下之儀ハ諸國輻湊ノ地ニテ自ラ惡徒潜伏イタシ易キニ付兼テ嚴重取締罷在候處宮華族等之家來主用私用ニ不拘彼地ニ止宿之節ハ其主人主人ヨリ當官へ届出候儀勿論ニ候得共動モスレハ數月又ハ累年滞在致シ如何之風聞相立候者モ間々有之趣ニ付向後三十日迄之止宿ハ聞届自然限日ニ至リ用濟相成兼候節ハ追届書差出シ其趣意柄ニ寄聞届可申候尤右届之限日過滞留罷在候ハ者可及礼問候間家來之者へ兼テ可申付置候此段相達候事
但届書へ滞留之日數相認大坂府へモ可差出事

第千四十五 十一月七日 (留守官)

彈正臺官員合印別紙之通届出候間此段爲心得相達候事

(別紙)

三年第二十八卷
四年太政官第三百三十六ヲ以テ彈正臺廢止

三年第百二十八卷

陳笠
提灯
法被

定則

彈正臺

臺印黑白縦筋白筋十
黒筋十
但シ縦筋ハカナガエ

尹

前立金紋

裏金

縁金

金皮短冊二枚

緒紫

大少忠 大巡察 大疏

金紋 裏金 金皮短冊二枚 緒紫

少巡察

銀紋 裏銀 緒白

少疏

銀紋 裏銀 緒黒

巡察屬

朱紋 裏朱 緒白

史生 臺掌

朱紋 裏朱 緒黒

使部

黒紋 裏黒 緒黒 但臺印ノ黑白振替

大疏以上自紋三ツ

少疏以上自紋二ツ

巡察屬以下自紋一ツ

但御紋 三ツ

臺中諸官員侍用

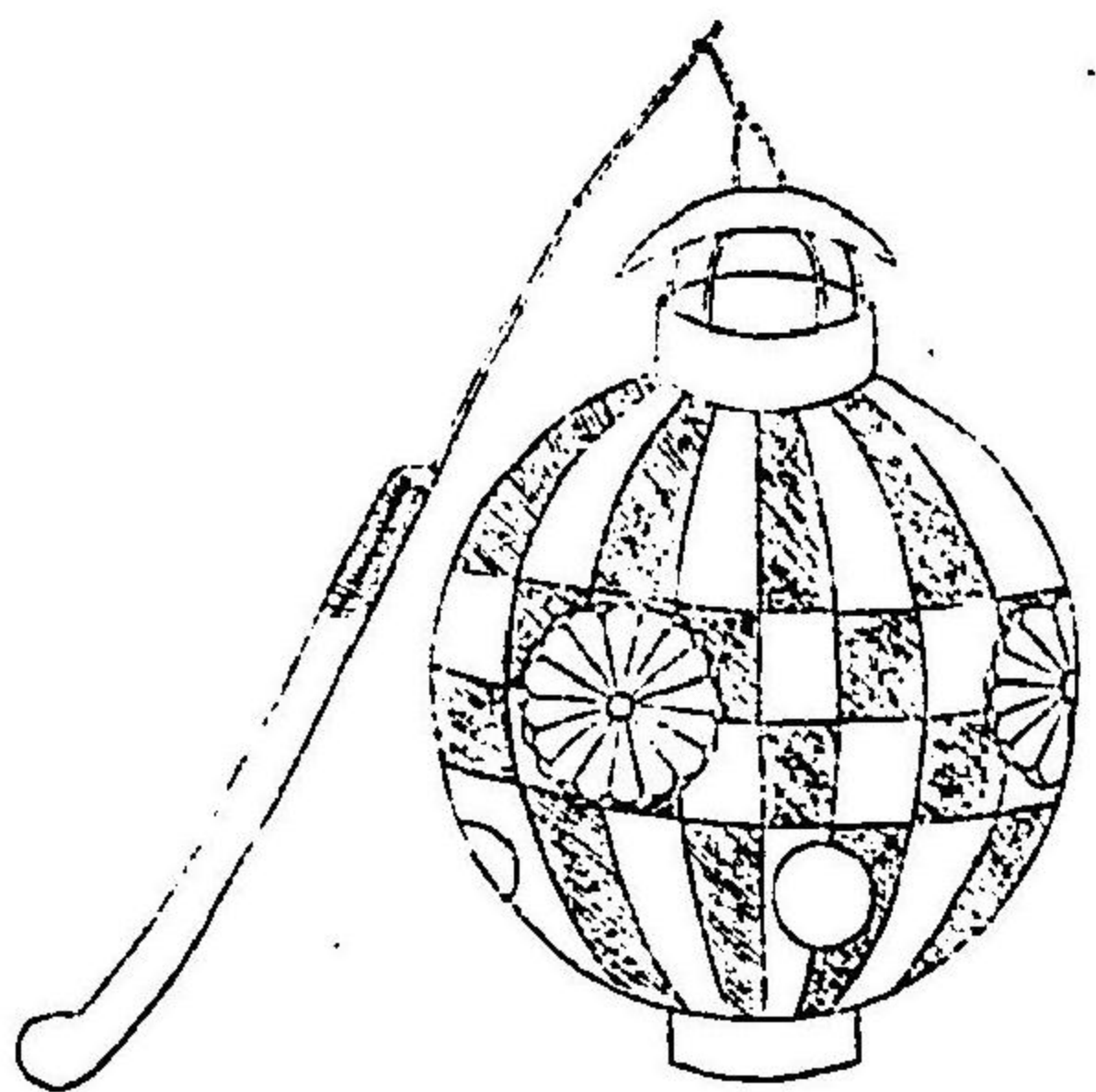
弓張手丸染分ケ同斷

但御紋二ツ自紋一ツ

同小使用

馬提灯染分ケ同斷

但御紋二ツ臺印紋一ツ



(圖印八赤)



法被

白筋ハ淺黄

黒筋ハ紺 紋白

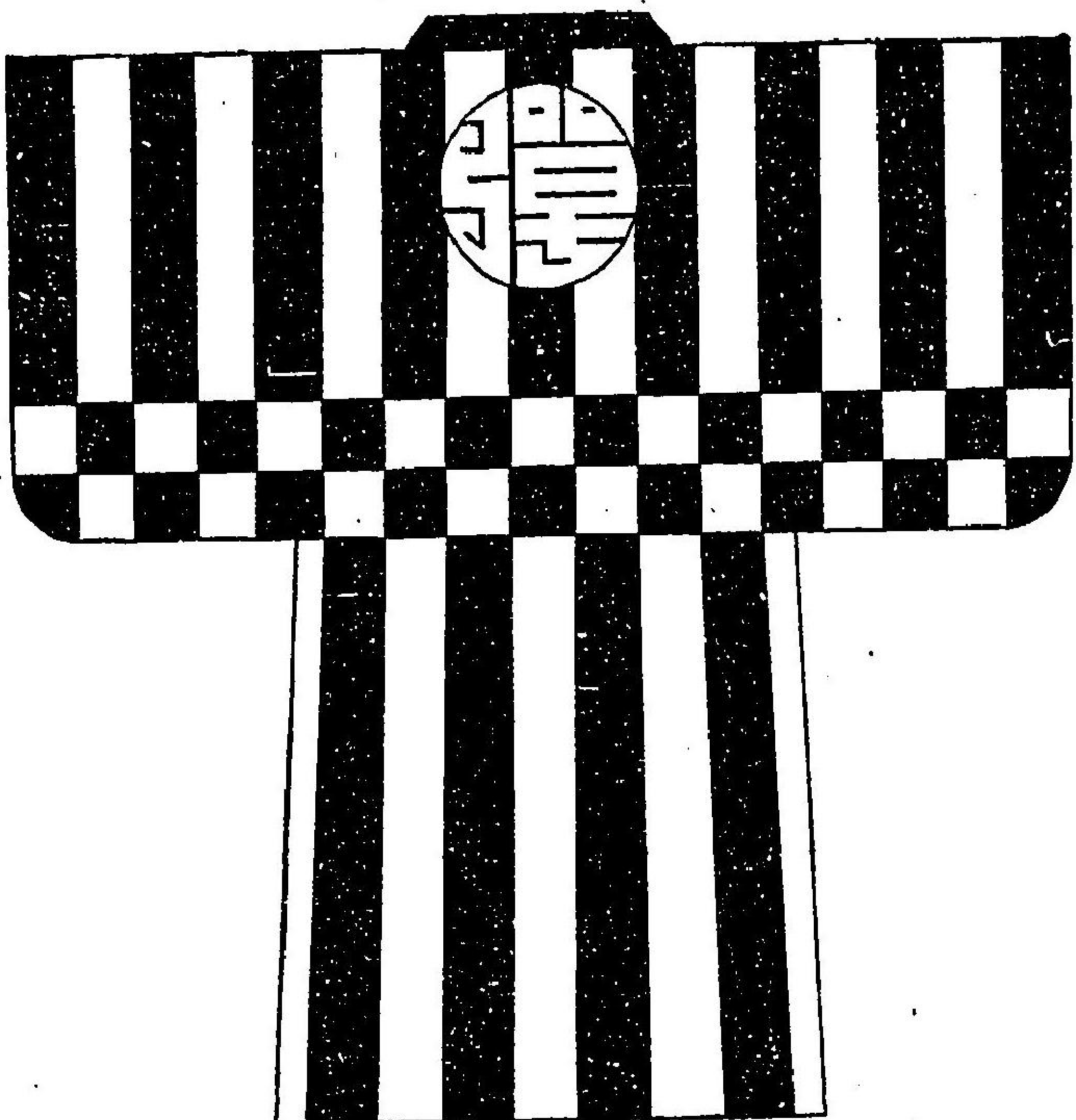
前染様同斷

衿總黒

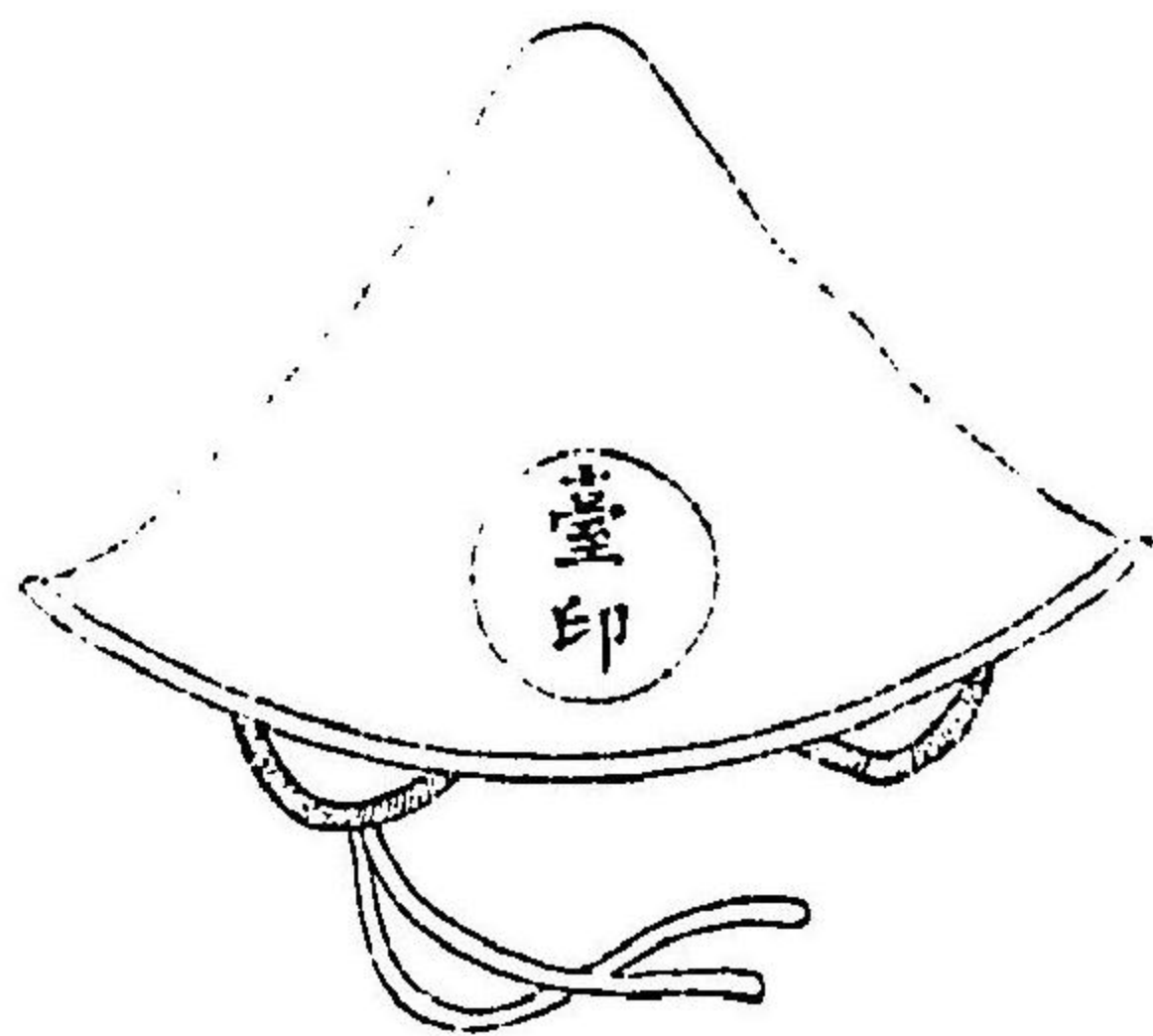
合羽

色 赤

裳印紋黄 但着大一前小二



赤地 紋白



十四年太政官第二十五號通ニ依リ消滅

第十四千六 十一月八日

尺度量衡於大藏省管轄被 仰付候事

第十四千七 十一月八日 (兵部省)

當省并寮司共官人生國舊藩何某之倅ト申事巨細取調可申出事

第十四千八 十一月九日 (民部省)

府藩縣

兼テ御布告有之候通大札引替ノ小札未十分ノ製造ニハ不至候得共融通差支難避ノ折柄ニ付高一萬石ニ付先三百兩迄ヲ爲目的來十五日ヨリ追々引替候條於府縣取纏引替札ハ印形致シ包座改ヲ受ケ大藏省へ可差出候事

但三府ノ儀ハ爲換會社小札ニテ致流通候ニ付追テ引換可及沙汰候事

明治三十四年十一月 第十四千六 第十四千七 第十四千八

第千四十九 十一月九日 (大藏省)

尾張國以東藩 縣

今般被 仰出候贖金引替金札ノ儀先一萬石ニ付三百兩ノ當ヲ以御下ケ渡相成候間來ル十五日ヨリ
爲請取別紙案文ノ通證書持參當省へ可罷出候事
但引換ノ贖金ハ包座ニ於テ改ヲ受ケ可差出事

證

總管轄

高 何 石

此金札何兩

但 一万石ニ付
三百兩ノ割

右ハ贖金ノ内銀壹ノ分代リ金札書面ノ通御下ケ渡請取申處仍如件

何縣知事

何ノ 誰 印

何藩知事

某

公用人

何ノ 誰 印

年 月

大 藏 省

第千五十一 十一月十二日 (達) (大藏省)

今般新貨幣御鑄造ニ付藩々ニ於テ當今無用ノ銅製大砲所持イタシ候ハ、相當ノ代價ヲ以テ御買上
ケニ相成候間東京真崎鑄錢座へ申出早々廻シ方可取計尤便利ノ爲吹崩シ相迴シ候トモ不苦候猶委
細ノ儀ハ大藏省へ可承合候事

四年太政官第二百
二十一ニ依リ消滅

三年第五百六十二
依リ消滅

第千五十一 十一月十二日 (大藏省)

官省院臺使

遠國路費規則中東京ヨリ京都迄人足一人ニ付金三兩ト確定相成候處此比ノ錢相場へ引當候得ハ不
的當ニ付吏ニ三兩ニ歩ト相定候間爲御心得御達申候也

第千五十二 十一月十三日 (布) (大藏省)

脱籍無産ノ輩先般復籍方被 仰出候處就中東京ハ從來人民輻湊ノ地ニシテ籍外ノ者來住無産遊惰
ノ徒不少候間別テ復籍方可取計ノ處其時々遠國ヨリ受取人差出候儀不都合ノ情實モ有之趣ヨリ自
然御旨趣難被行候テハ不相濟候條以來復籍人引渡候節ハ其者脱籍ノ始末並ニ生國親族等分明取調
ノ上書取相添當人並ニ家族共府藩縣送リヲ以テ引渡候間旅中入費ノ儀ハ其道筋府藩縣ニテ相賄可
申尤藩ノ儀ハ東京藩邸へ可引渡候事

四年八月支配ヲ免
ス

第千五十三 十一月十四日 (沙)

仙臺藩

亘理元太郎

石狩國之内

札幌郡 空知郡

右兩郡之内其方支配被 仰付候間地所之儀ハ石狩府ヨリ受取可申事

第千五十四 十一月十五日 (布) (大藏省)

諸獻上ノ儀是迄ノ通り辨官へ相伺其獻物ハ直ニ宮内省へ可相納候事

第千五十五 十一月十五日 (布) (大藏省)

官 省

四年太政官第三百
四十三第百九二
依リ消滅
四年太政官第七
十卷

今般東京府ニ於テ府治體裁夫々規則可相立被 仰出候ニ付テハ戶籍取調且又地方ニ致關係候儀ハ東京府ヨリ直ニ處置可致候條其旨相心得右等ノ儀ハ東京府ヨリノ指圖可受事

兵部省

四年十月二十三日
遷奉ヲ置キ府下ヲ
警備ス

第千五十六 十一月十五日(沙)
東京府下取締筋ニ付兵備無之テハ不相濟儀候得共府兵取立不容易儀ニ付當分之處東京府ヨリ兵士入用之見込共省へ申達次第諸藩兵士人撰致シ同府へ可差送其上ニテハ約束號令賞罰黜陟ニ至ル迄都テ同府へ御委任被 仰付候得共兼テ共省ニ於テモ可相心得置候事

東京府

但重大之儀處置致シ候節ハ東京府ヨリモ共省へ可申達候事

第千五十七 十一月十五日(沙)
共府取締筋ニ付兵備無之テハ不相濟儀候得共府兵取立不容易儀ニ付當分之處兵部省ヨリ差送り相成候諸藩兵士ヲ以府兵之姿ニ組立約束號令賞罰黜陟ニ至ル迄都テ共府へ御委任被 仰付候事

但重大之事件ハ可相伺且兵部省へモ可申達事

天津川郷中執事

三年第百三十六
以テ出張所廢止

第千五十八 十一月十五日(兵部省)
今般其郷中ニ當省出張所被設郷中大小之事務都テ於出先取扱候就而者明十六日鷲尾陸軍少將其餘役々當地發途入郷致候條一紗出張所ニ出仕申付候間萬端指揮ヲ受可申事

但京詰執事初一同歸郷申付候間相達候事

第千五十九 十一月十五日(兵部省)

一 天津川郷之儀者御由緒有之ヲ以格別之御扱モ被 仰付置候儀ニ付孰モ禮義廉恥ヲ辨別シ協和一致一層士風正シク厚相心得可罷在等之所御復古内外御多端之御時節モ不顧近來混雜之筋不少殆確執之勢ニ立到不容易御手煩ヲ相掛不相濟事ニ候向後屹度相改郷中淳信一和致シ士道相守御奉公筋厚相心得可申事

同上

一 此度其地ニ當省出張所ヲ設ケ郷中大小之事務總而取置致候ニ付而者指揮命令聊無違背堅相守可申ハ勿論萬一御政體之得失存付モ有之候ハ、無忌憚出張所江可申出候若存意難相貫義モ有之節ハ一應出張所江其主趣申立届之上本省江可申出候ニ内線ニ託シ越訴ケ問敷儀於有之ハ可爲曲事者也

第千六十 十一月十五日(留守官)

來廿四日新嘗祭於神祇官代被爲執行候ニ付廿二日暮六ツ時ヨリ廿五日朝五ツ時迄佛事類梵鐘等停止ノ事

第千六十一 十一月十七日(民部省)

府 縣
預所
諸 藩

御取箇帳ノ儀自今別紙雛形ノ振合ニ取調小以寄總寄共青紙ニテ見出シヲ付可申且添書物ノ儀御取箇附ノ始末並五ヶ年平均書付而已差出候様可致候事

(別紙)

明治二己巳年 破免御取箇目錄
檢見

申ヨリ已迄拾箇年
丑ヨリ戌迄拾箇年
當巴ヨリ亥迄拾箇年
戌ヨリ辰迄七箇年
當巴ヨリ亥迄七箇年
丑ヨリ已迄五箇年
當巴ヨリ西迄五箇年
定免

五年四月大藏省達
ヲ以テ改ム

未年ト差引
米何程
永何程
此譯

同同

田高何程

此反別何程

高何程
此反別何程

年々引高相立候分

内

高何程
此反別何程

當已起返

外高何程
此反別何程
小以高何程
此反別何程

殘高何程

此反別何程

内米何程
米何程
米何程
米何程
米何程
米何程
米何程

高免何程
毛付免何程
去辰増

定免切替増
新規定免増
本免入増
免上増
起返増
破免立辰増

畑高何程

此反別何程

高何程
此反別何程

年々引高相立候分

内

高何程
此反別何程
小以高何程
此反別何程

連々可起返引高之分

變高何程

此反別何程

此取 米何程
永何程

去辰同欸

酉ヨリ午迄拾箇年
戌ヨリ未迄拾箇年
亥ヨリ巳迄拾箇年
子ヨリ午迄七箇年
丑ヨリ巳迄五箇年
寅ヨリ午迄五箇年
卯ヨリ巳迄三箇年
當已破免
一高何程

定免之内

何國何郡
何拾何箇村

此反別何程
内高何程
此反別何程

諸引

高何程
此反別何程
內高何程
此反別何程
外高何程
此反別何程
高何程
此反別何程
殘高何程

年々引高相立候分
連々可起返引高之分
當已起返
當已何々皆無引

此反別何程
此取永何程

內永何程
米何程
永何程

增
定免切替增
破免立戻增
屋敷成增
起返增
破免檢見減

外米何程

差引
米何程
永何程

去長減歟
去長增歟

辰年下差引
米何程
永何程

減歟增歟
減歟增歟

卯年下差引
米何程
永何程

寅年下差引
米何程
永何程

丑年下差引
米何程
永何程

子年下差引
米何程
永何程

亥年下差引
米何程
永何程

戌年下差引
米何程
永何程

酉年下差引
米何程
永何程

申年下差引
米何程
永何程

未年下差引
米何程
永何程

同同 同同 同同 同同 同同 同同 同同 同同 同同

此譯

田高何程

此反別何程

高何程

此反別何程

內高何程

此反別何程

高何程

此反別何程

小以高何程

此反別何程

殘高何程

此反別何程

此取米何程

內米何程

內米何程

外米何程

差引

米何程

畑高何程

此反別何程

高何程

此反別何程

年々引高相立候分

連々可起返引高之分

當已何々皆無引

高免何程

毛付免何程

增

定免切替增

破免立戻增

破免檢見減

去辰減歟增歟

年々引高相立候分

內

高何程

此反別何程

外高何程

此反別何程

小以高何程

此反別何程

殘高何程

此反別何程

此取米何程

永何程

內永何程

內永何程

檢見取

一高何程

內高何程

內高何程

此反別何程

內高何程

此反別何程

高何程

此反別何程

高何程

此反別何程

連々可起返引高之分

當已起返

去辰增歟
屋敷成增歟
起返增歟

何國何郡

何拾何ヶ村

無地高

反別不知

諸引

年々引高相立候分

連々可起返引高之分

內
高何程
此反別何程
高何程
此反別何程

當已何々引
當已何々皆無引

殘高何程

此反別何程

此取米何程
永何程

內米何程
永何程

增

內米何程
永何程

免直增
右同斷
檢見增

外米何程
永何程

檢見減
損地減

差引

永何程

去長增歟
去長減歟

辰年下差引
永何程

卯年下差引
永何程

增歟
減歟

同同

寅年下差引
永何程

同同

丑年下差引
永何程

子年下差引
永何程

同同

亥年下差引
永何程

同同

戌年下差引
永何程

同同

酉年下差引
永何程

同同

申年下差引
永何程

同同

未年下差引
永何程

同同

此

同同

田高何程

此反別何程

高何程
此反別何程
內高何程
此反別何程
高何程
此反別何程
小以高何程
此反別何程

年々引高相立候分
連々可起返引高之分
當已何々皆無引

殘高何程

此反別何程
此取米何程

內米何程

高免何程
毛付免何程

外米何程

檢見增
檢見減

差引
米何程

去辰增歟減歟

畑高何程

內高何程

此反別何程

反別不知

高何程

內高何程

此反別何程

年々引高相立候分
反別不知

內高何程
此反別何程

連々可起返引高之分

高何程

此反別何程

小以高何程

此反別何程

當已何々引

殘高何程

此反別何程

此取米何程
永何程

內米何程
內永何程

免直增歟

外永何程
差引

損地減歟

米何程
永何程

去辰增歟減歟

當已御高入新田
檢見取

何國何郡

何々村

此反別何程

內高何程

此反別何程

高何程

此反別何程

內

高何程
此反別何程

諸引

年々引高相立候分

連々可起返引高之分

殘高何程

此反別何程

此取米何程

此譯

田高何程

此反別何程

高何程
此反別何程

內

高何程
此反別何程

小以高何程
此反別何程

殘高何程

此反別何程

此取米何程

畑高何程

此反別何程

高何程
此反別何程

內

高何程
此反別何程

年々引高相立候分

連々可起返引高之分

高免何程
毛付免何程

年々引高相立候分

連々可起返引高之分

小以高何程
此反別何程

殘高何程

此反別何程

此取永何程

一反高何程
此譯

田何程

內何程

殘何程

此取米何程

外米何程

當已何々皆無引

反米何程

檢見
去辰減歟

畑

菴畑
芝畑
野畑

田畑成

何程

內

殘何程

小以何程
此取永何程

年々引方ニ相立候分

連々可起返引方之分

反永何程

一反別何程

此譯

去辰同歟

見取

田何程

何程

內何程

何程

小以何程

年々引方ニ相立候分
連々可起返引方之分
當已何々皆無引

殘何程

此取米何程

內米何程

反米何程

檢見
去辰増歟

畑 附洲

葭生葭野何程

菅野柳畑

何程

內

何程

小以何程

年々引方ニ相立候分

連々可起返引方ノ分

殘何程

此取米何程
永何程

定取切替歟

去辰増

何國

無地高並何高

反別不知

小以高何程

內高何程

內高何程

此反別何程

內永何程

內高何程
此反別何程

當已御高入新田

諸引

年々引高ニ相立候分

反別不知

連々可起返引高之分

當已起返

當已何々引

當已何々皆無引

內高何程
此反別何程

高何程

內高何程
此反別何程

高何程

此反別何程

內
外高何程
此反別何程

高何程
此反別何程

高何程
此反別何程

殘高何程

此反別何程

此取米何程
永何程

外高何程
此反別何程

當已起返

當已何々皆無引

高何程
此反別何程
小以高何程
此反別何程

殘高何程
此反別何程
此取米何程

高免何程
毛付免何程

內米何程

當已御高入新田取米差引除之

內米何程

增
定免切替增

米何程

增
新規定免增

內米何程

增
本免入增

米何程

增
起返增

米何程

增
破免立戻增

外米何程

減
檢見減

內米何程

減
破免檢見減

差引
米何程

減
檢見減
去辰減歟增歟

畑高何程

反別不知

內高何程
此反別何程

內高何程
此反別何程

當已御高入新田

高何程

年々引高相立候分

內高何程
此反別何程

反別不知

內高何程
此反別何程

何々可起返引高之分

外高何程
此反別何程

當已起返

高何程
此反別何程

當已何々引

小以高何程
此反別何程

殘高何程

此反別何程

此取米何程
永何程

內永何程

當已御高入新田取永差引除之

內永何程

增

永何程

屋敷成增

內永何程

免直增

外永何程

右同斷

差引

損地減

起返增

外
內米何程
內永何程

去辰減歟
去辰增歟

一反高何程

內何程

何程

內何程

殘何程

此取米何程

外米何程

檢見
去辰減歟

此譯

田何程

內何程

殘何程

此取米何程

外米何程

反米何程

檢見
去辰減歟

菅畑 芝畑
田畑成 野畑
何程

內何程

年々引方ニ相立候分
連々可起返引方之分

小以何程

殘何程

此取永何程

去辰同歟

反永何程

見取

一反別何程

內何程

何程

內何程

殘何程

此取米何程

永何程

內米何程
內永何程

檢見
去辰增歟
定取切替歟
去辰增

此譯

田何程

何程

內何程

何程

小以何程

殘何程

年々引方ニ相立候分
連々可起返引方之分
當已何々皆無引

此取米何程

內米何程

畑附洲
穀生藪野何程
菅野柳畑

內何程
小以何程

殘何程

此取永米

合高何程

內高何程

此反別何程

內高何程
此反別何程

內高何程
此反別何程

高何程

內高何程
此反別何程

檢見
去辰增歟

年々引方ニ相立候分
連々可起返引方之分

內永何程

何何
無地高並何高
反別不知

當已御高入新田

諸引

年々引高ニ相立候分

反別不知

連々可起返引高之分

當已起返

當已何々引

當已何々皆無引

內
高何程
此反別何程
外高何程
此反別何程

高何程
此反別何程

高何程
此反別何程

殘高何程
此反別何程

此取永米何程

內米何程
內永何程

內永何程

當已御高入新田取米永差引除之

增

米何程
米何程
米何程
米何程
米何程
米何程
米何程
米何程
米何程
米何程

定免切替增
新規定免增
本免入增
免返上增
起同返增
破免立辰增
屋敷成增
免同直增
右同見增
檢同見增

外米何程	減
永米何程	破地檢見減
內米何程	檢見減
差引	去辰減歟
米何程	去辰增歟
永何程	增歟
辰年下差引	減歟
米何程	同同
永何程	同同
卯年下差引	同同
米何程	同同
永何程	同同
寅年下差引	同同
米何程	同同
永何程	同同
丑年下差引	同同
米何程	同同
永何程	同同
子年下差引	同同
米何程	同同
永何程	同同
寶曆二申年下差引	減歟增歟
米何程	
永何程	
延享元子年下差引	

米何程	減歟增歟
永何程	
前々高免下差引	
米何程	
永何程	
此譯	
田高何程	
此反別何程	
內高何程	當已御高入新田
此反別何程	年々引高二相立候分
高何程	連々可起返引高之分
此反別何程	當已起返
內高何程	當已何々皆無引
此反別何程	
外高何程	
此反別何程	
高何程	
此反別何程	
小以高何程	
此反別何程	
殘高何程	
此反別何程	
此取米何程	高免何程
	毛付免何程
內米何程	當已御高入新田取米差引除之

此反別何程

此取米何程
永何程

外米何程

高何程

此反別何程

此取米何程
永何程

外

一反高何程

內何程

何程

內何程

何程

殘何程

此取米何程
永何程

外米何程

此譯

田何程

內何程

御取箇附候分

定免辻減

檢見御取箇附候分

諸引

年々引方ニ相立候分

連々可起返引方之分

當已何々皆無引

檢見

去辰減歟

當已何々皆無引

殘何程

此取米何程

外米何程

反米何程

檢見

去辰減歟

畑芝畑何程
畑野畑何程
田畑成

內

何程

小以何程

殘何程

此取永何程

去辰同歟

反永何程

去辰同歟

一反別何程

內何程

何程

內何程

何程

殘何程

此取米何程
永何程

諸引

見取

年々引方ニ相立候分

連々可起返引方之分

當已何々皆無引

米何程
内 永何程
此譯

檢見
去辰増歟
定取切替歟
去辰増

田何程
何程
内何程
何程
小以何程

年々引方ニ相立候分
連々可起返引方之分
當已何々皆無引

殘何程
此取米何程

内米何程

反米何程
檢見
去辰増歟

畑 附洲
葭生葭野何程
萱野柳畑

内何程
何程
小以何程

年々引方ニ相立候分
連々可起返引方ノ分

殘何程
米何程
永何程

内永何程

定取切替歟
去辰増

右者何藩御預所何縣府 支配所何々國村々當已定免破免檢見御取箇書面之通候也
明治二己巳年十一月

第千六十二 十一月十七日 (民部省)

苗字官名印

村名唱替或ハ合村分村等ノ儀ハ其度々民部省へ伺ノ上差圖請候様可致候事

府 縣

第千六十三 十一月十八日 (京都兵部省)

兵 器 司

武庫司被建置候ニ付而者自今兵器司被廢候條此段相達候事

第千六十四 十一月十九日 (布) (太政官)

來廿四日新嘗祭ニ付廿二日晚ヨリ廿五日朝迄 御神事候事
重輕服者並僧尼參 内可憚事

火ノ元別テ相慎可申並梵鐘一切停止ノ事
但シ出火ノ節ハ格別ノ事

第千六十五 十一月十九日 (布) (太政官)

來廿四日新嘗祭ニ付勅任官以上酉ノ刻ヨリ無遲遲參 朝可致奏任官以下ハ巳ノ刻ヨリ申ノ刻迄其
官省ニ於テ拜賀申上名刺取集其長ヨリ言上可致事

但勅任官以上衣冠着用可致所持無之者ハ狩衣直垂ニテモ不苦奏任以下ハ直垂着用可致所持無之
者ハ麻上下ニテモ不苦候事

第千六十六 十一月十九日

航海者へノ布告

四年太政官第三百
七十五ヲ以テ民部
省廢止六年大藏省
第九十九號參看
三年第二百六十四
ヲ以テ京都詰司廢
止

四年二月本收戒嚴
丸下改稱

一横濱港碇泊場之東南即チ本牧ヨリ出張タル淺瀬ノ外面へ一箇ノ燈明船ヲ設置セリ
 一此燈明船ハ深サ十尋ノ所ニ設置シ赤色ヲ以テ之ヲ塗リ前柱ノ上へ赤色ノ玉ヲ掲ケリ
 一日没ヨリ日出マテ赤色不動ノ燈明ヲ水上ヨリ三十六「フート」ノ高サニ掲ケ其光線十「マイルス」
 我四里二丁ニ達ス
 一本牧ノ鼻ハ燈明船ヨリ南三十三度西ニ當リ「メンデリン」本村地内ニテ通俗ハ南五十三度西ニ當
 リ堀割ノ口ハ西ニ當レリ是レ實測ナリ

千八百六十九年第十二月二十一日 我巳十一月十九日於横濱燈明臺役所
 日本政府築造方
 アール、ヘンリー、プラントン

第千六十七 十一月十九日 (民部省)

此度航海ノ舟船認津便宜ノ爲メ房州へ燈明臺御取建相成候處其縣取扱相摸國城ヶ島ニテモ箒焚候
 テハ海上ノ舟々乗筋目標可相失候間右箒ノ儀ハ速ニ相廢候様可致候此段申達候也

第千六十八 十一月十九日 (民部省) 府 藩 縣

今般新貨幣鑄造被 仰出候ニ付諸府藩縣ニ於テ是迄既ニ掘來候金銀銅ノ鑛山並年々掘出高等逐
 一明細ニ書記當年中當省へ差出可申事

但金銀銅トモ東京並大阪兩地大藏省ニ於テ相當ノ價ヲ以御買上ケニ相成候ニ付右地へ運送着荷
 ノ上ハ速ニ同省へ可届出勿論諸方ニ於テ勝手ニ賈捌ノ義決テ不相成事

第千六十九 十一月二十日 (布)(太政官) 在東京華族

來ル二十四日新嘗祭ニ付已刻ヨリ申刻迄ニ參賀可有之事

但衣冠之事尤輕重服之輩ハ可憚事

第千七十 十一月二十日 (口達)(太政官)

在東京藩知事有位ノ華族隱居嫡子親 天機之事

朔日 十五日

但朔日伺 天機之輩衣冠着用之事

第千七十一 十一月二十日 (民部省)

諸府縣米相場書出方は迄區々ニ付以來其府縣管轄所ノ内米相場相立候場所毎ニ其月十日二十日晦
 日ノ分別紙ノ通半紙堅紙ニ爲認一綴ニ致シ奥印ノ上差出候様可被致候事

但本文日限相場立無之場所ハ定日前後ノ相場書可差出候事

(別紙)

覺

- 上古米何程ニ付 代何程
- 一中古米同斷 代何程
- 下古米同斷
- 上新米何程ニ付 代何程
- 一中新米同斷
- 下新米同斷
- 右ハ當何月何日私共町方市相場書面ノ通相違無御座候以上

何郡
 何町
 何村
 三役人
 並 穀問屋

四年太政官第六百八十八ヲ以テ改ム
 四年大藏省第百十九ヲ以テ改ム

四年太政官第三百六十二依リ消滅

何月

連 印

右之通相違無御座候以上

三年第百八十五ヲ
以テ改ム

第千七十二 十一月二十日 (留守官)

是迄當表傳馬所ヨリ御用人足御定賃錢ニテ諸方へ持出候處元來片繼之場所不都合之次第モ有之ニ付向後傳馬所廢止更ニ人足請負方ヨリ當節物價相應之賃錢ヲ以テ人足買上諸荷物爲持出候様京都府ヨリ申出候間爲心得此段相違候事

但人馬管轄ノ儀ハ從前之通驛遞掛ニテ取扱候ニ付御用人馬繼立候節ハ京都府へ掛合可申事

第千七十三 十一月二十二日 (太政官)

太政官規則

一日々十字ヨリ十二字迄小御所 出御ノ事

一十字ヨリ十二字迄政廳議事顧問屆諸書類辨官ニテ見込書付各分課ノ印ヲ押シ持參之事

但機務議事ハ別段之事

一出御中三職ノ中ヨリ商議ノ事件奏聞 宸斷ヲ經テ辨官ニ下シ施行ノ事

一議事中之急ノ事件ト雖モ諸官員許可ヲ得サレハ入ルコトヲ禁ス

一諸官省願同等十二字ヨリ十字迄辨官へ出スヘキ事

但辨官ヲ經スシテ出スモノハ非違タルヘキ事

一制可ノ事件大臣不參ノ節ハ納言參議ニ於テ施行可致事

一官廳坐次上ノ間上段大臣納言參議着坐辨官東ノ間分課ヲ以テ着坐ノ事

一御前參仕ノ輩衣冠狩衣直垂等ノ内着用可有之事

一日々十字出仕二字退出ノ事

但節朔一六休暇ノ事

右ノ規則ヲ犯ス者ハ彈正其非違ヲ糺スヘキ事

第千三百三十七ヲ以
テ大學校代ヲ置ク

第千五百五十五參看

第千七十四 十一月二十二日 (沙)

大學校

一學校規則相立候迄京都學校取建之儀可見合候事

第千七十五 十一月二十二日 (民部省)

御取箇帳差出方ノ儀檢見濟歸縣ノ日ヨリ凡四十日ヲ期限ト致シ差出候様當九月中相違置候處當已租稅辻總溢米金至急御取調ノ儀有之候間關東ハ來晦日迄遠國ハ迅速ニ可差出候事

第千七十六 十一月二十二日 (留守官)

宮華族へ

今般傳馬所廢止ニ付テハ是迄親王華族無賃ニテ人夫遣方ノ儀驛遞掛ニテ取扱來候處以來ハ右掛ヨリ不繰入候間兼テ御規則之通一ヶ年高百石ニ付十人遣之割ヲ以テ直ニ領民遣方ニ可相成旨京都府ヨリ村々へ達置候間爲心得此段相違候事

第千七十七 十一月二十三日 (太政官)

無提灯ニテ夜行ノ儀兼テ被禁置候處今般東京府下嚴重取締被 仰付候就テハ以來夜五時ヨリ無提灯ニテ往來致シ候者於有之ハ見受次第速ニ可召捕旨東京府兵隊へ御達相成候間此旨相心得可申候萬一御布告ニ相悖リ被召捕候テ彼是苦情申立候共御取上不相成候且諸御門ニテモ無提灯ノ輩屹度指止候筈ニ付末々ノ者ニ至ル迄其主宰主宰ヨリ厚ク可申開置候事

第千七十八 十一月二十二日 (留守官)

今般淀河筋通船之儀舊來ノ弊習總テ改正別紙之通規則相立候旨京都府ヨリ申出候間是迄御用船ト唱へ無賃或ハ聊之賃錢ヲ以テ雇入候儀後向一切不相成候此段相違候事

(別紙)

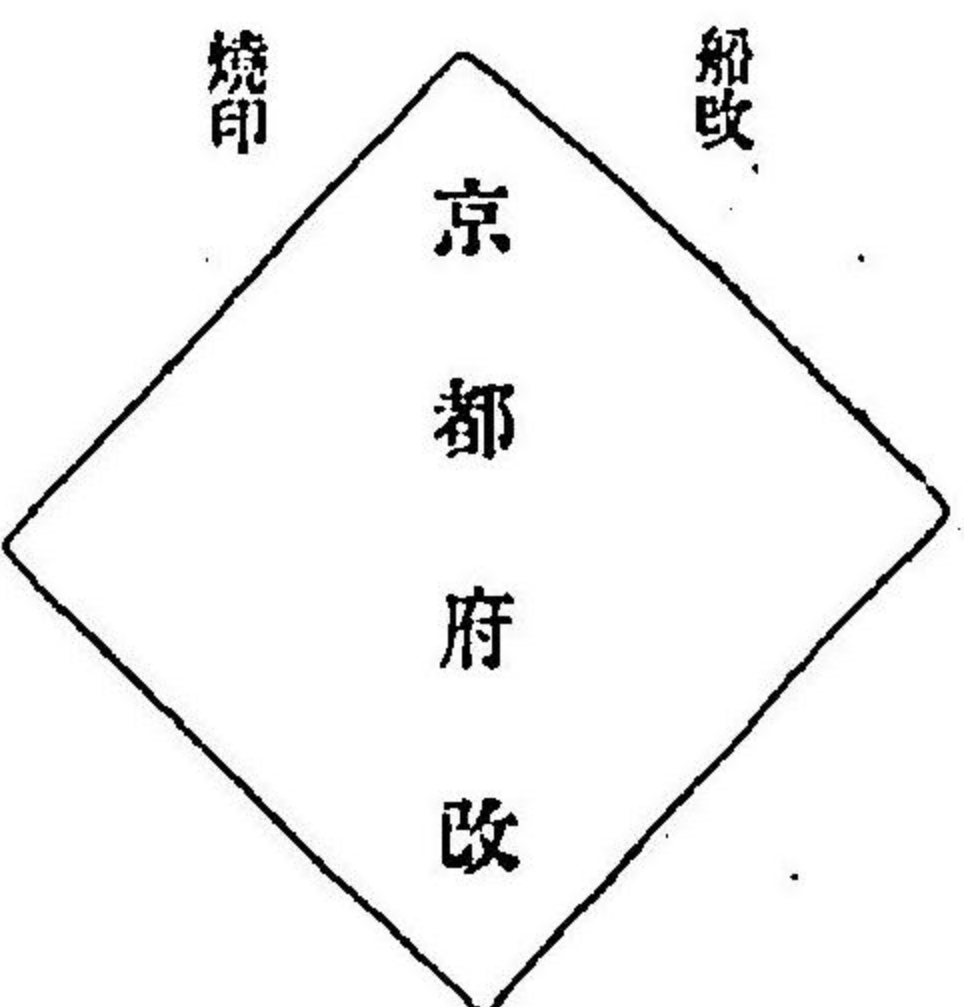
淀川運漕改革

一淀川船總テ土木掛リ管轄申付候事

一伏見新船淀二拾石木津六ヶ濱船等燒印相打可申事

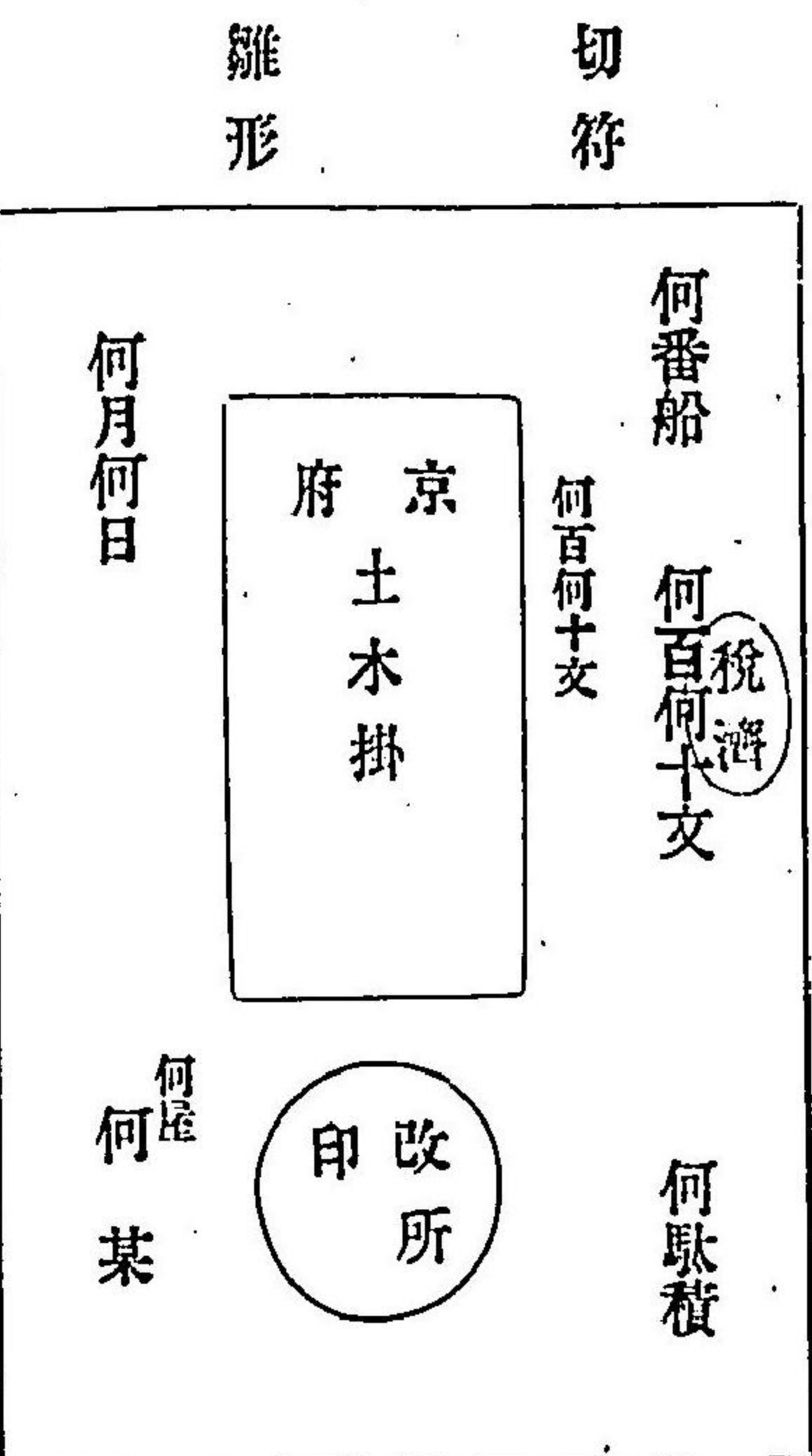
但船毎ニ板札相渡シ置候事

明治三十二年十一月 第七千七十四 第七千七十五 第七千七十六 第七千七十七 第七千七十八



一 淀川通船改所
 一 淀船改所
 一 伏見淀ヨリ下リ船之分其所ニテ相改定之稅錢爲納左ノ切符相渡大阪改所へ爲納可申事

伏見三栖半町
 淀納所六番町裏



右府土木掛之印者其役所總轄之者預之毎朝印紙數相改下役江相渡シ置出錢員數ト印紙數殘高ト引合可申事

- 一 諸番所ヨリ日々上下船數改高并稅高一ヶ月分押切帳相添毎月三日本局江可相納事
- 一 伏見淀船共登リ荷ハ大阪ニテ稅錢可取立事
- 一 大阪船伏見船共下リハ伏見淀共荷積致候處ニテ稅錢可取立事
但空船ノ分ハ稅取立不申候事
- 一 御用船ト唱へ無賃又ハ聊ノ賃錢ヲ以テ雇入候儀固ク不相成以來御用タリテ定法之賃錢可受取事
- 一 牧方邊ニテ荷積致シ候船登リハ淀下リハ大阪ニテ改之船稅取立候事
- 一 尼ヶ崎川船ハ淀伏見間着船之處ニテ相改稅納爲致候事
- 一 竹筏并直浮不殘淀ニテ稅錢可取立事
但切符相渡可申事

法 則

- 一 積荷致シ候諸船切符不申請シテ上下イタシ候節ハ糺問之上次第ニヨリ以來船乘差留候歟或ハ過料三十貫可申付候事
- 一 人乘荷船トモ船脚定則押印右押印形水入ニ相成法則相破候得者船乘差留候歟或ハ過料三十貫可申付事
- 一 諸船人荷物共小間積筥上并船頭働キ場江積乗セ候儀堅ク禁止萬一違背致候者ハ過料可申付候事
- 一 諸通船上リ下リ共夜帆禁止ノ事
- 一 小橋下伏見ヨリ罷下リ候節艦下ケ可致事
- 一 淀川筋出水之節淀小橋下丈尺杭九尺相成候得ハ高荷積船上下通船後下シ禁止之事

一 登リ船泥小橋一町餘川上ナラテハ帆上ケ不相成事
 一 上下之夜船着岸候共天明ヲ待テ船中篤ト穿鑿荷揚可致事
 一 船中ニ不審成者有之ニ於テハ加子共相改何方ニテモ船ヲ着ケ所之者江引合留置最寄之船改所江
 可申出候事
 一 加子盜ニ致スニ於テハ同船ノ加子共穿鑿イタシ捕置ヘク若於取逃ハ船主共者ヲ可尋出事
 右之條々堅ク可相守者也
 諸船雇賃錢定

從伏見下リ
 從淀下リ
 一 人乘雇切
 一 船稅

一 船二付 錢十七貫文
 錢四百五十文
 但シ登稅一割減

乘合船一人前賃錢四百文
 但シ一艘ニ付四十人乘
 宵迴シ錢二貫文 前夜ヨリ爲待候節ハ定賃錢
外ニ申受候事
 一 荷物積一艘同斷
 天道船

一 四十石船雇切 錢十九貫文
 一 船稅 錢六百二文
 右以上百六十石マテ船賃十石ニ付錢二貫文増稅錢別記アリ
 一 伏見下リ荷物無數ニ付船賃稅錢共駄數ヲ以左之通相定候

一 登駄積 賃錢 一貫文
 一 登駄稅 錢 十六文
 一 有田屋船乘合 一入ニ付 錢四百文
 壹艘ニ付稅四百五十文
 但道當テ出船ハ稅三百三十二文
 一 横大路下リ尼手操船
 壹艘ニ付稅三百三十二文
 一手引船
 同 稅二百八文
 右 登リ船稅ノ壹割減 (△印ハ朱書)
 △定 朱書ノ分ハ登リ稅

一百六十石	△二貫六百六十四文
一百五十石	△二貫四百二十二文
一百四十石	△二貫二百五十五文
一百三十石	△二貫三百三十二文
一百二十石	△二貫九百六十四文
一百一十石	△二貫八百文
一百石	△一貫六百四十八文
一百石	△一貫五百六十四文

一九十石	一貫五百文
一八十石	一貫三百五十文
一七十石	一貫二百三十二文
一六十石	一貫四百六十四文
一五十石	九百文
一四十石	八百三十二文
一三十石	七百四十九文
一二十石	六百六十四文
一十石	六百二十八文
	五百四十二文
	四百三十二文
	三百三十二文
	二百四十八文
	百六十四文

〔第七千七百九十九〕 十一月二十四日 (太政官)

一諸御禮是迄以兒言上ノ處自今宮内省當番言上ノ事

一從政府言上ノ儀ハ自今侍從ヲ以テ言上ノ事

〔第七千八百一十〕 十一月二十四日

一藩縣ノ情狀ヲ審案シ民政ノ得失ヲ督察シ且時宜ニヨリ官吏ノ非違ヲ糾シ具狀可及奏聞事

一非常警戒ノ事アラハ管内藩兵ヲ以テ臨機ノ處置シ迅速兵部省ヘ可報知事

〔第七千八百一十一〕 十一月二十四日 (沙)

日高國之内

沙流郡 會所元ヨリ東新冠郡境アツヘツ河中也

按察使
彦根藩

四年太政官第四百二十九ヲ以テ支配ヲ免ス

右支配被 仰付候條擇捉郡開拓之儀モ猶盡力可致事

仙臺藩

日高國之内

沙流郡 會所元ヨリ西勇拂郡境フイハフ迄

右支配被 仰付候條擇捉郡開拓之儀モ猶盡力可致事

〔第七千八百一十三〕 十一月二十四日 (京都兵部省)

各通
武庫司
陣營方

今般陣營方被廢止向後武庫司へ合一申付候條此段相達候事

〔第七千八百一十四〕 十一月二十五日 (兵部省)

今般兵部丞以東京府出仕被 仰付候ニ付而者以來市中取締別而嚴重可申渡儀可有之候間此段爲心得申達置候條持場之長官江早々傳達可有之候事

〔第七千八百一十五〕 十一月二十七日 (太政官)

今般白石縣廳角田表へ相移シ改テ角田縣ト被稱候此旨爲心得相達候事

〔第七千八百一十六〕 十一月 (民部省)

川々普請入費ノ儀舊幕ノ節國役金取立相成候處御一新以來去辰年ノ儀ハ非常ノ水災疲弊ノ折柄ニ付御取立無之候得共常歲ハ國役ニ割合至當ノ筋ニ有之然ル處近年水害甚敷物價騰貴高掛以前ノ通ニテハ不相當ニ付當巳年ノ儀ハ高百石ニ付金一兩二分宛取立其縣最寄萬石以下社寺領ノ分モ取集早々可相納尤委細ノ儀ハ土木司へ打合可有之事

〔第七千八百一十七〕 十一月二十八日 (民部省)

川々國役金取立納方ノ儀別紙案文ノ通美濃紙帳面ニ認メ來正月晦日限土木司へ上納可有之事

(別紙)

覺

何縣管轄所

何國何郡

何ヶ村

但高百石ニ付金一兩二分

一高何程
此高役金何程
但管轄高並改出新田共

何國何郡

何ヶ村

一高何程
此高役金何程

何ノ誰知行

何國何郡

何ヶ村

高

同斷

同斷

何ヶ村

何國何郡

何ヶ村

高
何社領
何寺領

一高何程
此高役金何程

合高何程

此高役金何程

但三井包

右ハ川々堤防御普請高役金當巳年分書面之通取立相納候以上

年號 月 日

土木司

知縣事印

四年太政官第五百

三十四及五年太政

官第四百九十九號ニ

依リ消滅

四年太政官第五百

六十六ヲ以テ江刺

縣廢止

同上

三年第百六十四

ヲ以テ京都府可廢

止

五年太政官第三百

三十九號第三百七

十三號ニ依リ消滅

第千八十八 十一月二十九日(沙)(太政官)

府縣ニ於テ判任以下職員申付候届差出候節姓名等巨細相添可差出事

第千八十九 十一月二十九日(沙) 三戸縣

今般其縣被廢江刺縣へ合併被 仰付候事

第千九十 十一月二十九日(沙) 江刺縣

三戸縣被廢自今其縣管轄被 仰付候事

第千九十一 十一月二十九日(沙) 民部省

今般三戸縣被廢江刺縣へ合併被 仰付候間爲心得相達候事

第千九十二 十一月二十九日(京都兵部省) 伏水練兵場

其地會計局尙後會計司出張所ト可稱候事 議事局

今般武庫司被取建候就而者其地兵器局尙後武庫司出張所ト可稱候事

第千九十三 十一月晦日(沙)(太政官)

服制ノ儀追々御取調被 仰付既ニ先般御下問ニモ相成候へ共猶追テ何分

朝賀ヲ始總テ是迄ノ通ニ候間爲心得此段相達候事 御沙汰有之候迄ハ來春

第千九十四 十一月晦日(沙)

宮内省

明治二十八年十一月 第千八十八 第千八十九 第千九十 第千九十一 第千九十二 第千九十三

第千九十四

御衣類從前山科家高倉家調進之處被止以來於其省取扱被 仰付候事

第一千九十五 十一月晦日

山科正二位
高倉久丸

御衣類從前調進之處自今於宮内省取扱被 仰付候ニ付被止候事

第一千九十六 十一月 (太政官)

諸官省及府藩縣ノ官員當官へ出頭ノ節判任官タリト自今扣所迄提刀ノ事

第一千九十七 十一月 (民部省)

諸街道區々ノ丁敷ニテ人馬ノ勞不同一候ニ付今度改正可相成候間朱印地ヲ始メ其他程外ノ地悉ク
丁敷へ相加へ且五十丁等ヲ以一里ト定來候分共總テ三十六丁一里ニ積リ來ル十二月中旬限り取調
可差出候事

第一千九十八 十一月 (民部省)

御發行ノ金札大札多分ニテ通用方ニ衆民難滋ノ趣ニ付爲融通通商司爲替會社ニ於テ金券製造近々
發行候間無礙念可令通用尤モ金札入用ノ者ハ爲換會社ニテ引換遣シ候事

府 藩 縣

第一千九十九 十一月 (民部省)

諸國生産ノ人參生絲其外外國貿易品之儀是迄商人共勝手ニ賣買候處相場一定不相成不都合ノ次第
モ有之候ニ付以來開港場所通商司へ相届ケ商社打合セ賣買可致且又商社ノ者共國々生産買入トシ
テ出張ノ儀モ可有之候條差支無之様兼テ管轄中へ不洩様可相達候事

第一千 十一月 (民部省)

酒 田 縣

兩羽鑛山取締方其縣へ御委任相成候間同所出張罷在候鑛山司役々ヨリ万端打合ノ儀モ可有之候間
可然取計候様可致候此段相達候也

第三百六十四

第一千百一 十一月 (大學東校定)

醫學校規則

一 醫ハ司命ノ職ニシテ其任最モ至重ナリ實ニ學業精熟ナラサレハ健康ヲ保全スルノ儀疾病ヲ治癒
スルノ理ヲ知ルコト能ハス然ルニ 皇國古來未タ醫道ヲ教ルノ定則ナシ歷世醫學校ノ設アルモ定
則ナキヲ以テ學業大成スルコト難シ今般大政御維新ノ折柄醫ハ司命ニ關スル重大ノ職ニメ御政體
中欠ク可ラサル一科ナルヲ被 思召新ニ醫學校ヲ御創立被爲在候儀實ニ 皇國醫道始テ興ル秋
千古ノ一事深ク御主意ヲ體認シ奉リ學業精熟ヲ極メ大成ヲ遂ケ終ニ萬國ニ超越候様各奮勵可有
之事

一 廉恥ヲ尊ヒ禮節ヲ重スルハ士ノ恒タル勿論ニ候得共醫士ハ人命ヲ護リ仁術ヲ執ルノ官ナレハ殊
ニ恭謙ノ風ヲ重シシ苟モ龜濫ノ所業有之間敷候事

一 入學ハ二七ノ日ヲ限リ候事

一 入學ノ生徒少年ノ輩ハ小學校ニ入り學科順序ヲ逐ヒ了リ候後大學校ニ入り終ニ成業ヲ遂ク可シ
故ニ五年ノ間留學シ狼ニ退校歸省ヲ免サス然レ晩學ノ徒ハ小大學校ノ學科ヲ修テ病院ニ就テ治
則實驗シ早ク其要旨ヲ得ルコト專務タル可キ事

但留學年限不濟中無據退校歸省相願候者ハ□細取糺候上相免候事
一 等級ノ進退ハ毎月會讀ノ優劣ヲ以テ相定メ候事

但後日學級相進候上ハ教師試業ヲ經候上甲乙ヲ相定メ候事

一 毎日休業ノ外定時刻ノ間登校日課ノ通り堅ク相守リ無懈怠可致精勵事

一 入寮ノ生徒ハ寮則テ嚴重相守リ總テ舍長ノ令ニ隨ヒ候事

一精勤進學ノ者年末取調之上褒賞下賜候尙又學業成達ノ者ハ其分ニ應シ御登庸有之候事
 一校中ノ範則ヲ犯シ不行狀ノ輩ハ嚴重相當ノ罰ニ處シ尙不改數度ニ及ヒ候者ハ其藩共支配へ申達
 シ放校申付候事
 但令放校候上ハ終身營業差留候事
 一學制規則之儀ニ付存寄有之候者ハ無忌憚可及建言候事
 右之條令嚴重可相心得者也

第一千二百二 十一月 (東京傳信局) 橫濱傳信局

傳信機之布告

一傳信機ハ幾百里相隔ル場所ニテモ人馬ノ勞ヲ省キ線ノ連ナル場所迄ハ音信ヲ一瞬間ニ通達スル
 至妙ノ機關ナリ依テ通信相願候モノ左ノ規則ヲ心得ヘシ
 一東京ト橫濱トノ間ニ掛渡セル傳信機ハ橫濱裁判所東角ノ傳信局ニ至リ東京ハ鐵砲洲運上所門右
 側ノ傳信局ニ至リ用向有之モノハ申通シ度其要用ヲ成ヘク簡略ニカナニテ相認メ右局へ持參可
 申候事
 一代銀ノ定メハカナ一字ニ付價銀壹分ノ割合ヲ以可拂事
 但先ノ宿所宛名仕出元共何町又ハ家主誰店ト委敷認メ可申尤表書ノ宿所名前等ハ別段代金差
 出ニ不及事
 一右兩所ヨリ相離ル、場所へハ早飛脚ヲ以相達ル價銀ノ定メ左ノ通り
 遠近ニ不拘
 急届
 銀六分
 ○橫濱關内

野毛	戶部
石崎	石川口
同關外	同
吉田新田	同壹匁五分
橫濱元町	

同	芝生村 程ヶ谷迄	同壹里半積リ
神奈川宿		同貳匁五分
但半時限リ		

同		同五里半積リ
藤澤宿邊		同三拾匁
同		同七里半積リ
相州橫須賀		同四拾五匁
但四時限リ		

右ノ外ハ前書ノ割合ヲ以テ里數ニ應シ價銀拂フヘシ

○東京 急届
 居留地關内 同五分

同
 關外
 木挽町 汐留 新橋
 數寄屋河岸 銀座町 同

京橋	中橋	東京府	銀三匁
久保町	三十間堀邊		
同			
大傳馬町	人形町	江戸橋	
小網町	靈岩島	富澤町	急届
村松町	馬喰町	今川橋	同四匁五分
十軒店	北新堀	和田倉	
櫻田	神田鍛冶町	日本橋	
本町	鎌倉河岸	芝金杉	
西ノ久保邊			
兩國	小石川	赤坂	麻布
市兵衛町	深川	永代橋	同
本所一ツ目	外神田	高輪	同五匁三分
芝田町	藏前邊	淺草	
麴町七丁目邊迄			
市ヶ谷	内藤新宿	品川	
千住	今戸	柳島	遠本所
巢鴨	白金	目黒邊	同
			同八匁

音羽邊 根津 谷中

右ノ外ハ一里銀七匁二分ノ割合ヲ以テ拂フヘシ
 一 一方ヨリ通信有之候節使ヲ以夫々へ相達シ候ハ、其名宛ノ者又ハ名代ノ者ヨリ其使へ刻付ノ請
 取書差出可申候尤返答差出度節ハ其使へ認メ渡候儀不相成別段返書認メ持參可申出事
 一 諸相場共外秘密ノ儀申遣度節ハ兼テ諸店共申合ノ隠シ言葉等ヲ以申遣シテヨロシ役所ニテハ申
 出ノ儘相認メ封ノ上相達スル事ニ候若アラハニ申出候テモ掛リ役人モ其往復ノ事一切他言不致
 掟ニ付洩ル事ナシ
 一 來ル十二月廿五日ヨリ相始モノ也
 但朝第八時ヨリ夕第八時マテ開場

三年第百四十五

第千二百一 十二月朔日(民部省)

去ル廿六日曉第二字頃横濱居留地甘番商館へ賊奴兩人刀ヲ帶シ押入留守番英人ボーイヲ切害シボ
 ーイ小遣ヒ千代吉ヲ縛リ置同人所持之品々奪取逃去候右之者共何レニ潜伏モ難計ニ付府藩縣ニ於
 テ管轄中嚴敷探索ヲ遂ケ見當リ次第召捕可申候事
 但賊奴面體衣類等ハ闇夜ニテ不相分言舌ハ關東言葉ト申候事

奪取候品々

- 一 藍茶三筋立縞袴
- 一 淺黃木綿單色ノ裏付股引
- 一 白足袋
- 一 黒羅紗筒胞
- 一 紺足袋
- 一 腹掛隠シニ入置候一分銀ニテ三兩

右之通候事

第千二百一 十二月二日(布)(太政官)

五年大政官第二十九號ニ依リ卒ノ稱
消滅
八年第百三十八號
九年第百八號布告
ヲ以テ祿制改定

三年第百六十七
號

三年第百七十五
號
以テ改メ

一先般各藩大義名分之紊壞ヲ正シ海外諸國之形勢ヲ察シ以テ其封土ヲ奉還ス依テ大ニ公論衆議ヲ被爲盡府藩縣一途之政令ニ歸シ天下ト共ニ綱紀ヲ更張被遊度 御主意ニ付更ニ知藩事ニ被任隨テ家祿之制被爲定藩々ニ於而モ維新之御政體ニ基キ追々改正可致就而ハ中下大夫士以下之稱被廢都テ士族及卒ト稱シ祿制被相定候爾後各其地方官ニ於テ可爲實屬官被 仰出候條篤ト 御主意ヲ奉體シ銘々分ヲ守リ其職ヲ可盡候事
但知行所一同上地被 仰付總テ稟米ヲ以テ賜候事
一大夫士以下之面々今般家祿御定相成候ニ付而者其家來共三代以上相思之者ハ相應之御扶助可被下候間姓名并ニ從前之祿扶持米等取調早々可申出事
但舊主ニ於テ扶持致シ候儀ハ可爲勝手事

規則

- 一祿制二十一等ニ分チ士族ハ十八等ニ止候事
但士族ノ元高十三石ニ滿タス卒ノ元高八石ニ滿サル者ハ是迄通ノ事
 - 一元祿ハ現今被宛行候高ヲ以テ定候事
 - 一舊來同心之輩ハ卒ト可稱事
 - 一祿制ハ總テ現石高ヲ可稱事
 - 一祿制當年ハ是迄之通來春ヨリ可減事
 - 一祿ハ都而稟米ニテ賜候間其觸頭ニテ取札大藏省へ可申出事
- 祿制
- 一元祿万石未滿九千石迄 現米 二百五十石
 - 一同 九千石未滿八千石迄 二百廿五石

- 一同 八千石未滿七千石迄 二百石
- 一同 七千石未滿六千石迄 百七十五石
- 一同 六千石未滿五千石迄 百五十石
- 一同 五千石未滿四千石迄 百二十五石
- 一同 四千石未滿三千石迄 百二十石
- 一同 三千石未滿二千石迄 百五石
- 一同 二千石未滿千五百石迄 九十石
- 一同 千五百石未滿千石迄 七十五石
- 一同 千石未滿八百石迄 六十五石
- 一同 八百石未滿六百石迄 五十五石
- 一同 六百石未滿四百石迄 四十五石
- 一同 四百石未滿三百石迄 三十五石
- 一同 三百石未滿二百石迄 二十八石
- 一同 二百石未滿百五十石迄 二十二石
- 一同 百五十石未滿百石迄 十六石
- 一同 百石未滿八十石迄 十三石
- 一同 八十石未滿六十石迄 十一石
- 一同 六十石未滿四十石迄 九石
- 一同 四十石未滿三十石迄 八石
- 一同 三十石以下是迄之通 八石

但免二ツ五分四捨五入之法ヲ以テ斗ニ切上ケ可申事

以上

第千五百五 十二月二日(沙)(太政官)

京都府 東京府

今般士族之面々別紙之通被 仰付其府管内ニ有之分ハ總テ可爲其屬旨被 仰出候間此段相達候事

(別紙ハ第千四百四ニ同シ以)

府 縣

第千五百六 十二月二日(沙)(太政官)

府 縣

今般士族之面々別紙之通被 仰付其府縣管内ニ有之分ハ總テ可爲其屬旨被 仰出候間此段相達候事

第千五百七 十二月二日(沙)

民部省

今般士族之面々別紙之通被 仰付候間大坂府並諸縣其省ヨリ相達可申候事

第千五百八 十二月二日(沙)

大藏省

今般士族之面々別紙之通被 仰付候條爲心得相達候事

第千五百九 十二月二日(太政官)

戰功ノ大夫士へ

今般士族祿制相定候ニ付テハ其家來トモ別紙ノ通被 仰出候處其方共家來昨年諸道出張ノ者ハ三代以下タリ用御沙汰ノ趣モ有之候間名前取調可申出候事

第千六百十 十二月二日(布)(太政官)

鳥取藩

諸官員並宮華族之家士及諸藩士等東京在留之向東京府下へ相關リ候公事出入有之節以來東京府ヨリ其主長へ一應掛合之上本人直ニ呼出シ取捌候間此旨兼テ相心得可申事

但諸官員之儀ハ奏任以上ハ家來判任以下ハ本人呼出候事

第千六百十一 十二月二日(沙)

鳥取藩

後志國島牧郡之内 會所元ヨリ南之方シツキ境迄

四年八月支劑ヲ免

三年第百三十卷

但會所相屬

右其藩支配被 仰付候事

第千六百十二 十二月二日(民部省)

府 縣

當七月中府縣常備金規則御布告有之候處誤解イタシ候向モ有之哉ニ相聞候間尙又左ニ相達候

常備金ノ内第一

一金六百兩ノ廉

是ハ年々貢稅ノ内ヲ以縣舍ニ備置筆墨紙蠟燭炭薪諸官員巡察諸向へ御用狀飛脚賃縣掌以下ノ

月給等ニ遣拂過金有之候トモ不足ノ節ノ補ニ備置都テ流用取計ノ上高當リヨリ過上不相成様

取賄年々過不足勘定ハ其縣限リニ仕上ケ致シ置別段當省へ申出ニ不及候事

右同斷ノ内第二

一金二千兩ノ廉

是ハ右同斷支配地ノ堤防橋梁道路等難捨置急破普請所ノ營繕ニ引充遣拂候ハ、其度々目論見

帳ヲ以可相届其他都テ其事ノ緩急ニ從テ遣拂其年十月ヨリ翌年九月ヲ限仕譯書差出殘金有之

候ハ、新帳ノ御勘定元ニ組不足相立候ハ、其節可相伺此餘縣舍破損修葺疊替等ノ入費ハ管轄

ノ石高ニ分課可致候事

右ノ外御布告ノ通可相心得候事

第千六百十三 十二月二日(京都兵部省)

伏水練兵場

議事局

一自今補助長官之號ヲ廢シ補助官ト可稱事

一中隊司令同試補之官差免補助官申付候節者月給拾五兩下賜候事

四年太政官第六百二十三ニ依リ消滅

第千八百八十七卷

- 一小隊司令同試補官差免右同斷之節月給拾兩下賜候事
- 一總辦導右同斷之節月給七兩下賜候事
- 一分隊長官右同斷之節月給四兩下賜候事
- 一嚮導右同斷之節月給三兩貳步下賜候事
- 右之通自今相改候間此段相達候事

第千五百十四 十二月二日 (兵部省)

鹿兒島藩 徵兵
山口 藩 徵兵
高知 藩 徵兵

來正月三日招魂社大祭ニ付於社前祭砲獻納可爲勝手此段相達候事
但十字勅使參向候ニ付第九字出張發砲之義者可及差圖候事

第千五百十五 十二月三日 (沙)

佛光寺

後志國島牧郡之内 運上屋元ヨリ東ノ方エカエチシ迄
右地所支配被 仰付將又石狩國札幌空知兩郡之内へモ便宜之土地開拓相成候様盡力可致事

第千五百十六 十二月三日 (兵部省)

府 藩 縣

御國內酒造並濁酒造醬油造共株鑑札渡方並冥加上納等東京西京區々ノ規則ニ有之而已ナラス藩々ニ依リ候テハ無鑑札ニテ自造イタシ候向モ有之哉ニ相聞御體裁ニモ拘リ候儀ニ付今般御國內一途ノ法則左ノ通御確定相成候ニ付自今無鑑札ニテ製造一切停止被 仰付候間府藩縣ニ於テ其管轄所造高並造人名前共早々取調通商司へ來午六月限り可申立尙又冥加上納ノ義ハ例年十一月限り同司へ相納可申事
但別紙國割ノ通可相心得事

第千五百五十一 參
四年太政官第三百
八十九ニ依リ消滅

- 一酒造株鑑札冥加高百石ニ付金十兩ツ、上納ノ事
- 一同斷年々冥加高百石ニ付金十兩ツ、上納ノ事
- 一濁酒造株鑑札冥加高百石ニ付金十兩ツ、上納ノ事
- 一同斷年々冥加高百石ニ付金七兩ツ、上納ノ事
- 一醬油造株鑑札冥加高百石ニ付金五兩ツ、上納ノ事
- 一同斷年々冥加高百石ニ付金三兩ツ、上納ノ事
- 右之趣小前末々迄無遺漏可觸示候事

- 畿 内
- 山城 大和 河内 和泉 攝津
 - 南海道 紀伊 淡路 阿波 讃岐 伊豫 土佐
 - 山陰道 丹波 丹後 但馬 因幡 伯耆 出雲 石見 隱岐
 - 山陽道 播磨 美作 備前 備中 備後 安藝 周防 長門
 - 西海道 筑前 筑後 豐前 豐後 肥前 肥後 日向 大隅 薩摩 壹岐 對馬
 - 右二十八ヶ國ハ大阪出張通商司へ可申立事
 - 東海道 伊賀 伊勢 志摩 尾張 三河 遠江 駿河 甲斐 伊豆 相模 武藏 安房 上總 下總 常陸

八年第二十五號布告ヲ以テ國役金廢止

東山道
 近江 美濃 飛騨 信濃 上野 下野 磐城 岩代 陸前 陸中 陸奥 羽前 羽後
 北陸道
 若狹 越前 加賀 能登 越中 越後 佐渡
 右三十五ヶ國ハ東京通商司へ可申立事
 第千七百十七 十二月三日 (民部省)

川々普請入費之儀舊幕之節國役金取立相成候處 御一新以來去辰年之儀ハ非常之水災疲弊之折柄ニ付御取立無之候得共常歲ハ國役ニ割合至當之筋ニ有之然ル處近年水害甚敷物價騰貴高掛リ以前之通ニテハ不相當ニ付金壹兩貳分宛取立可相納尤委細之儀ハ土木司エ打合可有之事
 已十一月

武藏 下總 安房 上總 常陸 上野 伊豆 相摸 下野 甲州ノ内郡内領 伊勢 三河
 右國々國役金取立相成候事

一高何程

何藩管轄所 何ヶ村

此高役金何程 但 高百石ニ付 金壹兩貳分宛

何國何郡

何ヶ村

何社領 何寺領

何國何郡

一高何程

何ヶ村

此高役金何程 但右同斷

合高何程

此高役金何程

但三井包

右者川々堤防御普請高役金當巳年分書面之通取立之相納候以上

年 號 月

土 木 司

何 藩

何 之 誰 印

川々國役金取立納方之儀別紙案文之通美濃紙帳面ニ認來正月晦日限土木司エ上納可有之候事

四年太政官第二百七十八參看

第千七百十八 十二月五日(布)
 先般御布告有之候通道テ新貨御鑄造御國內金銀貨幣御改正昨年御施行之楮幣ハ追々御引替可相成儀ニ付諸藩ニ於テ舊幕府ヨリ許可ヲ受從前製造之楮幣以來其數ヲ增益致シ候儀嚴禁被 仰出候間是迄製造總高調來午ノ二月中迄ニ大藏省へ可届出候且御一新後府藩縣ニ於テ楮幣製造之向ハ以來通用停止被 仰出候間此段相達候事

但製造無之府藩縣ハ其趣早々同省へ可届出事

三年第四百十五ニ依リ消滅

第千七百十九 十二月五日(沙)(右大臣)

越後按察使

民政ハ治國之大本至重之事トス御一新以來專ラ億兆其所ヲ得テ生業勉勵候様トノ 御趣意之處越後全國之儀ハ去年兵馬之禍ト成リ加之地方官屢變換諸藩之情狀未タ區々モ有之哉ニ相聞へ彼是下民安堵ニ至ラス實ニ北方之動靜ニ相係リ候儀ニ付今般當分按察使兼勤被 仰付候ニ付テハ藩縣之政績ヲ熟察シ地方官ト戮力協心 御趣意ヲ奉體シ專ラ布政施治ノ道ヲ盡シ上下之情ヲ貫通セシム可ク候事

三年第五百七十七參看

第千七百二十一 十二月五日(留守官)

節朔參賀之儀勅任官以上辰刻無遲々可罷出旨兼テ達置候處遲刻或ハ不參届無之向モ有之趣ニ付爾來右時刻ニ屹度參 朝可致若所勞等ニテ不參之面々ハ同刻迄ニ宮内省並出張彈正臺へ可相届候事

明治二己巳年十二月 第千七百十八 第千七百十九 第千七百二十

但節朔之外參賀之節不參之面々モ同所へ可相屆事

〔第千二百二十一〕 十二月七日(沙)

水原縣

其縣管轄之兵隊三十五歲以下之者兵部省へ引渡可申三十五歲以上之者ハ相應之手當差遣シ歸籍可申付事

〔第千二百二十二〕 十二月七日(沙)

兵部省

今般水原縣兵隊引渡候ニ付於其省管轄可致事

〔第千二百二十三〕 十二月七日(留守官)

來二十三日辰刻 大宮御所泉山 御參拜被 仰出候事

右之通爲心得相達候事

〔第千二百二十四〕 十二月八日(布)

先般奥羽兩國之内分國被 仰出候處此度更ニ割地圖面之通御改正ニ相成候間此旨相達候事

磐城國

- 一高六万四千七百七十石二斗五升八合 白河郡
- 一高四万八千九百九十八石一斗四升九合 石川郡
- 一高十万六千七百五十二石八斗五升一合八勺五才 田村郡
- 一高四万石四斗七升九合五勺一才 菊多郡
- 一高四万三千六百七十七石九斗五升五合 白川郡
- 一高五万四千八百六十六石一斗二升九合三勺 磐前郡
- 一高三万二千四十一石六斗六升八合 磐城郡
- 一高三万千七百七十七石七斗二升四合 檜葉郡

八年第七十號
三年第二十二號
告參

六年太政官第百九
十四號ヲ以テ石
ノ稱及第八年第九
七號及第九年第十
八號布告第九十
七號及第十號布
告第十三年第二十
二號布告參

- 一高二万二千七百二十五石七斗九升 標葉郡
- 一高五万四千四十一石六斗二升一合 行方郡
- 一高二万四千八百七十八石一斗九升 宇多郡
- 一高二万三千五百三十九石二斗三升 刈田郡
- 一高三万九千四百四十二石九斗四升 伊具郡
- 一高二万三千五百八十一石八斗一升 亘理郡

岩代國

- 高合六十万六千九百四十七石九升五合六勺六才 會津郡
- 一高八万七千二百九十四石六斗六升六合九才 大沼郡
- 一高五万二千六百九十一石一斗七升六合 耶麻郡
- 一高十二万二千八百四十八石二升 河沼郡
- 一高七万四千三百八十四石二斗六升五合 岩瀨郡
- 一高六万九千五百九十九石六斗二升八合九勺 安達郡
- 一高九万七千九百九十五石九斗一升三合三才 安積郡
- 一高五万四千七百四十四石四斗七合二勺九才 信夫郡
- 一高八万九千三百六十八石五斗九升二合九才 伊達郡
- 一高十一万四千四百五十七石二斗五升一合六勺 右九郡
- 高合七十五万五千七百三十九石九斗六升



四年太政官第五百
六十ヲ以テ改ム

制度變革ニ依リ消滅

四年太政官第三百
三十七ヲ以テ刑部
省ヲ廢シ囚獄司ヲ
司法省ニ屬セシム

四年太政官第六百
二十三ニ依リ消滅

第一千二百五十一 十二月八日(布)(太政官)
今般府ノ職員中

典 事 相當從六位

權典事 相當正七位

右之通被置候間爲心得相達候事

第一千二百二十六 十二月八日(布)(太政官)

判任以下諸官員遠國御用出立歸着共其時々其官省ヨリ大藏省へ書面ヲ以可相居事

第一千二百二十七 十二月八日(沙)

其府管轄之囚獄總テ刑部省へ引渡可申事

第一千二百二十八 十二月八日(沙)

從來東京府ニ管轄之囚獄總テ其省へ請取管轄可致事

第一千二百二十九 十二月八日(沙)

今般別紙圖面之通分國御改ニ相成候鳩胸山ヨリ峠田嶽迄之間山々峰々通ヲ以刈田伊達兩郡分界ト

被相定候條爲心得相達候事

第一千二百三十 十二月八日(民部省)

府 縣

鰥寡孤獨ノ窮民御救助筋ノ儀ハ兼テ御布告ノ趣モ有之候處水火ノ兩災ヲ受候者共ハ急夫食等時日ヲ移シ人命ニモ拘リ候様ノ儀有之候テハ不容易儀ニ付得ト遠吟味其急ヲ救ヒ候ハ尤至當ノ所置ニ候處各地方ニテ區々ノ取計モ有之候テハ不都合ニ付譬ハ洪水ニテ堤切入人家押流シ又ハ數日家居床上迄水湛或ハ火災ノ節夫食諸道具可持退猶豫無之皆燒失イタシ凍餒目下ニ迫リ難捨置分等凡日數十五日ヲ限一日男ハ米三合女ハ二合ノ當リヲ以速ニ施行イタシ其段相届可申其上ニモ取續難相

成諸拜借等相願候分ハ事宜得ト遂吟味兼テ御布令ノ通心得取調相伺候儀ト心得區々不相成様可取計候事

第千三百三十一 十二月八日 (民政部)

關八州伊豆國府縣
奥羽七州

舊幕中張紙直段ハ三兩増十五兩増等ノ儀ハ以後令廢止當巳年ノ儀ハ各縣見込ノ趣參考ノ上上米三十五石ニ付金百七十五兩二分替ヲ以石代金取立上納可有之候事

第千三百三十二 十二月八日 (大藏省)

諸向御入用渡方ノ儀爲替切手引替方及遲延候テハ勘定合差跨精算取調向不都合ニ候間以來臨時至急御用ノ外ハ諸渡方毎月二十五日ヲ可爲限尤十五日以前ハ爲替切手相渡候分十五日限右以後相渡候分ハ二十五日ヲ限リ右切手引替可申右ハ是迄引替方及遲延候向モ有之取調差支候間其筋取扱候者ハ嚴敷違置可申且年々正月十日迄ハ至急御用ノ外諸渡方不致候間其段モ兼テ心得置候様此段相達候也

但是迄爲替切手請取引替後レノ分ハ早々引替候様可致此後日限通リ引替不致分ハ渡方差支候間其段モ兼テ取扱ノ者へ可申渡候事

第千三百三十三 十二月八日 (兵部省)

會計局

兵隊之者病死之節者爲御手當金拾兩下賜候間爲心得相達候事

但士官兵士無差別被下候事

第千三百三十四 十二月八日 (兵部省)

伏水練兵場

議事局

兵隊之者病死之節者爲御手當金拾兩下賜候間同隊ニ於而諸事懇切ニ取扱石碑等取建可造様可被相

達候事

但士官兵士無差別被下候事

第千三百三十五 十二月八日 (留守官)

先般傳馬所廢止ニ付テハ毎月十五日諸家ヨリ東京へ差送之長持當分積置場無之ニ付家々ニテ荷拵致シ置十四日九時迄ニ當府へ其趣届有之候ハ、右持夫當日拂曉爲繰入可申候駄荷箇物之分ハ當府へ差出可有之候事

十二月

京都府

右之通京都府ヨリ申出候間爲心得此段相達候事

第千三百三十六 十二月八日 (留守官)

來ル十日假開餐已刻候間辰半刻無遅々參校候様御通達可有之候也

明治二十二年十二月

大 學 校

右之通大學校ヨリ申來候間爲心得相達候也

第千三百三十七 十二月八日 (留守官)

來十日ヨリ於大學校代二條家假開餐候ニ付元皇漢兩學所へ是迄入學致來候輩勝手次第出席可致候事

但以後入學相願度輩ハ大學校代へ可願出候事

第千三百三十八 十二月九日 (太政官)

去月廿九日酉ノ半刻 外宮末社遙拜所燒失延燒ニ難計 御動座被爲在戌ノ刻鎮火直ニ 還幸ニ相成候旨言上有之依之明後十一日酉ノ刻於 庭上 御拜被爲在候事

第千三百三十九 十二月九日 (布) (太政官)

三年第十卷第四
百八十六ヲ以テ廢
止

三年二月十九日復
廢司京都支署ヲ
廢ク

五年兵部省第六卷
卷

五年大藏省第七
十號卷

同 上

明後十一日 神宮 御拜ニ付自今晚刻到十二日朝 御神事候事

重輕服者僧尼參 朝可憚事

但政府出仕之輩ハ十日酉ノ刻迄ハ不及憚事

第千四百四十 十二月九日(布)(太政官)

明後十一日酉ノ刻 神宮 御拜被爲在候ニ付大臣以下辨官迄并神祇伯諸省卿集議長官彈正尹等申
半刻出仕之事

但衣冠着用之事所持無之輩ハ狩衣直垂可爲勝手事

第千四百四十一 十二月九日(民部省)

旅費規則中東海道ノ外諸街道繼人足東海道三兩二分ノ見込ヲ以拂方可有之旨相達候得共事實不相
當ニ付外道中筋脇往還等ノ分モ巨細取調出來候迄人足見積當分左ノ通相定候間爲御心得此段及御
達候也

中山道從東京西京迄

人足一人ニ付

一里一人

金三兩一分

永二十四文三分

奥州街道從東京白河迄

同

同

金一兩一朱

永二十二文一分

甲州街道從東京甲府迄

同

同

金三分三朱

永二十七文六分

脇往還

同十里ニ付

同

永二百二十文

永二十三文

第千四百四十二

十二月十日(沙)(太政官)

去月廿九日 外宮末社遙拜所燒失之節 御動座被爲在候ニ付明十一日罷 朝被 仰出候事

第千四百四十三

十二月十日(沙)

佐賀藩

千島國ノ内 振別郡

右其藩へ支配被 仰付候條開拓守衛相兼盡力可致候事

第千四百四十四

十二月十日(沙)

高知藩

千島國ノ内 藥取郡

右其藩へ支配被 仰付候條開拓守衛相兼盡力可致候事

第千四百四十五

十二月十日(沙)

増上寺

根室國花咲郡ノ内 志古丹島

右其寺へ増支配被 仰付候事

第千四百四十六

十二月十日(民部省)

府藩縣

北海道並伊豆國附島々產物入津ノ節ハ送り狀ヲ以商社並其渡世ノ者ヨリ速ニ通商司へ相届可申自
然自儘ニ水揚等イタシ拔荷其他不正ノ取計イタシ候者有之節ハ取糺ノ上事宜ニ寄り其荷物取上ケ
可申候間心得違無之様相守可申事

第千四百四十七

十二月十日(兵部省)

會計司

伏見練兵場出張之職員分二以下之官祿下賜候者ハ一日六合之御賄被下候事

明治二己巳年十二月 第千四百四十二 第千四百四十三 第千四百四十四 第千四百四十五 第千四百四十六
第千四百四十七

四年太政官第百
廿一ニ依リ消滅

三年五月支配ヲ免
ス

三年二月支配ヲ免
ス

三年第六百六十四
ヲ以テ支配地ヲ更
換ス

四年太政官第百
三十一參照六年同
第八號ニ依リ消滅

三年第百五十五ヲ
以テ廢止

五年太政官第六十二號ヲ以テ兵部省

明治三十二年十二月 第千四百四十八 第千四百四十九 第千四百五十 第千四百五十一

五〇八

第千四百四十八 十二月十日 (兵部省)

會計司 札問司
武庫司 副省取締
陸軍御用掛 厩御用掛
元集義隊取締 治療所取締
仕丁 中布令使中
本省門番 副省門番

御印之提灯向後私ニ相用候義令禁止候若此令ニ背キ相用ヒ候ハ、見咎急度可及沙汰隊中ハ勿論未
末小者ニ至迄無洩其長ヨリ可申通此段相達候事

追而會計司ハ用達等ヘモ無洩可申達候事

第千四百四十九 十二月十日 (兵部省)

各通 會計司
議事局

隊中之者病死之節ハ爲御手當各三ヶ月分之月給下賜候間同隊ニ於而諸事懇切ニ取扱石碑等取建可
遣候事

但兵士之義ハ兼而俸給手薄之者ニ付格別之譚ヲ以金拾兩下賜候事

第千四百五十 十二月十一日 (兵部省)

觸頭

是迄兵部省附被 仰付置候處今般東京府ヘ引渡候條以後同府之可爲貫屬候事

但觸下之者共ヘハ共方共ヨリ可相達候事

(御目錄金三千正宛被下之觸頭八人江)

第千四百五十一 十二月十二日 (兵部省)

關八州並伊豆國酒造濁酒造醬油造取締向ノ儀ニ付相達置候箇條ノ内私領ノ分ハ最寄知縣事ニテ進

四年太政官第三百八十九ニ依リ消滅

八年第三號布告ヲ以テ五月三十一日限官省札通用ヲ止

退ノ苦ニ付取締差圖可受旨相達置候處今般各藩被任知事候ニ付テハ以來藩縣其管轄所限リ取締向
嚴重行届候様可致候尤其他右三造ノ儀ニ付相達置候箇條ノ儀ハ從前ノ通可相心得事

第千四百五十二 十二月十一日 (大藏省)

官旅費等は迄可成丈小札相渡來候處大札融通ノ道モ相付候趣ニ付以後ノ儀ハ御有合大札重モニ
相渡其外諸官省定額御入用等モ同様取計候間自然差支ノ儀モ有之候ハ、大札受取高ノ内爲替方ヘ
申入新小札ト引替候様可致致尤引替大札ヘハ札面左ノ角ヘ引替何ノ誰ト記シ調印ノ上爲替方ヘ相
渡候様御取計可有之此段相達候也

第千四百五十三 十二月十三日 (太政官)

官省府藩縣其他諸局ニテ諸達伺届其餘往復等諸般官用ニ供シ候紙本或ハ全紙ヲ用ヒ或ハ半截ヲ用
ヒ各局ニテ取集置候節大小長短各種齊整セス依テハ緊要後證ニ充ヘキ事件モ紛亂ニ至候儀モ有之
畢竟官用紙定式無之ニヨリ右様不都合ヲ生シ候ニ付此度官用界紙定式左之通可相心得事

一紙本ハ美濃紙大半紙其外右兩種之尺度ニ合シ候紙ヲ可用事

一界紙ハ別紙離形之通ニテ官省府藩縣及諸局ノ號ヲ署シ印刷スヘキ事

右之通ニ候間來午年二月ヨリ定式界紙相用可申事(別紙八行界紙離形略ス)

第千四百五十四 十二月十三日 (太政官)

來十九日 内侍所御神樂ニ付十七日晚ヨリ廿日朝ニ至リ御神事候事

但重輕服者僧尼參 内可憚候尤火ノ元別テ嚴重可致事

第千四百五十五 十二月十二日 (民部省)

當已租稅辻總米金關東ハ去月晦日迄遠國ハ迅速可差出旨先般相達置候處舊旗下上知等諸帳面不

明治三十二年十二月 第千四百五十二 第千四百五十三 第千四百五十四 第千四百五十五

五〇九

分明ノ廉有之差出方及遲々候旨申立候向モ有之差支候間別紙案文ノ通米永凡積取調半紙豎帳ニ相認メ至急可差出候事

(別紙)

當已租稅凡積書付

高何程

此取 米何程 永何程

右ハ當已租稅凡積書面之通候也

第千五百五十六 十二月十四日(沙)

刑部省

刑律之儀ハ其省御委任勿論之事ニ候得共新律御確定迄兵卒罪狀之儀ハ於兵部省取計候様相達候尤餘人連累等有之兵隊限ニ無之罪狀ハ其節之次第ニ寄リ於其省可取計候事

第千五百五十七 十二月十四日(沙)

京都府

戊辰之歲賊徒掃攘之砌京都在任之力士共諸道出張之段奇特之至ニ付角力場トシテ便地一ヶ所永世下賜候間於其府取計可致事

第千五百五十八 十二月十五日(布)(太政官)

來ル十七日於神祇官假 神殿御鎮座並鎮魂祭被爲行候事

右ニ付參向之官員左之通

假 神殿御鎮座 午ノ刻ヨリ

一太政官

右大臣 納言一人 參議一人 辨官一人

第千五百六十四參看
三年第九百四十四
ニ依リ消滅
本月二十六日京都
府ヨリ八坂社地ノ
内八百八十九坪ヲ
下付ス

一諸省

一集議院

一大學

奏任以上一人

但諸官人參拜可爲勝手事

一彈正臺出席ノ事

鎮魂祭 酉ノ刻ヨリ

一太政官

一諸省

一集議院

一大學

奏任官以上一人宛

但諸官人參拜可爲勝手事

右之通相達候事

第千五百五十九 十二月十五日(沙)(太政官)

自今官服之節襪四時共着用可致候事

但襪代足袋相用候儀不苦並ニ平常足袋之儀用不用可爲勝手事

第千五百六十一 十二月十五日(沙)

山口藩

今般其藩常備兵之内千五百人東京常備兵被 仰付候處於兵部省當時兵制御取調中ニ付追テ御達相成候迄其藩ニ可差置事

五年太政官第三百
三十九號ニ依リ消
滅

三年第五百三十二
參看

但シ於其藩是迄之規則費用等巨細以書面早々可申出事

第千六百六十一 十二月十五日(沙)

兵部省
大藏省

別紙之通御達ニ相成候間相達候事(別紙ハ第千六百六十二同シ)

第千六百六十二 十二月十七日(沙)(太政官)

自今大學校ヲ大學ト改稱開成所ヲ大學南校醫學校ヲ大學東校ト可稱事

第千六百六十三 十二月十七日(太政官)

御一新ニ付有功ノ輩總テ御賞典ノ儀ハ出格ノ事ニ付全分御渡方可有之勿論ノ處當年ハ氣候不順米穀不熟殆皆無ニ屬スル處モ有之御歳入別テ寡ク來年會計ノ目途不相立場合ニ立至候ニ付甚以御不本意ノ至ニ候ヘトモ千石以上ノ分ハ當年三分ノ一残り三分ノ二ハ來年年七月十二月ト都合三ヶ度ニ下賜リ千石以下ノ分ハ如定則當年半高被下殘リ半高來年年七月ニ下賜候間得其意大藏省へ可申出候事

但來年年ヨリハ千石以上以下共年々十二月半高翌七月半高御渡可相成候條此段相達候事

第千六百六十四 十二月十七日(沙)

兵部省

刑律御改正ニ付當分之處兵卒罪狀之儀ハ於其省取計可申事

但餘人ニ連累等有之節ハ其次第二ヨリ於刑部省取計候事

(參照) ○三年八月十二日(刑部省同)

去巳十二月被 仰出候別紙御布告面ニ有之兵卒之儀ハ隊長ヨリ軍監軍曹及歩卒ニ至迄一體ナリ候條或ハ歩卒而已ナリ候哉且餘人連累等有之兵隊限ニ無之罪狀ハ於當省可取計儀ハ勿論ニ候得共其節之次第二寄云々ト有之候得ハ強而一決トモ難申候條如何相心得可哉此段御達圖有之度御伺申入候也
(參照) 歩卒限下可相心得其節之次第二寄云々何之趣兼而罪狀ハ一決難致置猶見込モ候ハ、可申出事

第千六百六十五 十二月十七日(兵部省)

松平會計權少佐

今般八王子同心并邸地共金川縣へ被屬候條明十八日彼地へ出張引渡方可取計事

但金川縣ヨリ受取之者致出張候間萬端可引合事

第千六百六十六 十二月十八日(沙)

彈正臺

各國公使重大之事件應接之節爲立會出席可致事

第千六百六十七 十二月十八日(沙)

東京府

今般大學句讀所被止候ニ付テハ其府ニ於テ小學教育之道施行可致候事

但從來之句讀所其儘引移之儀ハ大學商議之上取扱可申事

第千六百六十八 十二月二十日(布)(太政官)

來廿五日於神祇官 孝明天皇御祭典被爲行候ニ付諸官省集議院大學彈正臺皇后宮職諸使東京府等

勅任奏任之内一人宛已ノ刻ヨリ參官可及事

第千六百六十九 十二月二十日(布)(太政官)

來廿五日於神祇官 孝明天皇御祭典被爲行候ニ付諸官員參拜可爲勝手事

但拜參刻限之儀奏任以上ハ辰ノ刻ヨリ午ノ刻迄判任以下ハ午ノ刻ヨリ申ノ刻迄ノ事

第千六百七十 十二月二十日(太政官)

來廿五日御祭典ニ付仕不及事

第千六百七十一 十二月二十日(太政官)

廿七日御用仕舞ニ付廿六日休暇無之事

廿九晦兩日ノ内歳末御祝儀可申上事

但刻限可爲隨意判任以下ハ名刺取集其官長ヨリ可申上事

第千六百七十一 十二月二十日(太政官)

第千六百六十九以下
取消

明治二己巳年十二月 第千六百六十五 第千六百六十六 第千六百六十七 第千六百六十八 第千六百六十九

四年太政官第三百三十六ニ依リ消滅
五年太政官第二百十四號ヲ以テ府縣學校廢止

六年太政官第三十四號ニ依リ消滅
三年第九百四十四號

正月式

元日 四方拜 朝拜相當六位官以上
 二位 七位以下官省ニ於テ長官相受奏聞
 四日 神宮祭事始
 五日 賀茂祭事始
 十日 永川社同上
 十五日 非藏人北面
 廿日 御吉書三穗打
 廿一日 社家
 廿三日 法中
 廿四日 御講釋始
 御會始

右ノ通ニ付相達候事
 第千七百七十二 十二月二十日(沙)

兵部省

今般京都兵部省被廢候事
 但京都兵管轄之者取調可申出候事

第千七百七十三 十二月二十日(沙)

永平寺へ

昨夏 御沙汰之筋有之候處今般御取札之上其寺總持寺共本山如故各其末寺取締違亂無之様可致旨
 更ニ被 仰出候事
 但永平寺ハ道元開基之祖山タルヲ以テ席順總持寺之上タルヘク尤兩寺之末派互ニ轉住向後差止候事

同上

四年太政官第二百
 十三第三百三十二
 二依リ消滅

第千七百七十四 十二月二十日(沙)

總持寺

昨夏 御沙汰之筋有之候處今般御取札之上永平寺其寺共本山如故各其末寺取締違亂無之様可致旨
 更ニ被 仰出候事
 但永平寺ハ道元開基之祖山タルヲ以テ席順總持寺之上タルヘク且其寺從來輪番持之處向後碩學
 智識之者ヲ擧ケ住持ヲシムヘク候尤兩寺之末派互ニ轉住自今差止候事

第千七百七十五 十二月二十日(雜官)

大藏省

招魂社ハ高一万石被宛行居候處即今御費用多端會計御目途相立候マテ右高ノ内五千石返上仕度段
 兵部省申出御聞届被爲在候間此段爲御心得相達候也

第千七百七十六 十二月二十日(民部省)

府 縣

祿制被爲建候ニ付士族采地上地被 仰出候間御料村々同様來年ヨリ租稅上納可取計尤支配地御
 高帳ノ儀ハ追テ可相渡候事

第千七百七十七 十二月二十日

航海家へ示ス布告書

一西曆一千八百七十年第一月二十二日ヲ初トシ布良岬東方北緯三十四度五十三分二十秒東經百三
 十七度三十一分十四秒但佛國都府巴里野島崎ニ於テ一箇ノ燈火ヲ設タリ
 一機械ハ「カタシヨ」トトリツク返照第一番形ニテ地平四分ノ三ヲ照ス海上ニ向タル分ハ不殘返
 分右玻璃無之即地共光輝ハ二十「ミルマラン」我九里四十六町餘三万七照玻璃ニテ陸地ニ向タル
 平四四分ノ一ナリ我十三丈ノ高サニ於テ白色ナル八角ノ塔上ニ建置セリ布良崎暗礁ヲ去
 水面上四十一「メートル」五尺三寸ノ高サニ於テ白色ナル八角ノ塔上ニ建置セリ布良崎暗礁ヲ去
 ルコト針盤測南八十五度西四「ミルマラン」七千四百七「メートル」三十分ナリ假燈火ハ右日附ノ當日ヨリ點燈廢
 止ノ事

九年四月二十日太
 政官達參看
 十二年五月十九日
 招魂社ヲ佛國都府
 社ニ改稱シ別格官幣
 社ニ列ス

日本政府ノ命ニ依テ

横須賀製鐵所首長

チボシエー

第千七百九十七ニ依
リ削減

西曆千八百七十年第一月二十一日

第千七百七十八 十二月二十二日(布)

來ル廿五日 孝明天皇 御陵 御遙拜ノ事

但廿四日酉ノ刻ヨリ廿五日午刻迄重輕服者並僧尼參 朝可憚事

第千七百七十九 十二月二十二日 (太政官)

元日朝拜奏任官以上並非役華族判任中六位拜叙之輩

右之通ニ付更ニ相違候事

第千七百八十 十二月二十二日 (民部省)

府 縣

去辰御取箇帳關東八州ハ來正月二十日迄遠國ハ同月二十九日迄ニ可差出候尤場所ニ寄リ帳面等不
分明ノ廉有之差出兼候ハ、別紙案文ノ通半紙堅帳ニ認メ右日限ニ可差出候事

但本文帳面差出兼候子細有之候ハ、其譯書面ヲ以前書日限迄ニ可申立候

(別紙)

去辰租稅書付

高何程

此取米 米何程

永何程

卯年ト差引増減可認候

外

米何程

永何程 反高見取流作場等ノ分

第千七百八十一 十二月二十二日 (留守官)

來ル廿九日晦日休暇來ル正月四日ヨリ政始之事

第千七百八十二 十二月二十二日 (留守官)

御留守正月式

元日朝參

宮華族相當六位官以上

二日

七位以下官省ニ於テ長官相受奏聞

四日

政始

五日

千秋萬歲

八日

御修法於眞言院代被行

九日

黑御所御所午刻隨心院門跡同新門跡

十日

諸禮非藏人北面

十四日

大元帥法後七日阿闍梨

廿日 社家

廿一日 養源院 法淨院 南禪寺 五山 護淨院 小池坊 智積院 蓮臺寺 本國寺
右ノ通ニ付年賀申上候面々執レモ巳刻參 朝可有之候事

第千八百八十三 十二月二十三日(布)(太政官)
來ル正月三日神祇官へ 行幸 天神地祇八神殿 御歴代 御靈 御親祭被爲在候旨被 仰出候事
但勅任官以上並非役華族辰半刻無遅々同官江可相詰事

第千八百八十四 十二月二十三日(太政官)
今般京都兵部省被廢候此旨相達候事

第千八百八十五 十二月二十二日(留守官)
天機伺ノ備是迄毎月五ノ日罷出候處爾來朔日一度可相伺候此旨相達候事

第千八百八十六 十二月二十四日(民部省) 江刺縣
此度陸中國鹿角郡小坂銀山御手行相成候ニ付鑛山司大島權正其外被差遣同所御手入相成候積就テ
ハ御普請木伐出方其外右役々ヨリ申達候等ニ付諸事差支無之様可被取計候也
第千八百八十七 十二月二十四日(兵部省) 副省取締

一 小隊司令 貳拾兩
一 同試補 拾五兩
一 半隊司令 拾兩

四年太政官第四百三十八ヲ以テ留守官廢止
四年太政官第五百六十六ヲ以テ江刺縣廢止
三年第七百五十三 參看

一 同試補 七兩
一 分隊司令 八兩

一 同試補 五兩
一 嚮導 四兩貳步
一 補裨 四兩

一 小監察 拾兩
一 筆生 五兩
一 俗事掛 四兩貳步

右月給當分假ニ相定候間此段相達候事
第千八百八十八 十二月二十五日(留守官)

元日江東練兵場ニ於テ祝砲大砲小銃打方申付候旨兵部省ヨリ届出候間爲心得相達候事
第千八百八十九 十二月二十五日(留守官)
歲末御祝儀並年賀申上候面々所勞等ニテ不參ノ節ハ可届出事

第千八百九十 十二月二十六日(沙) 岩鼻縣
吉井藩被廢候ニ付支配地其縣管轄被 仰付候事
但從來吉井藩中之人材ヲ撰ミ更ニ其縣官員ニ充テ士族并ニ卒之取締可申付事

第千八百九十一 十二月二十六日(沙) 岩鼻縣
今般吉井藩被廢士族及卒其縣貫屬ニ被 仰付候就テハ懇切取扱常々文武ヲ研窮シ御用ニ相立候様
可致旨 御沙汰候事
第千八百九十二 十二月二十六日(沙) 塚縣

四年太政官第五百五十九ヲ以テ岩鼻縣廢止

四年太政官第六百十四ヲ以テ塚縣改

狄山藩被廢候ニ付支配地其縣管轄被 仰付候事

但從來狄山藩中之人材ヲ撰ミ更ニ其縣官員ニ充テ士族并ニ卒之取締可申付事

第千九百九十三 十二月二十六日(沙)

堺 縣

今般狹山藩被廢士族及卒其縣實屬被 仰付候就テハ懇切取扱常々文武ヲ研窮シ御用ニ相立候様可

致旨 御沙汰候事

第千九百九十四 十二月二十六日(民部省)

諸 縣

當八月 詔書ノ通窮民御救助被遊度被 仰出候ニ付テハ二官六省ヲ始メ諸官員官祿ノ内勅任官以

上五分ノ一奏任官十分ノ一返上御救恤ニ御差加ヘ奉願候儀ニ付縣々ニ於テモ返上相願候向ハ右ノ

分縣下窮民御救恤ニ差加ヘ救民ノ主法相立可申候

第千九百九十五 十二月二十七日(布)(太政官)

昨年兵馬紛擾之際御用途御多端ニ付楮幣御施行一旦之急被爲凌候得共右楮幣之高ハ全ク國債ニ相

成當年ヨリハ國債可相償管之處豈料諸道不實奧羽諸國殆皆無ニ屬シ當節歲入總計ニテ百万石餘之

御不足ニ相成候ニ付非常之節儉被 仰出候外ハ無之場合ニ立至リ候間諸官省並府藩縣ニ於テモ猶

更節儉ヲ主トシ可成丈ケ冗費ヲ省キ御用途萬分之一ヲモ補益候様篤ト相心得可申事

第千九百九十六 十二月二十七日(太政官)

當年凶荒會計ノ目的不立就テハ官祿來正月ヨリ九月迄定相場一石八兩ノ宛ヲ以テ被渡下候事

但官祿十等迄ハ十分一十一等ヨリ十三等迄ハ十分ノ二十四等以下總テ十分三現米ニテ被渡下候

事

第千九百九十七 十二月二十七日(太政官)

元日

第千二百六二依リ
消滅

四方拜詰ノ輩丑ノ刺無遲々參 朝ノ事 朝拜奏任官以上非役華族實ノ刺無遲々參 朝ノ事

二日

判任以下ハ六位以上拜叙タリ正官省於テ長官相受奏聞

右ノ通更被 仰出候事

第千九百九十八 十二月二十七日(太政官)

諸 府 縣

當年諸道不實就中奧羽ノ諸國殆皆無ニ屬シ當節歲入總計ニテ百万石餘ノ御不足ニ相成候次第ニ付

諸府縣ニ於テ租稅ノ十分一豫備ニ儲蓄イタシ置度申立ノ儀尤ニ候得共前件ノ通會計ノ目的難相立

候間收納ノ金穀一先大藏省ヘ可相納候尤支配中ノ儀ハ可成丈勘辨致下方ノ疾苦救助候様盡力可致

旨被 仰出候事

第千九百九十九 十二月二十七日(沙)

神 祇 官

來正月三日於其官 御親祭被爲在候後翌四日ヨリ士民一同參拜被 仰付候條相達候事

第千二百 十二月二十七日(沙)

集 議 院

當分重大之議事無之ニ付閉院被 仰出候來春開院之儀ハ前以御達相成候事

但議員一先御暇被下候尤建言取扱之儀ハ可爲是迄通事

第千二百一 十二月二十七日(民部省)

諸 縣

少參事以上ノ面々容易ニ出京致シ候テハ日數職任相欠居候儀ニ付以來非常大事件ノ外出京致間敷

候若書面ニテ徹底難致事情有之出京建言致シ度趣有之節ハ前以相伺候様可致事

第千二百二 十二月二十七日(民部省)

諸 縣

各縣東京出張所ノ儀當春御達ノ趣モ有之候處當時諸方ニ散居各邸遠隔御用不辨ニ付今般馬喰町邸

内へ一纏ニ出張所相設候間以來御迴米納方其外書面ニテハ難行届御用等有之出京ノ向ハ右邸内へ

四年大藏省第百ヲ
以テ改ム

三年第七百六十四
ニ依リ消滅

三年第百九十九ヲ
以テ開院被仰出

三年第四十二ヲ以
テ改ム

三年第四十二ヲ以
テ改ム

參着其段相届可申是迄役邸有之候分ハ返上當時出張ノ面々ハ歸縣迄同所へ移住可致尤引移リ期限ノ儀ハ更ニ相達可申事

諸 縣

三年第二十四卷

第千二百三 十二月二十七日 (大藏省) 金札正金引替ノ儀期限後此節ニ至リ候迄納殘有之等閑ノ至ニ候右ハ最早不及引替候間御下ケノ金札來午正月二十日迄無相違可致返納候萬一右御預リ金札同日迄返納難相成節ハ事柄被及御札彈候條可得其意事

第千二百四 十二月二十八日 (布) (太政官)

八神殿御祭典之節參拜之官員階上ハ勿論庭上タリトモ脱劔拜禮可有之事

第千二百五 十二月二十八日 (布) (太政官)

來ル正月三日神祇官へ 行幸ニ付自二日酉ノ刻至 還幸御神事候事

但重輕服者僧尼參 朝可憚事

第千二百六 十二月二十八日 (太政官)

正月式最初被 仰出候分ハ御取消相成更ニ被 仰出候事

正月式

元日 寅ノ刻四方拜

卯ノ刻朝拜親王並奏任官以上非役華族

二日 卯ノ刻 判任以下官省ニ於テ長官相受奏聞

四日 卯ノ刻神宮奏事始

同日 政始

五日 卯ノ刻賀茂奏事始

氷川社奏事始

十日 巳ノ刻御吉書三毬打

廿日 同 社家

廿一日 同 法中

廿三日 同 御講釋始

廿四日 同 御會始

以上

第千二百七 十二月二十八日

妙法院門室
青蓮院門室
梶井門室

四年十一月二十四日
日管領ヲ廢ス

天台一宗管領被 仰付候事

第千二百八 十二月二十九日 (太政官)

來正月三日於神祇官 御親祭被爲在候後翌四日ヨリ左ノ通日割ヲ以士民一同參拜被 仰付候條相

達候事

四日 登前 職員
同後 直支配神職

五日 兵隊

六日 東京府支配士族

七日 同卒族

八日 諸藩士族卒族

九日 四組並村々

十日 五組並村々

十一日 五組並村々

十二日 四組並村々

十三日 三組並村々

十四日 五組並村々

十五日 四組並村々

明治二己巳年十二月 第千二百七 第千二百八

五年二月晦日陸軍省廳下爲ス

十六日 五組並村々
十八日 右同斷
右之通相達候事
十九日 五組並村々
四組並村々

〔第千二百九〕 十二月 (辨官)
兵部省當分鳥取藩邸へ被立置候間此段爲心得相達候也

〔第千二百十〕 十二月 (辨官)
諸官省門前等正月松飾ノ儀手輕ニ取設候様可有之此旨相達候也

〔第千二百十一〕 十二月 (民部省) 諸 縣

御國高調ニ付藩々支配所村高帳ノ儀當十月中雛形ヲ以相達候内へ除地認加へ差出可申尤關東最寄ノ分ハ精々手繰致早々可差出候事
但本文取調帳ノ儀租稅司地理掛へ差出可申事

〔第千二百十二〕 十二月 (民部省)
驛々附屬村々ノ内勤不動ノ分取調差出方ノ儀追テ相達候迄可見合旨申渡置候處追々割賦方差支難溢ノ趣相聞候ニ付取調ノ筋モ有之候間別紙雛形ノ通取調來午年正月廿日限無相違差出候様可取計事
但不勤村無之驛方昨年以來兵馬倉卒ノ際ニシテ諸勘定不相立驛方等ハ其段届出可申事

(別紙)

一 附屬村勤高何程

何藩 支配
何縣 宿

去已五月ヨリ何迄

人馬繼立其外諸賄共總入用割賦高

金何程

但高百石ニ付何程

内

金何程

差引

金何程

此 譯

何百何程村々出金ノ分

滯金ノ分

一 勤高何程

何支配

此割賦懸金何程

何國何郡 何村

一 勤高何程

何支配

此割賦懸金何程

何國何郡 何村

ノ何程

滯金

一 勤高何程
此割賦懸金何程

何支配 何國何郡 何村

一同

同

同 同

何程

合金何程

右之通不勤ノ分取調奉書上候處相違無御座候以上

何縣支配

何宿

何ノ誰

巳何月

何ノ誰

驛遞

御役所

前書ノ通相違無御座候以上

何縣

何ノ誰

巳何月

右雜形ノ通滯金村々支配譯ケ致シ差出可申事

第千二百十三 十一月 (兵部省)

西洋形商船蒸氣ハ百噸ニ付一ケ年金十五兩風帆ハ百噸ニ付一ケ年金十兩宛税金通商司へ可相納候事

但在來日本製商船ノ分ハ積石數百石ニ付金一兩宛可相納事

右之通相定候條嚴重可相守事

第千二百十四 十一月 (土木司)

川々堤防來春定式御普請ノ儀管轄限リ目論見帳ヲ以御伺可相成答ノ處未々御差出無之右ハ用水路

三年第五十七ニ依リ消滅

堰々等ハ組合村々管轄交互高割出金相極不申候テハ御入用取調出來不申殊ニ堰場御普請ノ儀ハ季順相後候テハ來春用水差支候ハ眼前ニ付當司ニ於テ傍觀難罷在候間早々取調來ル十七日迄ニ川除惡水路共都テ目論見帳御差出可有之候事

第千二百十五 十一月 (大藏省)

兵部省 外務省 大學
同東校 同南校 東京府

二日

判任以下年賀ノ節其官省ニ於テ御祝酒被下ニ付

一人分

數ノ子

酒一合五勺

重肴

牛房

吸物 蛤

串貝

但茶碗ニテ蓋土間直ニ蓋ニ用候積

右酒肴土器共代金一朱ノ積

但茶碗損料共

四日政始

長官ハ於 禁中御祝酒被下以下ハ其官省於テ被下候事

但一人分前同斷

右之通ニテ共御普請ノ儀ハ定額金ヲ以テ御取賄可有之候此段及御達候也

第千二百十六 十一月 (兵部省)

罪人吟味中病死之節取扱規則

凡死刑以上之者鹽漬又者假埋連累之者之罪科極テ後相當之所置スヘシ

制度變革ニ依リ消滅